
時間泥棒

有月 仮字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間泥棒

【Nコード】

N15680

【作者名】

有月 仮字

【あらすじ】

金と時間が搾取される街で、時間泥棒と呼ばれる少年が一人。彼が盗んだのは時間。権力者に奪われた正しい時間を取り戻し、時を告げる。

彼は戦わず、唯逃げる。大声と、足が速いだけの大泥棒。声を聞いて振り向けば、もうそこにはいない。

そんな彼に会いたいと願う少女が一人。彼に賭けられた賞金のためではなく、どうしても伝えたいことが彼女にはあった。

時は金なりと言う職人ギルドと、時は神の所有物だと言う教会と……

二人の時間泥棒は、それを否定し時の在り方を伝えるために、歌い
街を駆け抜ける。

0：悪魔の recitativo

物語の悪魔である私がもつ脚本能力とは、制限されているものである。

それは勿論世界や人を自在に操り望む結果に至ることは可能。時に傍観は楽しい暇潰し。自然な流れにちよつと脚色不幸を付け加えることで、十分いい劇を作ることには出来る。

それでも時にそれはつまらない。

私という主観だけが話を追う物語。それも悪くはないけれど、真実かと尋ねられれば無論走ではないわけだ。人間と悪魔の感性の相違。それを理解しようと思う心はないけれど、彼らの不可思議な行動に伴う感情を、追ってみるのもたまには面白いことかも知れない。劇にしてもそう。台詞だけの舞台では観客に伝わるものも少ない。歌を歌うように、役者の心をさらけ出させることが必要。

だから私は時に彼らと契約をする。私と彼らの瞳を一時交換することで、私はよりよく本の内側を眺められる。ほらもう文字が浮かんできた。役者達の胸の内が。

それではそろそろ語り始めましょう。これは1人の少年の生と死の物語。

昔々或いは、それに通じるほど遠い場所。そんな世界のとある場所。世界という概念の内では小さく狭い街という概念の中で、舞台の幕は上がります。

さあ、耳を澄ましてご覧なさい。貴方にもまもなく届きます。

街を駆ける小気味よい革靴の音。そして何処か愛嬌のある、調子外れのその歌が。

時間泥棒「七時ー！七時ー！起きなきゃ仕事が始まるよーっ！」

町人A「時間泥棒が出たぞっ！」

町人B「向こうに行ったぞ！捕まえるっ！あれを捕らえれば一攫千金！逃して堪るか！待ってる人間室くじっ！！」

町人C「捕まえるだつて？んな無茶な！？あんなすばしっこい奴どう捕まえるってんだ！」

町人A「いくら足が速いってもただのガキだ！その内力尽きる！今は唯追いかけるっ！」

町人C「追いかけるって言ったって……」

町人B「もう見えねえ……くそっ！化け物かよあいつっ！？」

新しい朝の中を走り抜ける少年が1人。彼の名は時間泥棒。人としての名前はなんだったかしら？皆様方にとつてもどうでも良いことでしょうか？劇に必要なのは役者の名称。そのモデルの人間に対する興味なんて悪魔にはなんの興味もありませんもの。些細なことです。

何はともあれ、下手くそで音痴で大声で上品さに欠けるその歌声。その時を告げる歌が、この街では風物詩で日課になっておりました。時間泥棒は、その名の通り時間を盗んだ大泥棒。彼の犯した大罪は、誰も殺さず誰も傷付けずに行われている罪。この時代のこの世界では、時間というものは酷く曖昧で、誰もが正確な時間を知ることが出来ませんでした。

だから愚かな人間は、時計を持つ裕福で狡賢い人間達からありとあらゆるものを搾取されていたのです。この大泥棒が現れるまで、それまでずっと。

言うなれば彼は、この街を救った英雄。それでもその日暮らしの人々にとつて金は何より大切に、懸賞金に目が眩み、そんな英雄を犯罪者として捕らえようとする薄情者ばかり。だけど所詮、人間なんてその程度の者なのでしょう。

その街の中で時間泥棒に感謝している人間なんて、せいぜい彼女くらいなものでしょう。

時間泥棒「七時ー！七時ー！七時四十分ー！もうすぐ仕事が始まるよー！」

歌姫「きゃあああ、しまったっ！寝坊だわっ！ー！」

寢床から飛び起きる1人の少女。そして響く歌声に気付き、彼女は窓の外を開けましたが、もうそこに時間泥棒はいませんでした。

歌姫「ああ、また見逃しちゃった。時間泥棒……どんな人なんだろう？」

母親「ソネット、やっと起きたのね？朝ご飯が出来てるわよ」

歌姫「お母さん、駄目よ。ちゃんと寝てなきゃ。ご飯は私が作るって言ったじゃない」

母親「そうは言っけどあんた今日も寝坊したじゃない」

歌姫「う……」

母親「あんたには迷惑かけてるからね。これぐらいは私も頑張らないと。今日も夕方まで仕事でしょう？ごめんねソネット……私のせいで」

歌姫「いいのよ母さん。工場って結構楽しいんだから！……って早く準備しないと遅刻だわあああああああああああああああああああああああああああ！」

少女は寝坊癖で、いつも遅刻ギリギリ。工場へ送れたなら少ない給料が更に罰金で少なくなってしまうですって。時は金なりとはよく言ったものですね。人間って面白い錬金術を編み出したものだわ。目に見えない時間というものから、金貨を作り出すなんて、まるで魔法みたいな話。

人の自由な時間が金銭に変わるといふのなら、これってこうも言えるんじゃないかしら？人は自らの寿命と引き替えに、金貨を生み出す力を持っているのだと。

つまりその取引は真摯でなければいけません。だからそこで相手を騙すと言うことは、人を殺すのと大体同じような意味。

工場主「ソネット！また遅刻か！？今日という今日は揺るさん！今日から一週間お前はただ働きだ！」

歌姫「ちよつと待ってください工場長！」

工場主「」

歌姫「私が起きたのは七時40分。そこから私は60秒で着替えをし。そこから1分会話、2分で食事をし、ここで4分。そこから20分掛かる道程を走って10分やって来ました」

工場主「それがどうした」

歌姫「つまり今は七時54分！工場が始まるのは八時から！つまり私は遅刻はしていません！」

工場主「馬鹿を言うな！私の時計はもう八時を五分も過ぎている！これはお前が遅刻をしたという動かぬ証拠だ！」

歌姫「そ、そんなあ……そんな誰だって弄れるじゃないですか！工場長の時計が合っているって保証はあるんですか？」

工場主「それならお前の言う時間が合っている保証もあるのか？無いだろう？貧乏人のお前は時計など持っていないのだからな！」

歌姫「……………でも、本当なんです！ちゃんと私は1秒1秒数えてきました！」

工場主「雇い主に口答えするとはけしからん！そんなに解雇されたいのか？この不況のご時世、お前のような小娘他に雇って貰える場所があるとは思えんか？」

歌姫「……………っ」

いつの時代も労働者は低い身分であるようで、雇い主にそう言われれば、従う他にありません。それがどんなに理不尽だと感じたとしても、人間の社会とはそういうものらしいのです。悪魔の私にとつては、何とも理解しがたく不思議な慣習。人間は罪を恐れるがた

め、多くの悪を見過ごす生き物。故に悪人ほど得をするというシステムが人間社会には確立されているのです。人間って本当に不思議な生き物だわ。

そう、本当に……人間って不思議。時間泥棒。彼もまた1人の人間。不思議な人間。いくら足が化け物並に早くても、彼を走らせる動力は感情という絡繰り。それは悪魔の私にとってとても不思議なものでした。

職人1「時間泥棒だっ！時間泥棒が出たぞ！？」

時間泥棒「八時！八時！」

工場主「ははははは！ほらやはり私が正しかった！罰としてお前は……」

時間泥棒「八時まであと五分！もうすぐ工場が動き出すー！遅れりや罰金6ペンスー！」

工場主「な、何いっ！？」

歌姫「ありがとう、時間泥棒……！」

少女が振り向けば、外にはやっぱり誰もいない。それでも少女を助けるように風のように現れ去っていく時間泥棒。それは偶然だったのでしょうか？それとも……？

まあそれは追々語るとして、そんなことが何度か重なる内に、少女は時間泥棒に深く感謝するようになりました。彼女にとって時間泥棒とは正義の味方で救世主で憧れのヒーローのようなものだったのでしょう。

少なくとも彼女は金に困っていても彼を捕まえ売り飛ばす気はありませんでしたし、もしも彼に会うことが出来たなら、心から伝えたい言葉がありました。いつも助けてくれてありがとう。精一杯の間しゃん言葉を彼に伝えたかったのです。

だから少女は時間泥棒に会いたがっていました。けれど、いつもいつも見逃して、話をするどころか顔さえ知ることが出来ずにいま

した。

何かと謎の多い時間泥棒。人々が彼について知っていることはそう多くはありません。その声色から、まだ幼い少年のようだと言うこと。足が化け物のように速く、声が大きいけれど、その歌は下手過ぎてどんな寝坊助さんも目を覚ましてしまうこと。

時間泥棒は日の出から日の入りまで1時間おきに時報を行う不思議な泥棒。

何を盗むでもなく唯歌い街を駆けめぐるだけ。唯その時間が正確すぎることから、街の裕福層からは憎まれておりました。彼に賭けられている莫大な懸賞金も、街の金持ち連中が持ち寄ったお金。その金に目が眩んだ人間達が時間泥棒を捕らえようと躍起になっていました。

時間泥棒が何処に住んでいるか。それは誰も知らない。不思議なことに、時間泥棒を追いかける人はすぐに彼を見失ってしまうのです。走ってくる彼を見た人も、目深帽子が邪魔してわからないと言います。運良く顔を見ることが出来た人間もいるにはいましたが、思い出そうとしてもよくわからない。それが時間泥棒だったのかと聞かれるとそうではないような気さえする。次に彼を見てもそれが彼だと気付けないうたこと。

ですから時間泥棒をそれとする手がかりは、彼の下手くそな時報ソングしかないのです。彼の大声、それだけが手がかり。

何処に現れるかはわからなくとも、唯じっと待っていればいい。時間泥棒は同じ場所にきっかり60分おきに現れると言います。何処に現れるかではなく何処にでも現れる。けれど何処にも留まらないからすぐに見失う。

まるで運命の女神フォルトゥナのようだとは思いませんか？チャンスは後から掴めない。今か今かと虎視眈々と待っていないければ、彼を見つけることさえ出来ない。

でも正確な時計を持たない人々にとって、それはとても難しいこと。気を抜いた一瞬に通り過ぎてしまう風こそが彼の正体。これはそこそこ正確な時計を持っている裕福そうでも難しい。美味しいものをたらふく食べて肥え太った人間に、身軽な時間泥棒を捕らえられるはずありませんから。

それにこの時代の時計は遅れを生じる機械。毎日ゼンマイを巻き、それでも次第に遅れる時計。振り子だって地震が起きれば止まってしまう。真実なんてそんな曖昧なもの。

けれど時間泥棒の持っている金時計。それは真実を刻む懐中時計。分類するなら水晶時計。けれどそれは本来何処の世界でも何世紀か後に発明され、何世紀か後に普及するはずの発明品。それはこの時代の人々にとってどんな物に見えたのでしょうか。

全ての悲劇の発端はその時計。時代を先取りしすぎた時計が奏でるのは悲劇の音色。

さあ、耳を澄ませてご覧なさいな。まもなく聞こえてくるでしょう。

盗人の時間が奪われるその音が……

0：悪魔のrecitativo（後書き）

脚本シリーズは演劇っぽい小説が目標。

情景が呼んで下さる方がイメージ出来るような文章を書けるように頑張りたいです。

一応短編小説なので、絵本シリーズよりはさくっと終わる予定。

1：少女と時間泥棒

> i 2 0 0 1 9 — 3 8 3 <

耳を澄ませば、彼の足音が、張り上げる大声が。今も聞こえてくるような気がする。

彼の名前は時間泥棒。きっと他にも名前はあるんだろうけれど、私はそれを知らない。

うつん、知らないんじゃない。今は知っている。それでもあの頃の私はそれを知らなかった。だからここでは彼を時間泥棒と呼ぼうと思う。その方が私にとってもなじみ深いものだから。

彼の名前は時間泥棒。その名の通り、犯罪者。でも彼が盗んだのは時間。目に見えないものよ。そんなのを盗んだからって捕まえて殺そうだなんて酷い言いがかり。

まあ、言い方を変えれば確かに彼は盗んだのよ。時間というか、それは時計ね。街の権力者が特注で作らせたっていう金時計。彼はそれを盗んだの。

更に突き詰めて言うなら、その時計を持っていたのは時間泥棒自身だったらしいから、盗んだのは権力者の方だったのかもね。少なくとも、街ではそんな風に噂されてた。

それじゃあそんな金時計を持っている時間泥棒ってどんな人なのか。みんな興味はあったみたい。でも、誰もそれを知らない。

何故かって？彼はとっても足が速いのよ。声が聞こえたと持って振り向いてももういない。風のように街を駆け抜ける。でもその声から、まだ子供だっていうのはわかる。たぶん男の子。凄く声が大きくて、彼が来ると私はすぐに飛び起きる。

人間目覚まし時計？本当、彼が現れるようになってから私は助けられているわ。仕事に遅れたら罰金とられてただ働きさせられてしま

う。

寝坊癖のある私にとって、時間泥棒という人は……救世主みたいなものだった、と言ったらちよつと言い過ぎ？でも、実際私は彼に感謝している。

彼はいつも街を駆けている。人が寝ている時間は流石に彼も働かないけれど。

三十分毎に現れて、人々に正確な時間を知らせる。

時計を持つことが出来るのは富民層だけ。貧民層や一般市民がそれを手にすることは出来ないから、私達人間は権力者達に自身の時を奪われ、騙されながら生きていた。

労働法に定められた時間より、早くから遅くまで。それを規定された時間とし……僅かな賃金しか与えない。私達は搾取されながら生きていた。彼がそれを変えてくれたのだ。

それは朝一番に古い時計塔の鐘を鳴らすところから始まる。職人ギルドの人々が、機械時計を生み出してから、もう誰も鳴らすことが無くなったそれ。

それを彼は一日三度鳴らす。目覚めと、仕事の開始、それから夕暮れ……仕事の終わる時間に。それ以外は通りがかった場所でその時その時の時を口に出している。

最初はみんな、それを感謝していた。だけど人間、それになれるとそれを忘れてしまうもので、その大声が迷惑だとか言う者もいて、権力者から彼に賞金が賭けられるとみんな挙って彼を捕らえようとした。確かに生きるためには食事が必要。それを購うための資金が必要。だからって恩を仇で返すのは、とても恥知らずなことだと思う。

勿論私も、彼に会ってみたいと思う。だけどそれは彼を捕まえるためじゃない。私はいつか言いたかったのだ。彼に一言、ありがとう。

＊

少女は夢を見ていた。それは二重の意味で。

ぼんやりとした頭を叩き起こすその声は、朝の空気の中に明るく響く。

彼の時報は歌として、その声を街へと響かせる。声自体は悪くないのに、その歌があまりにも調子外れで下手くそだから、少女はくすりと笑うのだ。

「七時！七時！七時半！」

「しまったああああああああああああああああああ！！」

その声にガバッと起き、少女はカーテンと窓を開け放つが、そこには姿もなければ影もない。遠離れた歌声が、更に遠離っていくだけだ。

同時にあちこちから少女のそれと同じ言葉や「そっちへ行つたぞ」「捕まえろ」など物騒な人々の声も上がる。中には半ば諦めたような声もある。

それはそうだろう。大体三十分待つてれば同じ場所に戻ってくるのが時間泥棒。張り込みしていればいつか捕まえられるはず。そう思うのが普通。それでも彼は捕まらない。だからそんな化け物をどうやって捕らえればいいのかと人々は悔しげに齒噛みする。

「本当に、しまった……」

これもまた、二重に意味で。

「急いで支度しないと」

仕事は八時から。朝食を口に行っている暇はない。だが、食べなけ

れば倒れてしまう。

「五分で食べれば問題ないわね」

少女は代わりに身だしなみをと整える時間を五分削った。髪の毛が癖を付けてはねていれるけれど気にしない。別に髪がどうだって、仕事は出来るから。

心の中で拍子を刻む。時間は歌だ。頭の中で歌を歌う。その歌を歌い終えるまでの時間を少女は知っている。だから時間泥棒が目安となる時間を教えてくれれば、少女はそこからの大体の時間を知ることが出来るのだった。

（でも、本当にしまった）

今日こそは見てやろうと思ったのに。時間泥棒のその顔を。

少女は夢を見ている。時間泥棒という存在に、ある種の憧れを抱いていた。彼はどんな姿なのだろう。感謝がいつの間にか憧憬へと変わっていた。

誰も追いつけないような素早さを持つことから、人間じゃないのかもしれないと言われている彼。それでもあの調子外れの歌。それが変な人間らしさを醸しだしていて、それが彼の愛嬌のように少女には思えた。

「それじゃあ母さん、行つてきます。帰りは遅くなるけどしっかり留守番しててね！」

「気をつけてねソネット。最近街も物騒だつて聞くわ」

「はいはい。母さんは心配性！私の心配するくらいなら物価と自分の病気の心配してて！ご飯、適当に作っただけどちゃんと食べてね！それじゃっ！」

病気の母を家へと残し、少女は階段を駆け下り家を出る。向かう先は工場だ。

父はいない。母は倒れた。生きていくためには子供でも働かなければならない。唯でさえ物価が高騰しているのだ。

「ソネット！！また遅刻だ！お前はいつも一番遅い。他の女工を見習え。奴らは時間より早くに余裕を持って行動している」

「そんなことはありません！また七時五十分ですよ！」

起きたのが七時半。着替えに五分。食事に五分。そこから走って十分。

職場まで大急ぎで走ってきた。家を出るときから口ずさみ始めた歌が終わったのは工場の入り口に入った時。工場までは走って十分。歌は十分で終わる歌。つまり起床から二十分しか経っていない。ぼったくられないように余裕を持ってやってきた。というのに少女はさっそく工場主に叱られている。

「だがなソネット！これを見る！ここの時計はもう八時を過ぎている。お前が遅れてきたという確かな証拠じゃあないか！」

「そんなの証拠になりません！誰かが（ていうか貴方が）ずらしたんじゃないんですか！？」

時計を持つ者は、そいうやって他人の時間を搾取する。

時は金なりとギルドの職人達は言う。それが本当ならば、少女は時間だけではなくその時間で他のことに費やし得られたかもしれない財までこの工場主に奪われていることになる。

時間泥棒なんて可愛いものではない。これは、人生強盗だ。

人にとっての時間とは寿命に等しい。その寿命をすり減らし、拘束されることで金を得る。拘束されて時間を減らし、それでそれに等しい対価を得られないとなればこれは大きな問題だ。

「遅刻魔が口答えをするか！そんなに給料を減らされたいのかソネツト！それとも解雇されたいか？お前みたいな小娘を雇ってやる心優しい職場が他にあるとは思えんが」

「……………」

こう言われれば、労働者は逆らえない。だけどそれはあまりに横暴だ。けれどここで何か言い返そうものなら首になる。

（そうしたら……母さんが）

決して治らない病気じゃない。お金さえあれば。お金を貯めれば彼女は治せる。

しかしそれには多額の資金が必要だ。高利貸しから金を借り、なんとか薬を与えてはいるが、長期間投薬しなければ治らない。その間も借金は増えていくばかり。ちゃんと金を稼いで返済に当てなければ大変なことになる。

だからこそこで罰金と称し、ただ働きさせられるわけにはいかない。

少女が俯いた視線を上げたその時……窓の外から響く声。

「七時！七時！五十分！」

時間泥棒だ。振り向けば一瞬、小さな影が窓の外を横切った。そんな気がした。

けどもういない。窓の外から吹き込む風が、調子外れの明るい声を運ぶだけ。

「ちょっと工場主！どういうことですか！」

「い、いや私の時計ではあれなんだが……そ、そうだ！時間泥棒！」

奴の時計の方が狂っている！」

「私達を騙していたんですね！！」

詰め寄ると工場主は責任を放り投げる。

既に仕事を開始させられていた人々も、同じく遅刻とされ今日一日ただ働きを約束させられた者も皆が皆不満の声を漏らす。

それはこの工場だけではない。隣も向こうもその前も。街のあちこちから不満が上がる。

その声に工場主達は悔しそうに顔を歪めて、時間泥棒の伝える時間を受け入れる。

「はあー……今日も働いたあ……」

少女が背を伸ばし、ボキボキと背骨を鳴らすと景気よく音が鳴る。ずっと同じ場所で同じ作業の繰り返し。意外とこれは疲れるものだ。繭から糸を紡ぐだけ。

（いや……まあ、茹で担当じゃないだけマシなのかもしれないけど）

夕暮れと共に聞こえる鐘の音により、仕事は終わった。耳を澄ませば街のどこから街を駆ける革靴の音、それから調子外れの歌声が聞こえてくる。それに少女は苦笑しながら、帰路へと着くのだった。

2：少年と歌姫

少年はポケットに手を入れたまま街を歩いている。

もう夜だ。人々は仕事を終えて家へと帰った。そうなれば自分の仕事も終わり。ポケットの中の金時計を読み上げる必要もない。

こうやって街を歩いていても誰も咎めることはない。大声さえあげなければ、誰も彼がその人だとは気付かない。

少年は特に目立った顔立ちをしているわけでもない。極々普通の少年だった。

それに人々は忙しい毎日を生きている。他人に構う暇など無い。

「よ、婆さん。また売れ残り？」

ふらふらと街を歩く少年が足を止めたのは一軒の店の前。店じまいを始めた老婆に少年が笑みかける。振り返る老婆は肩をすくめて大きく溜息。

「まったくあんたはいつもどうしてそうなんだかねえ。閉店丁度に現れるなんて」

「俺の腹時計がそろそろだって言ってたんだよ」

「はっはっは！まったくあんたは物乞いかい？仕方ないね」

「おいおい、言いがかりは止してくれよ。俺はちゃんとこの店の手伝いはしてやってるじゃないか。安い所から材料集めて来てやってるし、その分値段も他の店より安く出せるだろ？この不況だ。他から客は流れてくるようになったと思うけど？」

「そりゃあ、最近客は増えたけどね。それでもまだまだ黒字とは言えたもんじゃないよ」

老婆はもう一度深い溜息。

「でも……まあ、クロシエツト。あんたのうちも父さんが死んで大変だとは思うけど、あたしの家だつて大変なんだよ。私の老後の資金も稼いでおかなきゃいけないからねえ」

「婆さんまだまだ生きる気なんだ」

「あつたりまえさね。女は六十過ぎてからが華つて言うだろ？」

「言わないと思う」

「熟女の次は老婆ブームが来ると私は踏んでるんだよ」

「熟女ブームなんて一体いつ来たんだよ。耄碌したかい婆さん？」

「なんだい、失礼な子だねえ。ちゃんと覚えてるよ。あんたがうちの店にツケてる代金は」

「げ、……耄碌理由にぼつたくれちゃ堪らない」

互いに悪態を付き合つて、少年と老婆はけらけら笑う。

老婆には娘と孫がいたが、今はもういない。孫は流行病で死に、娘は裏町での商売が原因で病気で死んだ。娘には夫がいないし、老婆の連れももう死んでいる。独り身の彼女の元にこうやって少年が顔を出すのは何もメシをたかりに来ているだけではない。勿論、少年が老人性愛というわけでもない。老婆の定食屋が家の近所でメシが安くて美味い。それに誰かと安心してこうして会話をする事が出来る場所が少年にはそんなに無い。だからここを気に入っていた。

「あんたの親父さんの時計のお陰で、うちの店は助かつてるよ」

不意に老婆がそう言った。その視線の先には鳩時計。

こういう下町では近所付き合いが大事だと少年が言ったら、何を血迷ったのか近所に自作の時計を贈呈しに言った大馬鹿がいた。少年の父親だ。そういう阿呆なことをしているから稼ぎがないんだと息子に叱られても、微笑ながら謝罪するような穏やかな人だった。

少年は父に似た穏やかな時計の音に、彼を思い出していた。他の

者は金に困って時計を売り払ったが、この老婆の店だけはその時計をまだ残している。

「親父は駄目人間だったけど、職人としてはそこそこだったから……」

父の作った時計は滅多なことでは壊れない。ポケットの中の金時計と同じ時刻を鳩時計は告げている。狂うことなく今もまだ真実を刻んでいる。

ここに時計があるという噂を流すと、その時間を知るためにこの付近で働いている者が昼休みに利用しに来るようになった。昼間に覗くと遠目にもそれなりに繁盛しているようには見えた。だが、元々の値段が安い分、薄利多売ということ……多くを売らなければそうそう儲かるものでもないのだろう。

「まあ、時計のデザインは可愛いんだけどね……鳩の顔が妙にリアルって言うか首まで動くじゃないか。それが時計本体のデザインと合って無くてびっくり箱みたいだって評判だけどね。うっかり子連れでやって来たお客なんか、驚いて泣いてたよ」

「子供が？」

「いや、父親が」

「……………へ、へえ」

制作初期には本物の鳩を入れる籠を作ってその籠に装飾と仕掛けを付けてリアルハト時計にしようとかあの親父が企んでいたことを老婆に告げる気にはならなかった。

あの妙なハトへのこだわりは、それを息子である少年に止められたことでそれを中止したためなのだろう。

金持ちばかりが時計を所持している現状を憂い、時計を広く普及させたいという願いを持っていた父だが、一般市民の何割がハトを

飼っているというのか。時間になると籠が開く仕掛けを作っても、第一どうやってその一羽一羽を躡けるのか。そのまま逃げ出して戻ってこなかったら苦情が止まらなくなる。

少し考えれば解ることなのに、父はそういうことは解らない。妙な発想だけで暴走する彼を止めるのが少年の役割だった。

（……そう言えば家の柱をそのまま柱時計に改造したりしたことがあったな）

それも一本じゃ飽きたらず二本目に取りかかろうとして、ほっといたらそのまま家中の柱を改造して終いそうな勢いだった。家の耐震補強を下げるつもりかと叱ると今気付きましたという顔で驚愕の後、褒められたが父の考え無し加減に泣きなくなった。

つまらないことを思い出してしまったと、少年は老婆に礼もそこそこ家へと帰る。そこに音はない。

少年の家には誰もいない。母はいないし、父は死んだ。こうやってじっとしていれば、一日中誰とも会話をせずに時を送ることが出来る。事件直後は帰れなかった場所に、こうしてまた帰ることが出来るのは嬉しいが、以前とすっかり変わってしまった家の姿に虚しさを覚えることもある。

周りに時計工の息子は死んだ者と思わせて、浮浪者でも住み着いたと思わせるため。

定食屋の老婆だけは自分の顔を覚えていたが、後の近隣住民はとうに自分を忘れていた。それだけ影が薄いのだ。もしかしたら初めから、時計工に息子がいたことを知らない人間もいるのかもしれない。

ここは時を刻むことを止めた家。そこら中に転がったままの時計とそれ以前の部品。

もしも少年が父の後を継いでいたなら、これらの時計は時を取り戻すことが出来たかもしれない。しかし全ては仮定論だ。

少年は父の後を継ごうとしなかった。だから時計工の知識を持たない。止まった時を動かすことも、新たに時を刻ませることも出来ない。

そんな寂しさを紛らわすよう、少年は金時計のゼンマイを回す。彼は日に何度かゼンマイを回す。そうしなければ時計は止まってしまうもの。しかしこの時計が止まらないのは、別にこの時計はゼンマイ時計ではないからだ。それでもゼンマイを回すと内に仕込まれたオルゴールが鳴る。だからゼンマイを回すのだ。下らない仕掛けではあるが、音のない家に明るいまろディーを響かせるそれは、少年にとつての過去の全ての結晶だった。

少年は知っている。父親がどんなに時間を掛けてこれを作ったか。その日、その日にどんな顔をしていたか。それを思い出させるのがこの時計。

一日中街を駆けて足は疲れた。けれど頭は冴えている。どうにも眠れそうにない。

（ちょっと買い出しにでも行ってくるか）

夜の街は昼間と姿を変える。

昼は寂れた時計塔広場も、賑わいを取り戻し、一夜の夢を思わせる幻想的な風景に変わる。

華やかな衣装の女達。花屋に扮した者、歌姫や踊り子に扮した者。みな派手な真つ赤なドレスを着ている。あれはすべてが夜の蝶。年若い少女から年齢不詳の美女まで。

少年に女を買う気はないが、この近辺でやっている闇市には用があった。

父が家に残した形見を流せばそこその金にはなる。金にならない仕事ばかりしているせいで、質に流さなければ生活もままならないというわけだ。

「よ、おっさん」

少年は闇市の一角……腰を下ろし煙草を吹かしている中年に片手を上げる。彼の前には多種多様の商品。しかし彼は何を売るでもなくそうしているが、それは彼が買い専門の店だからだ。

「何だ？常連さんには見えないが」

「おいおい、常連の顔を忘れるなよ」

家から持ってきた商品を前に出すと、ようやく店の親父の顔がほころぶ。

「ああ、お前か時計坊主！」

「俺の顔じゃなくて商品を見て思い出す辺り相当だな」

自分の顔が印象に薄いものと少年は知っている。昼間の仕事が上手くいつているのもおそらくそのせい。ちよつと髪型や服装を変えればさつき会った者でも彼を忘れてしまう。足の速さと相まって、それは彼の家業を支える天性の才能でもあった。

「にしてもいつもどこからこんなもんかっぱらってくるんだい？時計なんて高価なもの」

「時計工がゴミ捨て場に捨ててる失敗作だよ」

「ほう、どれ……おっさんにその場所を教えてくれんかな？」

「それは俺の企業秘密だから言えないな」

「何が企業だ、盗人が」

店の親父が舌打ちしながら、金を放り投げてくる。その金は通常のレートより遙かに低い。

（人の足下見やがって……）

表で売ればもつと高値で売れる商品。修理が必要ではあるが、父親の作品はギルドの職人にだつて負けない。

ただ、表で売れば足が着く。見る者が見れば、その時計を作った者が誰か解るし、それを売りに来たという自分を怪しむ者が出てくる可能性もある。そうなると昼間の仕事の危険性も増す。

けれど、裏で流せば真つ当な職人の手に渡ることではない。だから大した腕ではないそいつらならばそれを作ったのが誰かなど気付かない。改造されて遠くに別の国に運ばれていく。

形見が姿を変えて遠くへ行くのは寂しいことだが、あの家でずっと止まったままよりは、誰かに使つて貰った方が時計にとつても幸せなのだ。少年は割り切っている。

にこやかに毎度ありと微笑む親父に肩をすくめて、少年は路地裏を後にした。

表の店に並べないような粗悪品。それでも材料として使うには問題ない。そういったものが表より安い値段で並ぶのがこの闇市。老婆へ届ける食材も、ここで購うことが多い。

今日は食材調達を頼まれていなかったが、明日食べるパンでも買つていくかと少年は市を廻った。

その時だ。夜風に乗つて聞こえてくる歌声があつた。これが初めてではない。この市に來ると、彼女の声が聞こえてくる。

彼女の歌を最初に聞いたのは、まだ父親が生きていた頃だ。その日の少年は、父親に頼まれて買い出しに來ていた。店を転々としている内に日が暮れて……その帰り道。見つけた闇市を覗き込んでいた少年の耳に聞こえたのがこの声だ。

綺麗な声。思わず聞き惚れる。ふらふらと、その声が聞こえる方向へ向かう足を止められなくなる。声の先……そこには一人の少女がいた。

喪服のような真つ黒なドレス。赤いドレスの女達のテリトリーか

らすれば場違い過ぎるその恰好。夜の闇に融け込むような喪服のドレスで少女は歌っていた。

その歌声は、はつきりと彼女の輪郭を描き出す。強い存在感を持っていた。

少女の前には籠が一つ。中にある金は僅かな金だ。足を止め、立ち止まる人間は多くても、こんなに歌が上手くとも、稼げる仕事ではないようだ。

立ち止まった群衆が、彼女に小声で何かを告げるが、彼女はそれには静かに首を振る。その様子に舌打ちしながらその者達は帰って行く。それを見た他の者達もやがて彼女の傍から離れ、赤いドレスの女を捜す。

一度中断された歌を、彼女は再び紡ぎ出す。なんとなく離れがたくて、少年は彼女の歌を最後まで聞いていた。少女がぺこりと礼をしたとき、周りにはもう誰もいないようで、顔を上げた少女と少年は目が合った。普段他人に気付かれないような生活を送っている少年にとって、他人と目が合うというのは稀であり……慣れないことで、彼は咄嗟に帽子を深く被って視線を防ぐ。その時、手にしていた財布が逆さになって、籠の中に所持金全てが流れ込む。

「え……？嘘、こんなに……いいんですか？」

「え、ええと……」

何かを言い返そうとした。けれどにこやかに微笑む少女に赤面し、口はもごもごと動くだけで何も発することが出来ない。確かに少女の歌は素晴らしかった。今更手が滑ったとも言い難く、少年はそこをそのまま立ち去ったのだ。

そんなことを思い出しながら、少年は……どうせ覚えていないだろう、そう思い少女のいる広場へ足を運ぶ。もう一度、近くで彼女の歌を聞いてみたかった。もう一度、彼女の顔を見てみたかった。

「あ！また聞きに来てくれたの？ありがとう！！」
「え……？」

広場へやって来た少年を見つけるやいなや、少女は歌を止め、少年の方へと駆け寄ってくる。自分の顔を覚えられていることに驚いた。驚きすぎて思わず逃げ出しそうになったほど。それでも少女が満面の笑みを浮かべているから、足が土に根を張ったように動かなくなる。

「そりゃ、忘れないよ。あんなお客さん初めてだもの」

歌は目には見えない商品。仮に歌の対価が金ならば、彼女の歌を最も評価したのは少年だ。

彼女は自分を認めてくれた少年に感謝をしているようだった。

「本当にあの時は助かったけど……でも、貰いすぎたから。今日はお礼にどんな歌でも唯で歌わせてもらいます」

ぺこりと少女がお辞儀をする。顔を上げた彼女の瞳が見開いていることに少年は気付き、振り返る。そこには柄の悪そうな男が二人。

「ただねえ……随分と景気がいいみたいじゃねえか嬢ちゃん」

「そんなら貯まりに貯まった利子付けて、今月分返済して貰おうか？」

「そ、そんな！！期日にはまだ時間があるじゃないですか！！」

「うるせーな！返せって言ってるんだよ！こっちは商売女にぼったくられて機嫌が悪いんだ！」

「そうだそうだ！こっちはギャンブルで負けて今日飲む酒代くらい返して貰いてえんだよ！！第一なあ、期日は今日の12時だっただろ？」

「ええ。いつも通りお昼休みに届けに行く予定です」

「だがなあ、今日は何日だ？お嬢ちゃん？」

「六日です」

「いいや。もう12時を回ってる。だから七日だ」

「そうだそうだ！それに時計は12時を過ぎている！」

「言いがかりです！午後の12時のことでしょう！？」

「俺たち浅学の人間にはよくわかんねーなあ？なあ兄弟？」

「そうだな、兄貴。12時は12時だ。広場の時計を見てみろよ。

12時を回ってやがる」

「大体歌なんかたかが知れてる。そんな儲からねえ商売するよりも
つと稼げる仕事を回してやるぜ。そうすりゃお前のおっかさんも喜
ぶってね」

「ふざけないでっ！」

自分勝手な言い分だった。端で見えていても彼らの身勝手さがよく
解る。

高利貸し達に迫られる少女を、なんとか助けたいと思っても……
少年は極々普通の人間だ。喧嘩に強いわけでもないし、街の支配者
や警官にコネがあるわけでもない。むしろそういう意味なら普通と
言うより追われる方の、危ない側の人間だ。

時計を売った直後ならまだしも、買い物後では持ち合わせもそん
なはない。だから少年は逃げ出すしかない。それしか自分には取り
柄がないと知っていた。彼は走って逃げて、物陰に身を潜め……そ
して声を張り上げた！

「0時！0時！午前0時！！昼休みまで12時間！」

その大声に、広場の人間達がざわめき立つ。

「近いぞ。この近くにいやがる！！」

「何だ何だ！こんな夜中に時間泥棒が出るとは！」

それを聞いた高利貸し達は、その大金に目が眩む。渋る少女からの取り立てを行うより、時間泥棒を捕らえた方がずっといいと思ったのだ。

「やったぜ兄貴！捕まえればすげー金がわんさか貰えるらしいじゃねえか！追おうぜ！」

「おう！」

酒が回っていた高利貸し達は、自分たちが泥棒如きに負けるはずがないと考え、大金を得た後の使い方まで妄想していたに違いない。しかしそれは間違いだ。時間泥棒には勝ち負けなど無い。そもそも戦わないから。言うなれば、逃げるが勝ち。逃げた時点で時間泥棒の勝利は確定している。

声を聞いた後に追いかけてももう遅い。

少年は適当に追っ手を誘導しながら高利貸しを少女から遠ざけ、それを撒いて家へと帰る。

「……金か」

少年は朝晩走ってくたくたになった身体をベッドに横たえて、ポケットから金色の懐中時計を取り出した。

「金があれば……か」

幸せの尺度を金で計るのはおかしいと少年は考える。

実際、彼の父親はそんなに稼ぎがない駄目男で、母親にも逃げられた甲斐性無しだ。それでも父との生活が不幸だったかと言えばそうではないと言い切れる。

いつもおかしいな発明ばかりで実用性の程がわからず、常人には理解しがたい才能を発揮する父は、ギルドでは面接で落とされ、ブラックリストに載せられるほどだ。数世紀先を生きているようなぶっ飛んだ人で、突拍子もないことを言い出す人でもあった。

そんな彼のテンポに付き合うのは疲れるが、そんな日常が楽しかったと言えは楽しかった。少年は、彼がいなくなつた家で生活する内にそれを痛感していった。

金＝幸福ではない。けれど、金がないことで逃してしまう幸もあることは……事実でもある。

金さえあれば取り戻せるものもある。金を手に入れることで失つてしまうものもある。

父は職人としての誇りと生活を選び、家庭を崩壊させた。父親としては立派とは言えない人間だったが、職人としての父は何時だって情熱を持っていた。

周りに合わせて、顧客に合わせて、標準的な商品を生み出すこと。それが金に繋がる。

そこで独創性を出して暴走するからいつも客に逃げられる。

時計をもつと身近なものとして普及させたいと、材料費より安い値段で販売何かするから赤字になる。腕はあつても儲ける気がない。それが父の正確の問題だった。

やりたいことをやれば彼の職人魂は満たされるかもしれないが、その他は駄目になる。職人魂を抑え、商品を生み出すだけの機械のように働けば、金にはなるし家庭だつて守れたはずだ。

金持ちにだけ時計を売って、ご機嫌窺つていれば、母親を連れ戻すことくらい出来ただろう。いや、父は……最後の最後で職人魂を折り、そのために仕事をしていた。

気に入らない仕事でも、誇りと情熱をやっぱり忘れずに……彼が創り上げた最後の時計は、それは素晴らしいものだった。

そうだ。本当なら、彼は父親に戻った。壊れた家庭をもう一度、やり直すことが出来たはずだった。

けれど、その時計はあまりに出来が良すぎた。それが大きな問題だった。

3：時計工と時間泥棒

「ただいま……父さん」

少年が家の扉を開いても、今は誰の声も聞こえない。明るく出迎えてくれる人は、もうここにはいないのだ。いや……どこにもいないのだ。

*

それが途切れたのは、少年が少女に会った翌日のこと。

今度の仕事が上手くいったら、一生遊んで暮らせるような大金が手に入る。職人としてのプライドをねじ曲げ、時を支配しようとしている権力者に時計を捧げる。

そうすることで人々から時間が奪われてしまうことになってしまふのだとしても……妻と娘を連れ戻せる。

「クロシエツト、はいこれ」

父親から手渡された紙切れに記されていたのはある番地のある建物。それが二人の居場所を記したもののだと知って、少年はすぐに家を飛び出した。母に、妹に会いたい。……でもそれは父の仕事が成功してから。それならせめて二人の暮らす場所を一目見たい。そこから聞こえるだろう二人の声を、一時でも聞いてみたかった。

もう何年也会っていない。母の顔も思い出せない。少年は自分が男だから時計工の跡継ぎとして置いて行かれたのだと知っている。だからこそ、絶対に時計工なんかなるものかと臍をねじ曲げていた。言い訳をするなら手一杯だったとも言ふ。父親は時計作り以外に何も出来ない男だったから、家事全般は全部少年がやらなければな

らなかった。非効率すぎる父の家事を見ていられなかったのだ。その傍ら時計作りの勉強なんて、とてもじゃないが時間が足りない。一日は24時間しかないのだから。

そんな忙しい日々の中、母と妹の顔も声も薄れてしまったが、それでも恋しさまで薄れることはなかった。

妹はどんな娘に成長しているだろう。まったく想像がつかない。紙の場所に至る道すがら、二人の姿を想像しては打ち消して……少年は街を歩いた。

古ぼけた建物。その一つの階を借りているらしい母と妹。その階から聞こえてくる声は鼻歌交じりの歌声だ。綺麗な声。決して大きな声ではないけれど、空気を震わせ……響く、凜とした歌声。

(……あれ？この歌、どこかで……)

その歌に歌詞はない。それでもその旋律には聞き覚えがあった。

「……………!?!」

少年が思い出したのは、広場であつた少女の顔。少女が歌っていたそれと、今聞こえてくるものは同じもの。

「ソネット？そろそろ時間じゃないかしら？ソネット……………」

もう！あんたつて子は鼻歌歌いながら二度寝なんて器用なこととして……、遅れるでしょう？」

「あと〓五分〓……………」

「ソネットっ！」

「…………え？あ、母さん！嘘っ！もうこんな時間！？工場遅れるっ！行ってきます！」

ドタバタと勢いよく扉から飛び出した、寝癖混じりの髪の少女。

咄嗟に物陰に身を潜めた少年に気付くことなく、大急ぎで階段を飛び降り走り出す。

「嘘……だろ……？」

昼間の少女は黒いドレス姿でこそなかったが、広場で出会った少女だと確信するには十分。来た道を引き返すだけなのに、少年の足取りは重かった。

「あの子が……ソネットだったなんて……」

自分の妹だとも知らず、うつかり一瞬でもときめいてしまった自分を恥じる少年。その後襲ってきた虚脱感と罪悪感には深い溜息を吐かざるを得ない。

「あそこの……そうそう。あの家の奥さん。娘さんと一緒に暮らしてる……」

「流行病に伏せったんでしょう？女手一つで子供育てるなんて大変よねえ。無理して働いてたのが祟ったんでしょうねえ」

何度目かの溜息の後、噂話をする女達の声が少年の耳に届いた。それが母と妹を指していることはすぐにわかった。

「最近じゃ、奥さんの薬のために娘さんが働きに出ているんですよ？工場だけのお金じゃ足りないから夜も広場で歌っているらしいわ」

「広場？あんな所娼婦の溜まり場じゃない。あんな小さな子までそんなことをしなきゃいけないなんて、嫌な世の中ねえ」

「あ、あの子はそんなことはしてない！」

あまりの物言いに、黙っていらなくなった少年はつい女達の会話を割り込んだ。

「彼女はただ、歌っているだけだ。歌姫だつて立派な仕事だ」

別にそういう仕事を責めるわけではない。生きていくためには確かに金が必要だと少年も理解している。それでも少女は本当に、歌を売っているだけなのだ。少女は金のために生きてはいない。生きるために歌っている。身体でも売れば歌より楽に金は稼げるかもしれない。でも、それは使い捨ての商品。代わりの女は幾らでもいる。だから無理して病で死んでも構わないと客の誰もが思っているのだ。どうせ人間なんて放っておいてもすぐに増えていくのだから。そんな風に考えている。

だから少女は歌うのだ。歌は見えないし、形にも残らない不確かな商品だけれど、そこには確かな意思がある。彼女の代わりは居ない。誰かが同じ歌を歌ったって、彼女とそっくりそのままという風にはいかない。歌は生きた商品。彼女の歌を生産できるのは彼女だけ。彼女が生きている間しか販売されない期間限定の……有限な商品。死の溢れているこの街で、生きるために歌うからこそ、彼女の歌は人の足を止める力があるのだと少年は考えた。

だからこそ、その事実を下世話な世間話に変えて、事実をねじ曲げるその会話が、聞いていてとても嫌だった。女達の会話には同情ではなく嘲りの色しかないのだ。他人の不幸を本心から哀れんでいるのではなく、それを見下して馬鹿にして……そして汚らわしい者を見るように語るのだ。言葉だけなら立派な台詞を並べ立てながら

「まあ！何あなた突然……」

「行きましょ、どうせろくな子じゃないわ。人に向かつていきなり大声を上げるなんて教育が行き届いていない証拠よ。親の顔でも見てみたいわ」

女達はそんな捨て台詞を残し消えていく。その見送りもそこそこに、少年は家へと走る。

馬みたいに父の尻引っぱたいてでも今度の仕事早く終わらせないといけない。そんな風に考えるほど、追い詰められていた。

（母さん……）

金が足りない。金が必要。金さえあれば、母の病気も治せるし、妹が働きに行くこともない。金、金、金……。父の今度の仕事が終われば何もかもが上手くいく。元通り。

「ただいま……！親父っ……」

駆け込むように開けたドア。その先に転がっていたのは……
父親である時計工。

「……父さん!?」

揺すつても彼は起きない。それどころか、揺すった両手にべったりと張り付く色がある。休息に血の気が引いていく。何故? どうして? そればかりが何度も脳裏を駆けめぐる。

「そくだ………時計……」

荒らしたような形跡はない。ただ……家中の時計が壊されている。物取りということはなさそうだが……もし仮に物取りの犯行だったなら、父が作っていた時計はどうなったのだろう。金時計には高価な部品ばかり使われている。例えまだ完成していなかったとしても溶かして売れば金になる。ふらつく足で、父の仕事を守らなければ

ばと……作業場へ。

作業場の中は他の部屋同様、滅茶苦茶に荒らしたような形跡はない。しかし時計を収めていた箱は空。箱の鍵も開けられている。これは父親自身が開けたのだ。そうするということは……その時計を渡すべき相手がここを訪れたからに違いない。

「くそっ……馬鹿親父っ！」

目先の金のため。飛びついた仕事。父がそれを引き受けたのは母のことを知っていたからに違いない。金が欲しかった。咽から手が出るほど欲しかった。だから客を選べなかった。だから口くでもない客に引っかけた、騙されたのだ。

*

ゼンマイを回す。流れるメロディ。それに合わせて歌ってみても、歌い方を知らない自分では調子外れの似ても似つかない何かを発するだけ。それに溜息を吐き、少年は旋律だけに耳を傾ける。

正確に時を刻む時計。これはゼンマイを回さなくとも半永久的に時を刻む機械時計。どういう仕組みで動いているかは時計について学んでこなかった少年には分からない。それでも絶対に狂わない時計は貴重。この時計を手にした貴族はあちこちの時計を狂わせて……この街の時を支配した。

父が殺されたのは、あまりに正確な時計を作ってしまったから。同じような時計を他の者に作られては堪らないと、……そう思ったのだろう。

それを逃げ足の早さだけが取り柄の少年が、盗み返して今に至る。時間泥棒とはそこから名付けられた呼び名。元々金も払わず材料費も払わず時計だけ奪った相手だ。取り戻しに行っても此方に非はない。

「金……金、金………か」

今自分は父親と同じ決断に迫られている。

人々を取るか、家族を取るか。

貧しい人々のために時を贈る。搾取された時間を人々の手に返す。それが時計を生み出すことが出来ない自分が、父の後を継ぐということ。それが時間泥棒。

時計工と時間泥棒ではやっていることは全く違う。それでも人に与えたいものはきつと同じだ。だから自分はこの街を走り回っている。父の姿を追っている。

それは後悔だ。自分が時計について学んでいれば、跡を継いでもいいと父に告げられていたなら。彼はどんな顔をしただろう。きつと喜んだ。いつものように優しく笑いながら、一つ一つ丁寧に教えてくれたはず。それでも時計作りに関しては妥協をしない人間だったから、叱られることもあったんだろう。そんなことこれまで一度もなかったけれど……

（父さん……）

言いたいこと、言えなかったこと。それでも伝えたかったこと。言えなかった言葉が自分の中をグルグルと回っている。回り続けている。その針が責め立てる。

父の遺志を継ぎ、時間泥棒を続けるにはこの時計が必要。それでも、これをバラして溶かして売れば金になる。

（母さん……ソネット……）

金さえあれば母の病気も治る。妹が朝から晩まで働く必要もない。

高利貸しから脅しを受けることもなくなる。また言いがかりを付けられて、期限に間に合わなくなれば、歌姫なんか止めて娼婦になれと無理矢理連れて行かれるかもしれない。いつも傍で守ってやることなんか出来ない。時間泥棒の血縁だと周りに知れれば、あの二人がどうなるか。自分を誘き寄せるための餌として酷い目に合わせられるかもしれない。最悪、殺される可能性さえある。

（金さえ、あれば……）

それでも金があれば……二人を救うことが出来る。

職人としての父の思いを継ぐか、父親としての父の気持ちを継ぐか。心の天秤が左右に揺れ動く。どちらも大切なこと。できることならその両方を果たさなければならぬ。

「いや、違う。どちらか一つを選ぶ必要なんかないじゃないか！俺はどっちも守るんだ……」

それはひとつの思い付き。

「……そうだ、あんな奴……」

大切な父を奪った貴族。約束も守らなかった人間。報酬も此方は受け取っていない。それならその分の対価を、金を奴から奪ってもいいはずだ。金時計は失わず、金も手に入る。時間泥棒は続けられるし、母と妹も幸せになることが出来る。

（父さん……俺が守るよ）

父が守ろうとした人々の時間も、大事な家族も。

＊

二度目の屋敷。忍び込むのは簡単だった。

少年は決して目立つ顔立ちではない。何処にでもいるような……それでもそんな人間は何処にもいない、一つの才能。三秒後には誰もが忘れてしまうような、空気に溶け込む平凡な顔立ち。

（金貨って重いんだな……）

速く走るに、その荷物は重すぎる。走ればジャラジャラと音が鳴る。忍込むには容易な場所も、逃げ出すには厄介な場所。この身一つなら兎も角、金貨という重荷が一緒なら話は別だ。

息を殺し、足音を忍ばせ……そつと一歩一歩歩みを進める。

「……………ん？」

その時暗がりの廊下で警備兵に出会して……少年は一気に走り出す。ジャラジャラと鳴る音に兵士は首を傾げる。もう顔も思い出せないしよく見えなかったけれど、子供がこんな時間に、この屋敷を訪れるなんておかしい話。この屋敷に幼い子供などいないのだから。その疑問に、兵士は思い出す。そんな話前も聞いたことがあるよ。うな……と。

「時間泥棒だっ……！」

兵士の声に、他の見張り見回りをしていた兵士達も目を見開いた。一度取り逃がした獲物。今度逃がしたら、今度こそ首が飛ぶ。二重の意味で。

「逃がすな！」

「そつちへ行つたぞ！」

滅茶苦茶に引き金を引く。今は自分の命が惜しい。そして金も惜しい。この不況のご時世、職を失うわけにはいかない。例え同僚を誤つて撃ち殺したとしても、あの獲物を捕らえれば咎められることもなければ褒美が出る。

金貨の音が聞こえる方へ、兵士達は銃口を向け、発砲。転がる金貨の音。それを追いかけて、追いかけて……………

4：兄と妹

もしももう一度君に会えるなら、まずは何から話そうか。言いたいことは沢山ある。けれど、最初に何を話そうか。いや違う。

たった一つしか話せないのなら。一言しか言葉を交わす時間が許されていないのなら、僕は何を伝えよう。

そうだ。せめて一言。

僕の名前を伝えたい。彼女にたった一度で構わない。その名を呼んで貰えたら……いや、それは無理だな。僕は犯罪者だから。

それならせめて……一度だけで良い。彼女の名前を僕に呼ばせてもらえないだろうか。僕はそれだけで救われるような気がする。

君の歌が好きだとか、君の声が好きだとか。歌っている君が……

…君が好きだなんてとてもじゃないけれど言えるはずがない。

そうだ。だから彼女の名前を呼ばせて欲しい。それで僕はもう振り切ることが出来る。僕の心は彼女の兄に戻るんだ。それならもう会えなくても構わない。僕は時間泥棒として時間を盗み続ける。彼女の他人として生きていく。

だけど、他人の振りをして通り過ぎる窓。気恥ずかしさと自分の身の上。それが僕の言葉を枯らしてしまう。

咽からヒューヒューと掠れた息が出る。声を出そうと腹に力を入れれば、撃たれた場所から血が噴き出す。

逃げなければ。もっと早く走らなければ。

今を逃げ切れば、何もかもが上手くいく。ただ逃げるだけ。戦う必要なんて無い。どうせ勝てるはずがないんだ。

いつもなら簡単にできること。それがどうして今日は上手くいかないのだろう。

引きずる足じゃ上手く走れない。後ろから足音が近づいてくる。

負けるものか。今日さえ逃げ切れればそれでいい。もう走れなくなってもいい。せめてこの金を渡さなければ。

そう思うのに、この足はどうして言うことを聞かないんだ。これは僕の足なのに。僕のものなのに、そうじゃなくなってしまったみたい。

走れって言っているのに勝手に転んで躓いて……大事な金貨をぶちまける。両手でそれを拾い集める。足音はもう間近に迫ってきている。全部拾う時間はない。適当に掴んだ分をポケットに詰めて立ち上がる……そう思い力を入れた掌に走るは痛み。大きな靴で思いきり指を踏まれているのだ。

ああ、時間がない。時間がない。僕にはもう時間がないのだ。彼女と、たった一言の言葉を交わす時間さえ……彼らは許してくれないだろう。

*

「ぎゃあああああああああああやっちゃまったあああああああああああああああ！！何で何で何でもこんな時間なの！！」

少女は絶叫。窓の外の日は高く……はない。低い場所にある。ただし方角が正しくない。あの陽はこれから昇るのではなく、沈むのだ。時刻は夕暮れ。

少女は走る。しかし、次第に足は遅くなる。

工場になんて言い訳をすればいいのか。解雇されたら新しい職を……？他に雇ってくれる場所なんて本当にあるのだろうか？

寝坊をしたせいで高利貸しへの返済が出来ていない。これから自分たちはどうなってしまうのだろうか。不安で仕方がない。このまま走って、何処へ行けというのか。何処へ行ってもそこに希望などありはしないのに。

とうとう少女の足が止まってしまふ。行く宛もなく、かといって

家にも帰れず……街の中をふらふら彷徨う。朝と夜の狭間……夕暮れという不思議な時間帯。昼の人々が家へと帰宅し、夜の人々が街へと繰り出すその時間。誰もが自分のことで手一杯。他人に感心などないはずの街。そんな街中が騒がしい。いつもと違う騒がしさ。会話など交わすはずのない別の世界を生きている昼の人間も夜の人間も……顔を見合わせあつちこつちでひそひそと立ち話。

「あの……何かあつたんですか？」

これはただ事ではない。それに気付いた少女は近場の人間に理由を尋ねる。

「ああ、君まだ知らないの？」

「ほんと、大ニユースよ！あの時間泥棒が捕まったの！」

「時間泥棒が……捕まった！？」

不意に少女の全身を寒気が襲ったのは、夕暮れの風のせいではなかった。

「あんな普通の少年が時間泥棒だったなんてなあ……」

「そうねえ……流石にちよつと可哀想だったわあんな子供だとは思わなかったもの」

「おいおい、それは言い過ぎだろ。あいつは泥棒だぜ。悪人だ。必死に働きもせずに人の物を盗むような奴は罰が当たって当然だ。俺たちは死に物狂いで働いてるんだ」

「あのっ……それっ！どこですか！？」

「え、あつちの通りの方だけど……」

通行人に一礼して少女は聞き出した通りへと駆けだした。聞き出したその場所は少女の家の付近の路地裏だ。その路地に辿

る道に、点々と転がる金貨。それが彼への道しるべ。でもそれは金色以外の色もある。薄汚れた暗い色。血濡れた金貨に導かれ、少女はそこに辿り着く。そしてようやく理解する。通行人達の言葉の意味を。

「……………っ!？」

確かにそこに、彼はいた。小柄な少年だ。それが転がっている。身動き一つ取れないまま……ぴくりとも動かない。

別に彼は縛られてもいない。彼は自由だ。それなのに彼は動かない。

少年はもう、走れないのだ。

野ざらしの彼の足には無数の傷跡。ぽっかりと空いた穴がある。体中傷だらけ。私刑にでも遭ったのだろう。

少年には片手がない。すぐ傍に切り落とされたそれが落ちている。折り曲げられたバラバラの指も転がっている。彼は最期まで何かを掴んでいたのだ。それを死んでも放さなかったのだ。だから無理矢理それを略奪者は奪っていった。おそらくそれは、彼がいつも大事にしていた金時計だろう。

もう片方の手は身体にこそついてはいるが……おかしい方向に拉げている。その下には大事そうに守られている血まみれ金貨。時間泥棒が今回盗んだのは時間ではなく、金貨だった。どうして彼はそんなものを盗んだのだろう。彼も人間である以上、生きるためには食べるためには金が必要だったのだろうか？少女は漠然とした心でそう考える。

憧れていた存在が、唯の泥棒に成り下がった姿。理想と現実の相違がそこにある。

少女は時間泥棒がとても凄い存在だと勝手に思い込んでいた。それでもそこに転がっている死体は普通の子供。自分とそう年も変わらぬ少年の姿。あっけなく殺されてしまう、死んでしまう……唯の

普通の……人間だった。

ずっと彼には伝えたい言葉があった。けれどそれはもう彼の耳には届かないのだと知って……何とも言えない思いが芽生える。

とても空虚なその気分。心の中が空っぽになってしまったような感覚。引き寄せられるようにふらふらと遺体に近づいて、少女はあ
ることに気がついた。

「……あ!？」

その少年には見覚えがある。正確にはその帽子に。真深く被ったその帽子に素顔を隠している少年。二度も歌を聞きに来てくれた相手だ。暗がりの中で出会った彼の顔はよくわからない。それでもその帽子のことは覚えている。

（あの人……時間泥棒だったの!？）

確かに思い当たる節はある。あれは昨日の話だ。少年に会ってすぐ高利貸しが現れて……いつの間にか少年は消えていて、代わりに時間泥棒が現れた。高利貸しは彼を追って消えていき、少女は理不尽な請求から助けられたのだ。

毎朝起こしに来てくれるだけじゃない。工場主とのトラブルも、高利貸しとの揉め事も……いつも助けてくれたのは時間泥棒。

たった一言、ありがとうと伝えることももう出来ない。それが悔しくて仕方がない。それを認識した途端、少女の両目からあふれ出す涙。

何も言えないまま彼の何もかもが奪われていく。失われてしまう。忘れられる。消えてしまう。

時間はまた奪われた。彼が街を歌い歩くことはない。この街はまた嘘の時間に騙される。金は金のあるところに集められ、人々は時間に繋がれた奴隷のように酷使されて死んでいく。そのことに気付

いている人が一体どれほどの街にいるのだろう。

通り過ぎる人々は、少年のために涙など流さない。悪人が悪人らしい最期を遂げたのだと鼻で笑っている。皆が自分のことで手一杯彼の行動を有り難く思いながらも金のために彼を捕らえて売ろうとしていた人間達だ。懸賞金の消えた時間泥棒にはもう何の興味もない。あるのは未練。ああ、もっと早く捕まえられていれば今頃こいつを殺した人間が手にした金は自分の者だったのにと悔しがる声ばかり。

街が嘘に飲み込まれていく。誰も真実なんて見えていない。目先のことで精一杯。この少年が何を目指していたのなんて誰も知ろうとはしない。いや、少女自身わかっていないのだ。何故この少年が最後の最後で金貨なんてものを盗もうと思ったのか。

今はもう何も語らない彼にそれを尋ねたかった。彼をもっと深く知りたかった。

（そつだ。私は……この人の名前さえ知らないんだ）

何か彼に繋がるものを求めて、そつと彼の帽子へ手を伸ばす。そこに名前くらい記されていないだろうか。

もし少年が素顔を晒していたなら、少女は彼を忘れてしまっていたかもしれない。それでもそれが隠されていたから……それがどこか印象的で、記憶に留められていた。そつと、彼の帽子を外し……少女は今度こそ、絶句した。

（クロシェット………？）

その名前はどこかで聞いたことがある。いや聞いたと言うより……口にしたことが何度もあったはずの名前。

（……………お兄ちゃん！？）

視線を手にした帽子から少年へと戻し、その顔を少女は凝視する。名前一つ。それでそれまで見えていなかったものがそこから見いだせる。

忘れかけていた兄の顔。その面影。何年も会っていない。それでもそれが自分の兄なのだと知ってしまった。

（お兄ちゃんが……、時間泥棒……）

時間泥棒。彼の噂は何だった？

時計工の息子。貴族に父を殺されて、父親の最高傑作……金時計を奪われた。そして時計と時を盗み返した大泥棒。

少年の死は、父の死だ。家族の二人がもうこの世の何処にも居ないのだと無惨に少女に死体は語る。

少女は路地に座り込む。他にもう、何をすればいいのかわからない。何もしたくなかった。何も聞きたくない。見たくない。何故彼が金貨を盗もうとしたか、わかってしまったのだ。

街の喧噪。心ない言葉が右の耳から左の耳へ……飛び込んでくる。何も知らない人間達が、時間泥棒の死をせせら笑っている。根も葉もない噂。自身の優位を確認するのが目的の……口先だけの同情。

人々の悪意の言葉を打ち消すように、自分と彼を守るために少女は口を開いた。大声で歌えば何も聞こえなくなる。だから泣きながら歌った。

やがて何も聞こえなくなる。打ち消したのではなく、少女の歌は人々から言葉を奪ったのだ。少女があまりに悔しそうに悲しそうに歌うものだから、誰も何も言えなくなった。聞く者の耳から少女の感情が響き渡り、伝染する沈んだ心。

夕暮れを告げる鐘は鳴らない。代わりに街には少女の歌が響き渡った。

5：金貸し女王と小夜啼鳥

私にとって金は全知全能。神が如き存在。
金さえあれば全ての願いは叶えられる。

幼き日、黄金色の輝きに魅入られた私は、取り憑かれたように金を集めた。

とりあえず手に入る物は何でも買ってみた。地位の椅子も権力も。それでも何処か虚ろな日々。

そんな退屈なある日のこと……通りかかった街角で、出会った一人の愛らしい少女。

赤いドレスの夜の蝶達に紛れて霞む、古ぼけた黒いドレスは喪服だろうか。夜の闇に紛れて歌う彼女は凜とした声で鳴く小夜啼鳥。そんな彼女の歌を聞き、歌う彼女の姿を認めたあの日の私は思ったのだ。彼女を墓場鳥にしておくのは勿体ない。

もっと彼女に似合うドレスをあしらえて、美しい鳥籠を用意しよう。そこで彼女を歌わせたなら、どれだけの黄金の雨が降るだろう？ 想像しただけでぞくと肌が震える。

少女はなかなか折れないが、手に入らなければ入らないほど取引は燃えるもの。その過程こそが商売の神髄。

抵抗する獲物を屈服させ手中に収めた時の達成感。それは黄金とはまた違う強い力だ。それは商いというものが内に秘めた魅力だろう。

嗚呼、だからこそ止められない。これだから、金を集めるのは病みつきになる。

さあ、今宵も彼女を捜しに出かけよう。今日こそ私の鳥籠に、彼女を捕らえてあげるんだ。そうすればそれは宝石箱より価値ある百両箱。彼女は私の金の鳥。誰が渡してなるものか。

少女は郊外まで歩く。野ざらしの少年を抱えて、引き摺って。そうやって辿り着いた頃にはもう辺りは闇に包まれていたが、少女は気にすることなく穴を掘る。少年を……兄を埋めるための墓穴だ。

少女にはささやかな夢があった。物心つく頃にはもう傍から消えていた父と兄。

母は少女を育ててくれた。だから少女が父を見限った母を恨むことはなかった。

父は誇りを持った職人だった。だから母が別れて尚、誇らしげに語る男を憎むこともなかった。

夢が現かわからない、朧気な記憶の中。聞こえる声がある。視覚情報の薄れたそれが、現実の物だったかどうかは分からない。それでもその中には少女自身の声もある。笑っているのだ。誰かと一緒に。時折その声が途切れるのは、それが食事風景だからだろう。その見えない記憶の中では母と誰かも笑っている。

両親と兄と少女。四人でもう一度食卓を囲むこと。この不確かな記憶を現実へと戻したい。それが一日でも二日でも構わない。それが、少女の夢だった。

歌姫には歌があった。それでもそこに心はなかった。空っぽの歌。唯歌が好きで歌っていた。それでもそこに意味はなかった。だから街ゆく人の足を止めることなど出来なかった。精々闇に融け込む黒いドレスを一瞬間から切り離し、好事家に一晩の誘いを口にさせる程度の歌だった。

思い詰めてもいた。望むような大金が手にはいるのならそれはそれで構わないとも思い始めていた。それでも女なんて星の数。壊れたら捨てられる。捨てられたらそれで終わり。使い捨ての道具。ミイラ取りがミイラになっては駄目なのだ。だから金是要るが、健康な身体も必要だった。

それでも母のためには金が必要。最後までちゃんと真摯に歌を聞いてくれた人。そんな人ならその手を取ってもいいかもしれない。そんな賭を少女は自分に科した。

そんな賭を初めた夜に、現れた少年が一人。彼は暖かな陽色の髪。夜の闇でもその輪郭を明確に表していた。それでもその顔を、はつきりとは思いつけない。すぐに帽子を目深く被ってしまったから。

彼が歌の対価として置いていった沢山の金貨。それがあつたから、思い詰めていた心もしばらくの家計も救われた。言葉少なに消えていったその少年に、もう一度会いたくて……少女は同じ時間に同じ場所で……同じ歌を歌うようになった。言いたかった言葉はありがとうと、もう一つ。少女は少年に、そのどちらも伝えることは出来なかった。後者に至っては伝えることさえ許されないのだ。

「……っ、クロシエ……兄さん」

兄は冷たい土の下。少年も冷たい土の下。噂が真実なら父も同様。夢は夢のまま消える。それが叶うことは永遠にあり得ない。

盛り上がった土の上、ポタポタとこぼれ落ちていく涙に少女は嘆く。嗚呼、むしろ此方が夢ならばどんなに良いかものか。

目を開けて、目覚めれば消えてしまう夢。その向こう側には父も兄もいる。母も病気になんてかかっている、そんな場所がそこにあるのなら……こんな夢など捨ててしまつて構わない。

早く目覚めないものか。瞳を閉じたり開いたり……それを繰り返す度に涙がこぼれる。それでもこの夢は覚めない。

それでも諦めきれずに繰り返せば繰り返すほど、こここそが現実なのだ。痛いほどわかってしまう。それでも逃げ出してしまいたい。どこかへ。何処へ？

そんな少女の背中に迫る一つの足音。

「やあ、お嬢さん」
ソネット

「金貸しレーヌ……あなたが私に何の用？」

「何の用とは相変わらず君はつれないな、今日が何の日か忘れたと言っても言うのかな？」

にこやかに少女の前に現れたのは、紳士服に身を包んだ一人の青年。顔立ちは美しいのに人を突き放すような笑みを浮かべた不思議な男。

「どんな事情であれ、約束を破るのはよくないことだ。君は返済期限を守れなかった。そうだね？」

その金貸しは、街中の高利貸しをまとめる頭。街の裏側の支配者のような男。少女に金を貸したのがその下っ端であれ、元を正せばそれはこの金貸しも同然。

返済できなかった場合、少女の処遇を決める権限を持つのもこの男。

「……………」と、本来なら君のその後を決めたい所だったんだけど、君の代わりに支払いに来てくれた人がいてね、残念ながら返済されてしまった。おまけに君が私から金を借りる必然性も消えてしまつて私も困っているところだ」

「どういう……こと？」

「いや、保険というのは偉大だなと言つたまで」

「母さんに何をしたの!？」

そこまで言われて少女は気付く。そう言えば、寝坊をして急いで家を飛び出した。母がいたかいなかったか、確認するよりも早く。

「私は何もしてはいないよ。唯、彼女が自ら自決しただけさ。君の家を昼頃訪れたときにはこの手紙があつてね……夕暮れには近場の

水辺に浮いているところを発見された」

「……そんな」

「あの大泥棒が自分の息子と知って余程ショックだったのか。或いはこれ以上君に迷惑を掛けるのも辛かったのか」

金貸しは何処で手に入れたか少女が見当もつかないような事柄を、金を使って仕入れたのか多くを知っていた。そんな怪しげな金貸しから手渡された手紙は、母の遺書。そこには金貸しが今まとめたような言葉がもつと長い文章で記されていた。

兄と母。一日の内に二人も大切な家族を失った。世界にたった一人取り越されてしまった我が身を知って、少女は冷たい土に膝をつく。そうなることが全て計算の内だったとも言わんばかりの洗練された優雅な仕草で、天涯孤独となった少女へ金貸しは手を差し伸べる。しかし少女は顔を背けた。

「今の職場も首になったんだろう？ いい加減私の申し出を受け入れる気には？」

ある夜に……歌っているところに客として現れた金貸しは、その時から度々少女の元を訪れ歌姫を辞めるように少女に言った。しかし少女がそれに頷くことは一度もない。

「……私を娼婦にでもするつもり？」

「下僕共の口の悪さは勘弁願いたい。私はそんなつもりではないのだけれど……下まで上手く伝わらなかったことは素直に詫びよう。

それでも君は私の所へ来るべきだ。もう足枷もなくなっただろう？ 君は自由なんだよ嬢さん^{ソネット}」

「母さんをそんな風に言うのは止めてっ！ 足枷なんかじゃない！ 私の大切な母さんよ！」

「君はおかしな事を言う。母親なんて唯の他人だろう。唯、君をそ

んな場所に落としただけの。君のような才能溢れる人を社会の底辺に産み落としたというだけでなく、君の大切な時間を、つまりは金を彼女は貪った。どうして君が彼女を憎まないのか私には不思議でならないよお嬢さん」

「私にはあなたこそわからないわ。どうしてそんな言葉が言えるの？ そんなの当たり前でしょう？ 世界にたった一人の私の母さん、家族だったのよ！ それを他人だなんて口が裂けても言えないわ」

怒りの力で少女は冷たい土を蹴り上げ立ち上がる。少女は金貸しを睨み付け、凜と言葉を響かせた。

「貴方はこの街の、この世界の全てをお金で言い表せるとでも思っているの？」

「ああ、勿論」

至極当然と頷く金貸しに、少女は首を振ってその答えを拒絶する。

「そんなの絶対おかしいわ！」

「そんなことはないさ。金さえあればこの世の全ては手に入る。豪邸も馳走も薬も、地位も権力も、そして金があれば人間だって買えるだろう？」

「……………そんなの、身体だけだわ」

「さて、それはどうだろう。なんなら試してみるかいお嬢さん？」

「お断りだわ。私には……………仕事があるもの」

「まだあんな暗がりで歌うのかい？ 君が聞かせたい相手ももついいのに」

軽い溜息で金貸しは肩をすくめる。

「君の歌は確かに一つの才能だ。一度君の歌に耳を傾け君をじっと

見つめれば、誰もが痲薬のようにその虜になる。それでも君の顔がよく見えなければ意味はない。君は君の兄さんと違って、印象的な子だから」

普通すぎる少年……誰の記憶にも残らない顔を持つ兄。その妹ははつきりとした顔立ちで、空気の中に明確な輪郭をそこに残す。顔の造形がそこまで異なるわけでもないのに、相手に与える印象が二人はまるで異なった。

そんな少女の才能に酷く入れ込んでいる金貸しは、無駄に装飾された長つたらしい言葉で必死に掻き口説こうとするも少女の視線は冷たくなるばかり。

「ねえ、小夜啼鳥のお嬢さん。いくら君の声が綺麗でも止まり木の上まで夜の獣は足を運ばない。近場の肉に噛み付いて、嬌声を上げることで空腹を満たす。その声は君の歌はその低俗な声に掻き消されてしまうんだ。だから私は思うんだよ。君があんな所で歌っているのは実に惜しい。君はもっと金を稼げる。私がそのための舞台を用意しよう！君はもっと広く明るい、太陽の下で歌うべき人間だ！」

「……そんなの嫌よ。……確かに生きていくにはお金は要るわ。だけど私は歌にそんな価値を付けたくない。だからあなたのようにお金集めのための道具にしたくないの。歌は無価値だからこそ意味がある。無意味ではないのよ」

「商品価値の他に利用価値が歌にあるとは思えないが……」

「……言葉はきつと空気なんだわ。そこにあつて見えないし触れられない。それでもそこにあつて人を生かしてくれるもの」

「それでもお嬢さん、歌では腹は膨れない。それだけでは生きてはいけない。そうだろう？」

「それならお金だつてそれだけではお腹いっぱいにならないわ。貴方は金貨を焼いてソースでもかけて食べているのかしら？」

「いくらグルメな私でもそれは流石にやったことはないな。君はそ

んな風にお金を使っているのかい？」

「嫌味な人ね、そんなはずないでしょう？大体……もう私がお金を借りることはないのだからあなたとこうして話をする必要もないはずだわ。私のことは放っておいて。歌えるのは別に私だけではないのだから、私に構う必要はないはずだわ。私より上手く歌える人なんか探せば何人だって見つかるわよ」

「……言われてみればそれもそうだ。君の笑顔や声は確かに愛らしいが、君以上の歌姫は幾らだっているにはいるね」

問答の末少女にそう指摘され、金貸しは我に返る。少女の言葉はもつともだ。それなら何故自分は彼女を手に入れようとしているのか。

仕事の過程を楽しめそうな物件だから。金儲けに繋がるから。

それでもより多くの金を生むためなら、もつと迅速な仕事。時は金なり。それは確かな言葉だ。時間を費やす意味がそこにないなら、費やした以上の金が返ってくることが保証されていなければこうしていることはまるで無意味だ。それならば今自分がしていることは何だろう。金貸しは首を捻る。

「ソネット？」

意見を尋ねようと金貸しが視線を向けた先、少女の姿は既になかった。

*

家の場所は金貸しに知られてしまっている。帰りを待つ母ももういない。そんな家に帰る気も起きず、少女は夜の街を一人歩いた。行く宛などない。それでも立ち止まるわけにはいかない。

下心丸出しの笑みを浮かべる男達、それをあしらうように愛想笑

いを浮かべる女達。それが夜の街。金が行き交い、金が飛び、偽りの愛に彩られていく街。足を止めればその中に引き込まれてしまいそうに怖かった。時折呼び止められる声を振り払い、声から遠離るように足を進めて……体力の限界というところまで来た時には、見知らぬ路地に迷い込んでいた。

困ったことになった。そんな風に少女は考えたが、すぐに思い直す。

残された時間。何のために、誰のために？それがどうして自分の中にあるのかわからない。だからそれを無駄に消費しても何も困らない。夜の闇は一寸先は闇。まるで自身の未来のよう。そう思えば引き返すのは癪。見知らぬ場所でも構うものと前へ前へと足を進める少女の前に、一軒の店が目に入る。

そう言えば今日は何も口にしていなかった。ポケットを探れば僅かの金もある。背に腹は代えられない。いくら悲しくても腹は減る物だ。現金な自分の身体に溜息を吐き、少女は店の扉を潜る。

「はいはい、いらっしやい……悪いんだけどもう今閉店するところだね……」

出迎えてくれたのは一人の老婆。彼女が顔を上げると同時に鳥の声。何やらリアルすぎる造形のハトが飛び出す奇妙な鳩時計が、もう9時になったと教えてくれる。

鳩が豆鉄砲を食ったよという言葉があるが、老婆が少女を見つめる表情は正にそれ。

「あんた……無事だったのかい！？まったく年寄りにいらん心配かけるんじゃないよ！寿命が三日縮んだよっ！この年での三日が如何に貴重かってのをお前さんはわかってないね」

「あ、あの……何の、お話ですか？」

「ん……？」

少女の声を聞いた老婆はしわくちやの眉間と目元に更なるしわを寄せながら、少女の顔をじっと覗き込む。

「おや、人違いかい？すまなかったね……うちの常連によく似ていたもんでね」

老婆が寂しげに苦笑。

「……間違えたお詫びだよ。店終いだけど一食あんに食わせてやることにしようかね」

店の戸締まりを始めた老婆。それを唯待っていることが出来なかった少女はその作業を手伝うことにした。先程の話の続きを尋ねてみたかったという理由もある。

「いや、ありがとね娘さん。助かったよ」

老婆は愛想良く笑い、厨房へと戻って食器を乗せた盆を運んでくる。そして盆をテーブルへと置き一息吐いた後、少女が尋ねたいことを老婆は知ってか知らずか語り出す。

「時間泥棒って知ってるかい？」

「時間泥棒……？」

知っている。こくと頷く少女に老婆は微笑んだ。少女の表情がその名前に否定的な色を浮かべなかったからだろう。

「あいつはうちの常連だったんだけどね、いつも閉店間際に客が捌けたところにやって来て、残りの飯をたかりに来る悪ガキさ」

嬉しそうに、少しだけ誇らしげに、けれど呆れた風な言葉を装う。
……それでも語る口は愛情に満ちていた。

「犬でも三日飼えばって言うだろ？……いつの間にか孫みたいに可愛くってね。お互い減らず口ばかりだけど、それなりに楽しくやってたもんだ」

この店に、兄が来ていた。そう思うと差し出されたスूपのよう
に店の空気が優しく温かいもののように思えて泣きそうになる。目
に見えない空気の中に、その息吹が……感じられないかと、少女は
瞳を閉ざしてじっと老婆の言葉に耳を傾ける。

「……でも神さんってのは酷いもんだ。あの子が一体何を盗ん
だって言うんだか。父親の次はあの子の命まで盗みなすった。殺さ
れるようなことをあの子は何にもしていないっていうのに……」

父親を殺された少年。彼が選んだ復讐は、逃げること。

父を殺した人間を殺すのではなく、奪われた時計を盗み返した。
そして自身が時計となった。日が昇り沈むまで、太陽のように人々
の生活を見守った。下手くそな歌で歌い街を駆け抜け、真実の時を
刻んだ。それでも神が彼にしたことはと言えば、そんな彼を刻むこ
とだ。

真実を騙ることが許されて……真実を語ることが許されない。そ
れが世界という物なのかと少女は酷く悔しい気持ちになった。

「娘さんや、どうしてあの子が親父さんの後を継がなかったかわか
るかい？」

時間泥棒の父親は時計工。そんな噂話が街では囁かれていた。そ

してそれは真実だと少女は知っている。けれど時間泥棒が時計工ではなく時間泥棒になった理由は知らない。少女が首を振れば、老婆は苦笑して口を開く。

「あの子の父親は人柄も良いし職人としての腕も良かったんだけども金を稼ぐっていう頭のない御仁でね。その時計も売れば金になるだろうに、引越しそばのノリで作った時計を近所に無料で配つてまわったんだよ。材料費だってあるだろうにねえ、氣の良い馬鹿な男だよ」

ああ、確かに甲斐性無し。少女は思わず吹き出した。少女が父について尋ねる度に、母はいつも苦笑しながらそう言っていた。生活がかかっている身からすれば冗談じゃない話だが、死んだことのことを悪く言う気はしない。今では笑い話。そんな風にも聞くことが出来た。

顔も思い出せない父のこと、それを他人から聞かせられるというのも妙な話。それでもそれはほんの少し少女の心を浮上させた。

「クロシエットの坊やはそんな親父さんの背中ばかり見て育ったもので、女房代わりにそんな親父さんを叱り飛ばしていたものさ。うちまであの子の怒った声がよく聞こえてきてたね。親父さんがそんなもんだから、あの子は自分がしっかりしないといけないってんで…… たまにうちに料理を習いに来たりしてたね。親父さんが死んでからは自分で作るってことをすっかり忘れちゃったみたいだったけどね」

老婆はとうとう兄の名前を口にする。いつもそう呼んでいたのだろう。癖のように自然にその単語が口から零れた。少女にはそれが少し羨ましかった。

昔は何度も口にしていたはずの名前が、今呟いても耳に馴染まな

い、遠くへ行ってしまった言葉のように感じられる。

「まあ、そんなんだから……時計工なんて親父さんの後を継いでも金にならない。生活していけないって思ってたんだろう。子供の癖に可愛くないというか、リアリストというか夢のない子でねえ……その分親父さんがいくら年を取っても子供みたいに夢ばかり語る人だったんだけどね。まあ、何だかんだで仲は良かったよ。釣り合いが取れていたんだらうね」

老婆の語る二人の生活は、とても裕福とは呼べない代物。最初に歌を聞きに来たとき、少年が置いていった金は彼にとってなけなしのものだったのだろうか。今更ながら悪いことをしてしまった。そんな風に少女は思う。

こちらも困っていたから本当に助かったけれど、無理を言っただも返すべきだったのかもしれない。二度目の邂逅も満足に歌えなかった。対価分の歌を彼に届けることはもう叶わないのに。少女の顔が沈むのを見た老婆もそれに続き、少年の苦悩を語る。

「でも親父さんを亡くしてから、あの子はいつも悔いていた。もし時計工の仕事をちゃんと学んでいたなら親父さんの後を、思いを継げたんだって。あの子があんなことを始めたのは……あの子なりに親父さんの跡を継ぐ方法を見出したからなんだらう」

「跡を……継ぐ……」

何気なく呟かれたその言葉が、少女にはとても印象的だった。父が目指したもの。兄が目指したもの。そのヒントがこの場所に、その言葉に眠っているような気がしてならない。

「立派なもんだろ？もう貰ってから何年も経つのに、この時計は一分だって遅れない。壊れたこともこれまでにないよ」

老婆が指さす鳩時計。少年の……そして少女の父が作った時計。父の形見で兄の形見……金時計はまた奪われた。取り戻したいと思う。それでも兄と同じように首尾良く盗み返せる自信はまだ無い。

「……あ！」

時計、時計、時計。少女は思い出す。

（そうだ、私の家にも時計はあった）

母が身につけていた時計。父から求婚の際に貰った時計。指輪を模したその時計を母は肌身離さず持っていた。

（あの時計も……まだ壊れていなかった）

父は腕の良い時計工。一分一秒も遅れない精巧な時計を作る。まだあの時計がちゃんと動くなら、少女も正確な時を刻むことが出来る。

生きていくには金が必要。家族を支え、家庭を守るためには金が必要。それでもたった一人で生きて行くにはそこまで必要ではない。いざとなったら山に入って草を摘んでもいい。水辺に赴き釣りをしてもいい。

なりふり構わず生きるなら、人はそれなりに生きていけるものだ。金などなくなつて……その気になれば人は生きられる。

仕事か家族か。それは父も兄も母も遭遇した問い。それが今少女の前にも横たわる。失うものはもう何もない。家族など、もう一人もいないのだ。

（それなら私は……仕事を選べる。そうよね……兄さん）

父の思いを継いだ兄。その兄の思いを自分は継ぐことが出来るかもしれない。

無念の内に散った兄。彼がやりたかったこと。その思いを継ぐことで、兄にしてやれることがまだ残されている。

（私は家族を作らない。誰かを好きになんてならない。それでいいんだわ）

この街の全ての人のために、真実を歌う。それはきつと兄のため。兄が守ろうとした物を、自分が守るのだ。

いつか自分の中の時計が止まるその日まで、歌い続ける。

天上が或いは地獄がどれ程遠くにあるかはわからない。兄がどこらにいるのかもわからない。それでも歌い続ければ、いつかは彼に届くだろうか？

（こんな私の歌をクロシエ兄さんは喜んでくれた……）

言いたいこと。言えなかったこと。伝えたいこと。伝えられなかったこと。沢山ある。後悔も、感謝も一杯。

いつかもう一度会える時まで、胸を張って生きよう。

「お婆さん、兄さんは死んでませんよ」

少女は顔を上げて老婆に笑みかける。目の端には涙が浮かんでいただけ、少女は毅然とした態度でそう言い放った。

「今日から私が兄さんになります。時間泥棒は……まだ死んでいま

せん」

*

朝焼けと共に鐘を鳴らす小さな影。

さあ新しい一日の始まりだと、少女は思いきり紐を引く。軽やかに響く鐘の音。その音に飛び起きる人々は口々に、言い慣れた言葉を交わし合う。

「時間泥棒が出たぞ!!」

「時間泥棒が出た……ぞ? ってえ!？」

「時間泥棒っ!？」

「時間泥棒だつて!？」

街はちよつとした大混乱。それを眺めながら少女は笑う。

「見てよ兄さん。みんなあんなハトみたいな顔しているわ」

指輪時計に語りかける姿は、かつて懐中時計に語りかける少年によく似ている。勿論少女がそんなことを知るよしもなく、愛おしげに時計を見つめる。

「それじゃあ今日も時間を盗み返しに行きましょう?」

時計塔を駆け下りる少女は少年と見紛うような短い髪。

兄を真似て髪を切り、老婆に教えられた家から兄の服を持ち出した。兄の形見として埋めずにとっていた帽子を目深く被れば、誰もそれが少女だなんて気付かない。

時間泥棒はすうと息を吸い、大声を張り上げる。足の速さには兄ほどではなくともそれなりに自信があった。少女は遅刻ギリギリま

で寝過ごして毎朝職場に走って行っていたのだから。

唯、これからは一日たりとも寝坊が出来ないというのは厳しいなあと思ひながら、歌姫を辞めたのだから寝坊癖も治るだろうと思ひ直した。

月の下で歌うことはもうない。太陽の下、革靴で石畳を蹴る。蹴り続けるのだ。今日も明日も、時間が続いていく限り。

「なんだって！？それじゃ昨日のは偽物か？」

「それにしても……時間泥棒、歌が上手くなっていないか？」

「一体どういふことなんだ！？」

（兄さんの歌をそこまで言うことないじゃない。私は結構好きだったんだけど。でも、やっぱり上手ではなかったかな）

昔からそうだった。泣いてる自分のために歌ってくれる兄……けれどそれがあんまりにも下手くそで、いつの間にか笑ってしまっていて……

通り過ぎる雑踏の声を聞きながら、少女は兄の歌を思い出し……少し笑った。

6：駒鳥と鳩時計

夕暮れに感じるのは寂しさだ。

今日の終わり。最後の鐘。晩鐘を鳴らせば……人々は家へと帰っていく。

僕もそう。帰るんだ。家に。誰もいないあの家に。父さんももういないその場所に。

時間泥棒なんて金にならない仕事。割に合わない仕事。それでも僕がそれ続けたのは、僕が時計を作れないから。父さんがやり残したことをやろうと思ったからだ。

辺りは暗くなってきた。それでもまだ暮れていない。昼でもなく夜でもない。中途半端なその時間。夕闇の中に僕はある。

いつもの癖でつい、利き手を見ようとする。そこに握られているはずの金時計。それはいま何時を指しているだろう？

（あれ……？）

ない。時計がない。

ない。時計がない。時計を掴んでいる物がない。

ない。時計がない。時計を掴んでいる物がない。僕の手がない。

ない。時計がない。時計を掴んでいる物がない。僕の手がない。

何処にもない。見あたらない。

僕は思い出す。思い出す。僕に何が起きたのか。

そうだ。できるはずがないのに。僕はもう、死んでいるのだ。鐘なんか、鳴らせない。それなのに僕は確かに鐘の音を聞いていた。

*

時間泥棒と呼ばれた少年。彼は感じていた。どこかへと自分の身体が落下していくことを。

どん底は何処だ？何時叩き付けられる？押しつぶされる？それはどれ程痛いのか。いや、そもそもそれは死よりも痛いのか？

うつすらと目を開ける。目に映るのは空の色。昼間の明るい青空の色。そこから遠離るように落ちている。視線を今ある辺りに移せば夕焼け色の空。更に下を見れば夜の暗闇。ぽっかりと空いた穴のように夜がこの小さな来客を呑み込もうと大きな口を開けている。

これが死というもののだと漠然と彼は知る。深い眠りに誘われるよう次第に意識が遠のいていく。そうしてあの夜に包まれる。

瞼がだんだん重くなる。落ち行く空は、凍えるような冷たさで…

…もう指先一本動かない。

終わりの時は近い。もうすぐだ。

そんな消し飛びそうな意識の中で、思うことがある。ゆらゆらと、蠢く物がある。それはとても熱い。あの夕焼け色の空と同じ、炎のようにこの胸を、心を焦がし苛む思い。

その焼けるような痛みが眠りを遠ざけて、もう少して眠れそうなのに、彼はまだ眠れずにいた。眠りは全てを終わらせる。痛みさえ眠らせる。

それでもまだ眠れないから、痛みが精神を苛む。身体なんてもうあってないようなもののなのに、それを模るような精神がその痛みを忘れられずに引き摺り続ける。痛い痛いと言っている。そんな痛みの中で、少年は考える。どうしてこんなことになったのだろうと。

気に入らない仕事を完璧にやり遂げた父親に与えられたのは、望みの報酬ではなく死という対価。

金さえあれば、すべてが元通りになる。家族みんなでまた、暮らせるようになる。

金さえあれば、母親の病気だって治せる。妹を働かせることもない。何もかもが上手くいく。その、はずだった。

(……その、結果がこれだ)

父親をあの大富豪に殺された。それでもその復讐として、あの屋敷に忍び込んだのは殺すためじゃない。

上手くいけば寝首をかくことくらいは出来ただろう。この足があれば、まんまと逃げおおせることも出来ただろう。それでもそれが出来なかったのは……母と妹の存在があったから。だから自分は全てを失って尚、境界を踏み越えずにいられた。人として踏みとどまれた。

自分が人を殺したと知れば、二人はどんな顔をするだろう。人殺しがあの家の扉を叩いて……二人は笑顔で迎えてくれるだろうか？ そう思うと怖かったのだ。

自分がそうすることで、何もしていない二人まで追われるようなことになってはいけない。

だから時間泥棒になった後もあの家を訪ねることは出来なかった。それでもいつか時代が変わったら。時間が誰もが手にする当たり前の者になったら、この職も失って、もう時を告げることが罪ではなくなる。そんな日が来たら……

走り、通り過ぎる窓……何時の日かその中に自分の姿が映ること、それを夢見て。

いつか彼女の名前を昔のように当たり前のように、呼べる日が来る。それを信じて走り続けた。

どうせ人間なんか数十年の命。放っておいてもいつか必ず死ぬものだ。いずれ時が全てを裁いてくれる。憎たらしい奴らをそう思うことで復讐心を飼い慣らした。慣らそうとした。

(……………そして、この様だ)

自分が何をしただろう。少年は振り返る。

歌うこと。走ること。そのどちらも罪ではないはずだ。

問題はその内容。それは数字。時報。時間。

歌なんて歌詞なんて自由であつていいはずのもの。それが誤つた時刻ならば、追われることもなかったはずだ。

（嗚呼……下らないな）

真実を歌つても、金に支配された街に自由を取り戻すことは出来なかつた。

(ごめん……父さん)

時計は再び奪われた。父が守ろうとしたものも守れなかった。街は再び嘘の時間に囚われる。それが悔しくて堪らない。憎くて堪らない。

精巧な時計を作ること。正確な時間を歌うこと。その何が罪だ
というのか。それは殺されなければならないほどの罪だったのか？
顔も知らない名前も知らない多くの人の自由のために祈りを捧げ
ても、誰も感謝などしない。それはまだ良い。自分のことはそれで
構わない。それでも父のことは諦められない。

父が死んだことをこの街の一体何人が知っているだろう？その死を悼んでくれたらう？自分の幸せも家族の幸せも犠牲に、命まで捨てて正しい時を知らしめようとした男のことを。誰も知らないのだ。誰も感謝しないのだ。

語る口がもう開かないと言うのに、それでも恨み言は尽きない。

憎むべきは他にも大勢。父を殺した者。それを誘発した者。自分を殺した者。母や妹を苦しめる者。

[illegible]

焼け付くような痛み。腕が、足が腹が、胸が。雀の矢羽根によって空けられた穴。身体の痛み、苦しみが報い。この心が流す血の涙が報い。それが時間泥棒への報い。報いだというのか？

それなら自分の欲のために生き、嘘を重ね、人を傷付け蹴落として生きてきた人間達。彼らはどんな報いを受けるのだろう？これ以上の痛みを、苦しみを存分に味わうものなんだろう？それが報いというものだ。そうだ。そうであるべきだ。そうでなければ……これ以上何を呪えば良いというのか。

もしも世界がそういう絡繰りならば、自分は死んでも死にきれない。必死に耐えてきた。誰かを傷付けることも、殺すこともしてこなかった。それなのに……今更殺してしまいたくて堪らなくなる。もう……首を絞める手も、刺し殺す手も、突き落とす腕もないのに？この恨み言も誰の耳にも届かない。声なき恨みを抱えるこの胸が、どんどん黒く染まっていく。あふれ出した血が黒く淀んで固まって……今度こそ息の根を止めようと襲い来る。信じていたもの、希望とか……そういう気持ちを全て黒へと塗り替える。

*

さて、ここまでの話は実は私が実際見ていたわけではないの。あれは彼と契約した際に、交換した彼の目を通して見せて貰ったあらすじのようなもの。

言うなれば、彼の物語の本当の始まりはここ。彼の目のお陰で私としてもこの世界の観察の幅も広がったというものよ。契約者を得ることで、私は物語の世界の登場人物達の心の底まで文字に曝くことが出来るようになる。主観が別の人間に変わった方が、見えてくる物も多いから、群衆劇には持ってこいつてわけね。

ええと、そんな彼はなんて名前だったかしら。く、く……く……そうだ、クロシェット？いや、どうでもいいわねそんなことは。興味はないわ。敬語口調も飽きてきたからざっくばらんにフランクに

いきましようか。

私にとって必要なのは二つだけ。その過程が如何に愉しめるか。その結末が如何に悲劇的か。この二つね。

え？何故そんなことが必要ですって？そんなの決まっているわ。だって私は物語の悪魔。書き手にして読み手にして語り手にして最高の傍観者。以後お見知りおきを。

それはさておき、観客の皆様方は天国と地獄についてどのような認識を持っていらして？時代やお国柄、宗派によっても様々な見解があるけれど、それは私が見てきた多くの世界の中でも同じ。

それではここで一つ、不思議な話は如何かしら？

他人を殺せば地獄に落ちる。

自分を殺しても地獄に落ちる。

ある時代のある世界には、そう教える組織があつた。だからそこに属する人間は、どんなに辛くても苦しくても憎むべき相手を殺すことは許されなかつたし、そこから逃げることも許されなかつた。それは究極の二択。どちらにしても地獄に落ちるのなら、選ばなければならぬ。だってもうこれ以上生きることが出来ない。それくらい、その子は追い詰められていたの。

自分を殺せば、世界が叩くのは自分だけね。なんだかんだ理由を付けられて逃げ出したことを彼らは責めるでしょう。始まりも過程も異なる場所の人間が、誹謗中傷。何も知らない奴らの心ない言葉が世界に響く。まあ、いつか忘れられるんだけどね。そう、すぐに一人の人間の死なんて、世界という概念には大した意味などないのだし。

それならば、他人を殺すべきかしら？

復讐相手をその子は誰にするんでしょうね。自分を不幸に陥れた張本人？それとも、もう何もかもが憎くて、どうしようもなくなってしまうのかしら。全てが許せない。目に映る全ての色が。或いは

復讐の対象が多すぎて絶望してしまったのかも。

この時、考えるべきは残される相手。

自分の行く場所は決まっている。地獄とね。だから彼らが考えるのは別のこと。

彼や彼女にとって、両親、兄弟……そんな相手が大切だったなら、彼らは自分を殺めるでしょう。罪人の身内として、何の罪も犯していない彼らが世界から虐げられるのには耐えかねて。

彼や彼女が、肉親さえも怨むなら。彼らは殺すべき相手を殺してしまうでしょうね。罪人の身内として迫害されて生きるの。その子が罪を犯したのは彼らのせいだ。そういう風に育て上げたのはお前達なのだと。実際誰かを殺めたわけでもないのに、そうやって一生何かを言われ続けるのよ。

それでも彼らが本当に罪など無かったのかはどうなのかしら。人を殺めずとも、世界には多くの罪が、憎しみが散らばっている。人の恨みを買うのは何も難しい事じゃない。何かをしても、或いはしなくても。その人がその人だと言うことが、既に怨みの対象になることだってよくあること。問題は罪を犯したかどうかじゃない。逆恨みでもいい、怨まれていたかどうか。それが肝心なの。

憎しみに中てられた人間は、罪を産む。自分か他人か。結局はその二択へ迷い込む。そして世界は怨みによって回り続ける。そういう仕組み。怨みこそが人に物語を作らせる。そうやって劇が生まれる。そうして私の蔵書が増えていく。ああ、それはとっても素敵な感情ね。

ああ、或いは肉親。彼らこそ復讐の相手ならどうするかしら。

彼ら自身を殺す？それとも無関係の人間を巻き込んでしまうのかしら。直接手を下すよりももっと残酷な方法を考える？本当、人間って面白い生き物だわ。

私だったらこうするのに。その世界ごと破壊する。全部ね。一匹残らず消してあげるの。あとは本を閉じてそれでお終い。ピリオドを打ってあげればいい。それでお終い。

だけど人間は小さな生き物。そんなことは出来ないものね。

だから彼らは悩むのでしょう。そしてそれは私達悪魔を、大いに喜ばせてくれる、最高の暇つぶし。

まあ、仮に彼や彼女が自分を犠牲に選んだとしても、残された人間が憎しみに支配されてしまうこともある。復讐なんてざらにあるものだもの。

続く罪を誘発するという意味においては確かに自殺という物はあつてはならないものかもしれない。でもそれは本当にそういう主旨の物だったのかしら？

まずは国、或いはもつと小規模で街。そういくくりで世界は分けられている。あつちでもこつちでも自殺者なんかが続けばそういうのを維持していくのって難しい。税収もままならないもの。そういうものの維持のために自殺というのは許してはいけないものだったのね、その世界では。だから宗教の名を借りて、あるかどうかもわからない罰を恐れさせそれを禁じた。

人間って本当駄目ね。ツメが甘いわ。騙してあげるのならもつと上手く騙してやらなくちゃ。その点私は悪魔。抜かりはないわ。生きている契約者には自殺の禁止を契約条件に盛り込んで、勝手に逃げられないようにはしてあげている。今回はもう死んでいる人間が相手だからそこは問題ないわ。彼はもうどこにも逃げられない人間だもの。

わたしは彼に彼の片目と交換で、人を世界を書き換える脚本の力を貸してあげた。勿論それは未来方向に限定した力。彼は自分や家族の死をなかったことには絶対出来ない。

そして彼はどうして自分がそんな力を持っているのか覚えていない。そんな限られた範囲での力を得た彼がどう歪み、傲っていくのかは興味深いものがある。人の形をした時計が作り出す理想の世界はどんな景色が広がっているのか。私に観察されていることも覚えていない無邪気な彼のピリオドまで、じっくり傍観してあげましょう。

＊

暗い、暗い……闇の中で………鐘の音がどこか遠くから聞こえる。あれは晩鐘？

鐘は時を示すけれど、時計のように正確な時を刻むことは出来ない。なぜなら鐘を鳴らすのは人間だからだ。時計を持った人間以外、鐘を鳴らす意味はない。

鐘とは信頼の証。鐘を鳴らすその場所。鳴らす人間が、正しい時を刻むと信じられなければその鐘に意味はない。唯の騒音だ。

今の僕はその鐘を鳴らしているのが誰で、何処から聞こえてくるのか解らない。だから僕はそれを信じて良いのか解らない。

鐘が鳴るほど僕は不安に駆られる。これはまるで警鐘だ。何度も何度も打ち付けられる。頭が痛い。耳が痛い。……体中が痛い。あちこちが痛いんだ。音の響きってこんな痛みをもたらすものだっただろうか？

どうしてだろう。一番痛いのは僕の利き手。焼けるように熱い。その痛みを自覚すると泣き出し叫び出したくなる程だ。おそらく僕は叫んでしまった。

その絶叫。それが僕を我に返らせる。もう鐘は聞こえない。辺りを見回せばここは街中。

気付けば僕は立っていた。どうしてそこにいるのかなんてわからない。唯何となく立っていた。ずっとそうしていてもわからないことだらけ。だから僕は歩いてみることにした。

沈み欠けた太陽が、家々の影を作る。とても寂しい夕暮れだ。誰ともすれ違わない寂しい街だ。

この場所には音がない。生きている音がしない。こんな場所を僕はとてもよく知っているような気がする。

耳を澄ませながら僕は歩いた。音が聞こえれば、そこに何かがあるが居るはず。誰でもいい。何故だか無性に誰かに会いたくなった

のだ。そうやって歩いてどれくらいだろう。僕の耳に微かに聞こえる歌がある。それは同じ言葉を繰り返すだけ。それはまるで鳩時計。夕暮れの街の中、カッコウ、カッコウ……鳩が鳴く。声の先には一軒家。その扉の中から出てきた少女が僕に歌いかけるのだ。

少女の顔には見覚えがある。

何処かで出会ったような気がする。遠い遠い昔、何処かの街で街の何処かで。

彼女は人形のように端正な顔立ち。彼女は可愛らしく、愛らしく……それでも僕と違うものがその背にはある。歌う彼女は雪のように真っ白な鳩の翼を背に持っていた。だけど鳩はそんな風に鳴くものだっただろうか？

「君はどうしてこんな所にいるんだい？」僕は聞く。

「それは私が鳩だから」少女が答える。

「だけどそれはおかしいよ。鳩時計には鳩を入れるものではないし、ましてや女の子を入れるものでもない」僕は言う。

話の最中……鎖に引き摺られ、家の中へ引き戻されていく少女。その鎖を僕は掴んで止める。けれど鎖の力はとても強くて、2人一緒に家の中へと引っ張られて行き……背後で扉の閉まる音。

「女の子は鳩になつてはいけないの？」

「なつてはいけないうつて……言い方がよくわからないけど、君はそうなりたくてこうしているわけ？」

「それじゃあ貴方はそうなりたくて貴方なの？」

「……違う」

「私もそう。私は鳩時計だから鳩時計をやっているだけ。どうしても私が鳩だとか、そんなことは私は知らないし誰にも教えて貰えない。世界ってそういうものだわ」

少女はそれが望みではなく役目なのだと言った。

こんな寂しい街に閉じこめられているなんて可哀想だ。なんとか鎖を解けないものか、試行錯誤してみるも、その鍵を開くことは出来ない。

「ありがとう。貴方のその気持ちだけ受け取っておく。もうすぐ夜が貴方を迎えに来る。さよならだね。そうだ貴方、転んだ時に何か落としていたわ。部屋の向こうに……」

少女は床に落ちたそれを僕へと差し出し……掌に載せられたそれに目を見開いた。

「……………これ、鍵だね」

「え？」

「私の父様の持っていた鍵。どうして、貴方が……？」

「よくわからないけど、これで君を助けられるの？」

「助けてくれるの？」

「これで開くのなら」

「どうして？」

「どうしてって？」

「だって私のことは貴方には何も関係ないはずでしょう？損得勘定なしにそういう相手を助ける人間なんかいないわ。人ってそういうものよ。貴方が私を助けてくれても私が貴方にしてあげられることなんてほとんど無いわ。それは貴方にとってとても不利益なことだからやめた方がいいと思うわ」

「確かにそうだ。君の言う通りだ」

そうだ僕は知っている。人はそういう生き物だ。

「だけど僕は……そういう者の考え方をする人間が嫌いだ。大嫌い

だ。僕はそういう人間になりたくない。だから君を助ける。助けたい。これは僕の自己満足だ。だから君に何かしてもらいたいってことは別にない」

「……………そうか。貴方も時計なのね」

鍵を回すと少女が小さく微笑んだ。懐かしいものを見るように。

「僕が、時計？」

「そうよ。正しい時を刻むのが好き。嘘が嫌い。嘘を吐く人は時計にはなれないわ。愚かな機械にはなれるけど」

「……………時計って何？」

「時計は時計よ。時計は人のために生きるもの。自分のためではなく人のために生きるもの。貴方はそんな風に生きたのね。誇って良いわ。そんなことなかなか出来る事じゃない。貴方はとても優しい人だったのね。だからこんな所にやって来てしまった」

「こんなところ……………」

言われてみればそうだ。ここは何処だろう？街には看板もなかった。文字がない。あるのは精々数字だけ。

「助けてくれてありがとう、初めまして……………私は鳩時計ウエスperl。ウエスperl「マキナ」」

微笑みながら差し出された少女の手は……………氷のように冷たいものだった。

*

人の作る死の概念というのはとても興味深いもの。
人は死を悩み、考え、そこから多くを想像し創造していく。私達

悪魔や神が正しき死の概念を彼らに教えないのは、その方が面白いからであり、真実を伝えることで人間というものは進化を忘れてしまつても怠惰な生き物だからだ。

だから私がその概念を教えるとするならば、それはもう死んだ人間に対してのみ。死んだ人間は死を悩まないし恐れない。彼らは世界の理不尽と生を憎むだけ。そんな死人を成長させ、面白くさせるのは世界が敢えて教えなかった真実だ。

私が生きた人間ではなく死んだ人間と契約することが多いのは、その方が面白いことになる確約が得られるから。

死人は生人とは違って私と契約したこともすぐに忘れてしまふから、行動に生人のような迷いが出ないし清々しくて見ていて面白い。これ以上失うものがない人間の、思い切った行動は実に観察し甲斐がある。

人は生きている限り希望を忘れない生き物なら、死んでいる人間は絶対に絶望を忘れられない生き物であり、どんなピリオドを打つともそこに幸せな結末などあり得ない。

人との契約は料理に似ている。契約者の最期までを綴る本こそ、永劫を生きる私の糧。退屈という飢えを癒すのは悲劇と喜劇。この胸の渴きを潤してくれるのは悲鳴と血の雨。

好きな料理は何度だって食べたいけれど、味付けには拘りたい。毎回少しずつスパイスを変えるのだ。そうすることによって、過去の料理よりもっと私好みの一冊が出来上がるかもしれない。

それでも今回の主人公たる少年には、多少の同情をしないわけでもない。私は夕暮れというのが一番嫌いな時間帯。そういうどつちつかずの中途半端な物が大嫌い。そんなものに魅入られてしまった彼はなんてなんて可哀想。

白か黒かなんて決めなくてもいいけれど、赤か黒か位はきっちり決めなきゃ気分が悪い。永遠の停滞なんて、終わらない物語なんて意味がない。価値がない。つまらない。それは書き手も読み手も同

じ。万物は始まった以上、何らかの決着を付けて幕を閉じるべき。物語もまた然り。

一番分かり易いものだそれは恋。

恋というものが一番輝く瞬間は、それはそれが砕け落ちる刹那。恋っていうのはその一瞬のために存在している。どこの世界にも永遠の愛などあり得ない。始まった恋は終わってしまう運命にある。その痛みを避けたいなら、誰にも恋なんかしなければいいの。そうすればずっと幸せでいられるわ。少なくとも悪魔は貴方に近寄らないでしょう。不感症の人間いたぶっても全然こっちは面白くないもの。

恋はいいわ。本当に。見ている分には最高に最高の娯楽で暇つぶし。生き別れでも死に別れでも、その痛みの記憶が人の人生を飾り立て演出してくれる最っ高のスパイス。

その感情の引き金が人に通常なら起こすはずもないアクションを引き起こす。それが喜劇や悲劇に繋がる引き金になることも多いもの。

言うなれば彼は、その時に間違えてしまったんでしょう。彼はそんな余計な荷物抱え込んではいけなかったの。

彼を死に至らしめた不幸の引き金こそが恋。その盲目が招いたものの。

罪を金で贖えるというような世界に、本当の善悪なんてあるはずもない。

神が作った世界が理不尽ならば、どうして神の作った彼岸が平等だと言い切れるのかしら？どうしてそんなことを信じられるのかしら？死ねば救われると思った？大間違いよ。

生きていても救われないのに、救ってもらえやしないのに、どうして死ねば救われるなんて勘違いが出来るのかしら人間は。

神様っていうのは意外と面倒くさがりなものでね、そこまで人間を救ってやろう何て気もないの。1人1人を裁判に掛けて時間も手間もコストもかかるようなやり方取りたくないわけ。だから死後の世界に選別の仕掛けを作ってしまった。

人の心の嘘と本当を見分けるだけの機械。

自分が本当に素晴らしい人間で、正しい人間で、自分は天国へ行けると心の底から思っている者は天国行き。ちよつとでも罪悪感を持っている人間はみんな地獄行き。

面の皮が厚い人間ばかり天界送りになってしまつて、今じゃ天国つて世界も本当腐りきつてしまつたらしいわ。そこを管理することになった天国行きの人間の性根が腐りきっているんだもの、そうなつて当然ね。今じゃ地獄の方が暮らしやすいつて意見があるくらい世の中本当どうなっているんだか。

そんな選別機械でも、選別に困る人間っていうのが稀にいる。

自分の犯した罪を自覚しながらそれに対する罪悪感はなく、生き様に後悔はしていない。それでも強く怨みながら堕ちていく。強い憎しみを捨てきれないそんな自分が天国に行けるはずもない。そういう人間。クロシエツトというあの少年は正にそれ。そういう死に方をしてしまった。

だから彼は天国にも地獄にも居場所はない。門は決して開かない。代わりに行き着くのは煉獄と呼ばれる場所。ここで言う煉獄つて言うのはとても面白い場所で、それはもう数え切れない星の海ほどの煉獄がある。その爪弾き者はそれぞれ自分に見合つた煉獄へと引き付けられて堕ちていく。勿論そこに救いはない。簡単に言うなら隔離された牢獄のようなもの。

彼は時計と縁の深い人生を生きてきたから、あの煉獄に堕ちてしまったんでしょう。

それにしても鳩時計とは面白いものが出てきたものだわ。駒鳥の

伴侶は鶺鴒とよく言うけれど、ある歌では恋人役が鳩なの。でも鳩時計の鳩って鳩じゃないってご存知？本当の鳩は鳩ってあんな風に鳴かない。あんな風に鳴くのは郭公。恋人とは時に親子のようなもの。それなら蹴落とされて殺されてしまう卵は誰なのかしら。

嗚呼、可哀想にね。恋になる前に割られて碎けて殺されてしまった彼女の恋は。

*

雪のように真っ白な髪を蓄えた少女が小さく微笑んで、開口一番は自身の名前を恩人へと告げた。

「ウエスペル？変わった名前だな」

少年はその名に不思議な響きを感じた。少なくともこれまで出会った人の中で、そんな名前の女の子はいなかった。

「そう？それなら貴方はとてもありふれた名前なのかしら？」

「どうだろう……僕は……」

少年は自分の名前を教えようとする。するのだが、どうしてもそれが思い出せない。

「く……く、……く……く……」

「どうしたの？」

「いや、笑っているわけじゃなくて……思い出せないんだ。辛うじて……最初にクの付く名前だったような気はするんだけど」

少年は考える。僕は一体どうしたんだろう。そんな突然忘れてしまったようなことだろうか？名前なんて当たり前で大事なモノを。

考えれば考えるほどわからないことが増えていく。そもそもここは何処？見慣れているようで知らない街。窓の外は夕暮れ。今にも沈みそうな夕暮れ。その夕暮れはやけに長く続いていやしないか？この街に来てから。しばらく迷って歩いて……この家を見つけて、鎖に繋がれ閉じこめられている少女を助け出すまで……それなりの時を要したと思うのに、窓の外はまだ夕暮れ。薄気味悪さを感じさせるような夕暮れが続いている。

「ここはクレプスクルの街」

「クレプスクル……？」

「それは夕暮れという意味よ」

少年はその言葉に何故か納得してしまう。だからここは夕方なのか。いつまで経っても夕暮れが終わらないのかと。

「貴方は夕方が嫌い？」

少女にそう尋ねられ、少年は今一度窓の外の色を見つめる。夕暮れは青と赤が混ざり合い、とても美しい色合いをそこに映しているけれど……それをじっと見つめっていると妙な物悲しさが身を襲う。

「別にそういうわけじゃないけど……夕方ってこんなに寂しいものだったんだな」

「そうよ。夕方はとても寂しい場所。朝でもなく夜でもない。とても孤独な時間」

少年の呟きに、少女は淡々とした言葉を返す。窓の外には誰もいない。この街がとても寂しいのは誰もそこにいないから。少年はここに至るまで、他の誰にも出会わなかった。

家々は明かりが灯っているのに、覗き込んだ窓の中には誰もいない……それなのに食事の仕度が調っている、妙な家々。

「ここは君の他には誰もいないの？」

「ここは夕暮れだから」

「意味が分からない」

「人はね、2つに分けられる。生きているか、死んでいるか」

分かり易く説明してあげる。そう言わんばかりに少女はゆっくり言葉を選ぶ。

「ここは生きてもいないし死んでもいない人間の街。或いは生きてもいるのに死んでもいる人間の街。貴方は死んでいるのに死んでいないから、ここに来ることが出来た人」

「それってどういう……？」

「ねえ駒鳥さん」

「駒鳥……？」

「きつと貴方の名前は駒鳥だわ。クツクロビン。ほら、ね？クの付く名前でしょ？」

「どうだろう……？」

「ずっと貴方呼びは疲れるから、しばらくそう呼んでいい？」

「別に構わないけど……しばらくって？」

それじゃあ思い出す手がかりがあるみたい。そう言いかければ少女は頷く。

「メディアノクスの街に行けば、貴方はたぶん本当の名前を思い出すわ。私を助けてくれたお礼に、その街まで貴方を案内してあげる」

「ありがとう、ええと……ウエスペル」

「マキナでいいわ。こっちの方が貴方には呼びやすいかもしれな
いから」

さあ、こつちこつちと手を引く少女に連れられて、少女が家の扉
を開ける。

「うわあ！こんな風になっていたんだ家の外って……！！」

誰もいない夕暮れを、少女は興味深そうに見回した。

「そんなに面白い？君はずっと窓から外が見えていたんだろう？」

「窓なんて私の家にはないわよ？」

「え……？でもさっき……」

振り返れば、家には窓など一つも存在しない。あるのはたった一
つの扉だけ。

白い髪を風に靡かせて、少女がおかしな人ねとくすくす笑う。

「私は家の外に出たことがなかったの。せいぜい一日48回眺め
るだけよ」

その言葉に少年は思い出す。あの家の扉に鍵はかけられていなか
った。かけられていたのは少女の自由を奪う鎖の方。その鎖はギリ
ギリ扉から顔を出すことが出来るくらいの長さがあった。

「でも、外に出たことがないって……それなのに、メディアノク
スの場所は解るんだ？」

「それでも街の場所は知っているわ。鶏が夜明けを知っているよ
うに、貴方達が日が暮れることを知っているように」

「どういこと?」

「世界は文字盤なの」

「文字盤?」

「そう。だから回ればいいの」

「回る?」

「そう。ここは夕暮れ。だからね……右手に行けば朝。左手に行けば夜。そういう街へとたどり着けるの。メディアアノクスは左手よ」

「それじゃあメディアアノクスは夜の街?」

「いいえ違うわ、真夜中よ」

「それなら文字盤なら右手側から回った方が早く12時に辿り着けるんじゃない?」

「それじゃあまだ昼じゃない。おかしなロビン」

少女がくすくす笑う。少年の物言いは日が西から昇ると言っているようなものと言わんばかりに。

「あのね、駒鳥さん。確かにずっと右手側に進めばディールクルムの門はあるわ。そこを越えればディエースの街には行くことが出来る。それでもそれはね、時計には不可能。だって時計は決まった数字を歩いていくものでしょう?」

「それなら僕は……」

「貴方は無理よ。人ではなくて時計だもの」

「……僕が……時計?」

少女が少年の心臓を指さし触れる。そうされて少年はようやく気付く。呼吸は出来ても自身の心臓が動いていないことに。

「それに貴方は止まっている、つまりは死んでいるのに生きている時計なのよ? 生きているのに死んでいる時計の私が一緒じゃなきゃ、この街を出ることも出来ないわ」

「それじゃあ……まさか、この夕焼けが変わらないのは」
「そうよ。貴方がもう止まってしまった時計だからよ」

少女は無慈悲に時を伝える。もう貴方は死んでいるのよと少年へ。

「朝焼けと夕焼けって少し似ていると思わない？24時間を12の数字で表す以上仕方がないことだけれど。……つまり本当はね、クレプスクルの門から入ってくればここはクレプスクルの街。ディールクルムの門から入って来ればここはディールクルムの街」

世界は出来うる限り簡略させるべきものだと言った少女は語る。
複雑なものを作っても意味はない。それを理解できるものがないのなら。それなら世界は単純であるべきだ。それはより多くの理解と賛同を得るだろうと。

「貴方はディールクルムの門を潜った。だけどクレプスクルの街へ来てしまった。それがどういうことか解る？」

「解らない」

「それは貴方が夜だということ」

「僕が、夜？」

「貴方の本質と貴方の時間を足されて潜った門は揺らいだ。だから朝焼けに行くべき貴方はこの夕暮れにやって来てしまった」

「でもそれは同じようなものなんだろう？それなら別にどっちでもいいんじゃない？」

「朝焼けは再生。新たな光に生まれ変わる。でも夕暮れは違う」

少年を見つめる少女の瞳は哀れみと歓喜に濡れている。そんな目で、少女はとても嬉しそうに言葉を紡ぐのだ。

「夕暮れは永遠。そして停滞」

「夕暮れってやがて夜になるものなんじゃないの？」

「本当はね。だけど貴方はもう止まっているから。人は二度も死ねないでしょう？」

「それはそうだ」

「……だから貴方は二度と殺されることはない。脅かされない安寧の眠りの中にいる。だけど他の赤子の瞳を借りて、目覚めることも二度と無い。駒鳥さん、貴方はね……死んでしまったけれど二度と生まれ変わることが出来ない魂。天国も地獄も貴方を迎えることはない……貴方は肉体の苦痛と社会という苦しみから解放される代わりに、生と死から拒絶されて停滞の永遠を彷徨うことになる」

「何だよ……それ」

二度と生まれ変わらない。許しも得られず永遠の罰を背負う。そこまでのものを背負わされているということは、自分はそれだけのことをしてしまったということ。

それでも少年はそれを思い出せない。罪悪感というものが、胸に浮かんでこないのだ。代わりにそこに現れるのは、理不尽への怒りの感情。

「僕が一体……何をしたって言うんだ。どうして……そんな」

「全てはメディアノクスが知っている。夢は夜に現れる」

さあ、行きましょう。白く細い少女冷たい手に引かれ、少年は西へと足を向けるのだった。

7：夜の町の墓場鳥

「メディアノクスへようこそ」

そう言っで迎えてくれるのは、ここまで一緒に歩いてきた少女だ
け。

夕方の街から夜の街を越え、真夜中の街まで辿り着く。

「随分と、ここも寂しい街なんだな」

呆氣にとられた少年の口からはそう出たが、真夜中の街は寂しい
の意味が夕方の街とは多少異なる。

その名の通り辺りは薄暗いを通り越してかなりの暗さ。何故かと
いうと家がない。これの何処が街だと言うのか。家がなければ灯り
もない。夜の街には建物はあった。そこには蠟燭の明かりがちらち
らと、街の至る所に飾られていたがここにはそれもない。少年の目
の前に広がるのは生い茂る暗い緑。街の入り口は森へと続くその道
だ。

「クックロビンは随分不思議なことを言うのね」

鳩時計がくすくす笑う。

「どうということなんだ？」

「だってここは真夜中だもの。明かりなんかあるわけないじゃな
い。夜だからみんな眠っているのよ」

少女がさも当然と言わんばかりにそう言うので、ここに自分より
詳しい彼女がそういうのならそういうものなんだろうと納得せざる

を得なくなる。

「さあ、行きましょう墓場鳥さん。メディアノクスは貴方を歓迎してくれる」

「歓迎って言われてもなあ……」

鳩時計に手を引かれ、少年は暗い森の中へと踏み込んだ。確かに少女の言葉通り、森は歓迎してくれている。木々が左右にその身体をしならせ道を広げて2人を迎え入れた。

「ねえマキナ、本当に不思議なところだよな……梟の声も虫の声もしないなんて」

「本当の夜というのはそういうものだわ」

「そうなの？」

「そうよ」

右も左も見えないような夜なのに、少年は不思議と森の様子が見えていた。どうしてこんなに目が夜に慣れているのかわからない。わからないと言えば、他にもわからないことだらけ。

「……マキナ」

「どうかした？」

「君は僕が時計だって言ったよな」

「ええ。言っただわ」

「それってどういう意味？僕が時計だって言うんなら、僕は……それに君もだ。僕らは誰に作られたんだ？」

「それは私も知らないわ。私を作ったのは私の父様だけど、私の父様は貴方の父様じゃないもの」

質問をしているはずなのに、そうすることで余計に疑問が増えていく。少女の返答は言葉遊びのようなものだった。

「でも、メディアノクスはそれを知っている。ああ、着いた」
「着いた？」

少女が踊るようにくりと一回り。開けたその場所へ少年を誘う。そこにあつたのは家々などではなく、沢山の十字架の並んだそこは墓地。それを目にして、夜に人々が眠っているというその意味を、ようやく少年は悟る。

「……………この中に、僕の名前が眠っているってことか」

「そうよ。この中のどれかが貴方の眠る場所。貴方のお家」

「それじゃあノクス……………あの通り過ぎた夜の街にあつたあの蝋燭は……………」

「あれが夜の街に済む人々。消えた人はメディアノクスの土の下へと来て眠るの。だけど貴方は夕暮れに迷い込んでしまった。貴方はきっと病死や寿命ではない死因」

死には順序というものがあると少女は言う。朝から昼へ、昼から夕暮れ…そこから夜へ、そして真夜中へ。日が傾くように命は下っていくものなのに、死んでいる少年が何故眠らずに夕暮れの街を彷徨っていたのか。その死因には鳩時計も興味を持っているようだった。

「日付はまだ新しいはず。この中で一番新しいお墓は……………これだわ」

少女に案内された先には真新しい十字架。木の杭を組み合わせで作ったような簡単なその墓が、自分のものだと思われてもいまいち実感が湧かないものだと思った。

「…………でもこれ墓石じゃないし、墓碑銘もない」

「大丈夫、掘り返してみましよう！」

「え？掘り返す？」

死体となつて腐つた自分を見てしまうのでは、そんな考えが頭を過ぎる。それでもまだ死んだばかりだと言われたような気もする。

一日そこらでそこまで腐ることもないかとそれを少年は受け入れる。

「でも、掘り返して何かがわかるの？」

「ええ。全てが解るわ」

「それならやるけど……」

2人で掘り返した墓の中には何も無い。ぽつかりと開いた暗い穴が一つそこに横たわっているだけ。

「何……これ？」

「これは穴よ」

「いや、それは見れば解るけどなんの穴なんだ？」

「夢の穴」

「夢の……穴？」

「そう。完全な夢はなく、完全な現もない。忘れていても何かしら何処かで繋がっているものなんだわ。それがこの穴。ここに飛び込めば貴方は貴方を取り戻せるわ。行く？」

「それは……」

それは勿論。そう言いかけ、言い淀む。その穴はとても暗く、夜の利く少年の目でも底を知ることが出来ない。二度も死ねないとは知っていても恐れを感じさせるには十分過ぎる。

こんなに暗い先にある、自分の現はどんなものだったんだろう。思い出せない。それでも胸に燦る熱いものがある。それがこの身

を焼き焦がすようでとても苦しい。それが怒りなのだとわかるのだ。その答えがきつとこの先にある。それを知ればこの苦しみから解放されるのだと信じたい。それでも、本当にそうなんだろうか？少年は迷う。

「どうしたの？」

「僕は……わからないんだ」

「わからない？」

墓穴を前に飛び込む勇気を持ってない少年に、首を傾げる鳩時計。

「今みたいに何も解らないまま、唯苦しいのは嫌だ。それがずっと続いたまま眠れないんだろう？僕は。ずっとそういう風にいなければならいんだろう？それでも僕はそれを知って今より楽になれるんだろうか？もつと苦しくなるのなら……僕はどうすればいいんだろう」

「それなら簡単だわ」

「簡単……？」

「貴方は私を助けてくれた。だから私が貴方を助けるわ」

震える少年の肩を強く抱き締めて、耳元で小さく少女が囁いた。

「私は鳩時計。鳩は駒鳥の恋人なのよ」

「え……？」

突然の言葉に驚いた少年に冗談よと鳩時計、少女が笑う。

「そういう歌があるんだわ。私が貴方の喪主になってあげる。貴方の望むような立派な盛大な葬式を挙げてあげる。貴方がどんな願いを望んでも、私はそれを叶えてあげる」

だから何も怖いことなんてない。そう言って手を差しのばす鳩時計。それに応えかけ、それでもやはり少年は迷うのだ。

「どうして君はそこまで僕を助けてくれるんだ？」

助けたとはいえそこまで大したことはしていない。したつもりはない。だからそこまで好意的にしてもらうことに疑問を覚えるのだと少年は戸惑いがちに少女に告げる。

「人は生きているか、死んでいるか。だから夕暮れの街はいつも寂しい」

ぽつりと呟いた少女の言葉。それはこれまでの自身を物語るようだった。

「貴方は私に似ているから。死んでいるのに生きている。死んでいるのに死ねずにいる」

だから夕暮れの街に自分たちはいたのだと、悲しげに瞳を伏せて鳩時計がクウと鳴く。

「人は生きているか死んでいるか、真昼か真夜中にしか居られない。だから私の歌う歌はもう誰にも届かない。寂しい夕暮れの中に唯虚しく響くだけ……ずっとずっとそんな日が続くものなんだって思っていた」

そんな孤独を終わらせてくれた。同じ境遇の時計である少年の訪れを誰より歓迎しているのだと少女は微笑む。

「だから私は貴方に会えてとても嬉しい。私は貴方をもっと知りたい。貴方を貴方の名前で呼んでみたいと思うの」

「マキナ……」

「夕暮れの街だつて2人なら寂しくないわ。貴方が寂しいときは私が貴方のために歌うから」

葬儀を挙げて現への怒りを断ち切ってから、例え眠れなくても一緒に楽しく暮らそうよ。鳩時計がそう言ってもう一度手を伸ばした。

「……ありがとう」

それに今度は向き合つて、握り替えて応える少年。少年は残された方の手の袖で両目を拭う。

少女の言葉に気付かされたことがあつた。何も思い出せないけれど、怒り以外の心を彼女が起こしてくれた。自分はずっと寂しかったのだ。夕暮れの街の中を歩いているような感覚を、ずっと前から知っているようなそんな気がして。誰かが傍にいて笑っていてくれることが、こんなに幸せなことだつたのかと気付かされた。

「行こう、マキナ。僕も君に呼んで貰いたい」

どんなに暗いその穴の底だつて、2人なら怖くない。迷わず手を繋いで、一緒に飛び降りる。

*

「……ここは」

なんだかとても懐かしい。不思議な場所だと少年は思う。
立派でもなく広くもない小さな薄汚れた部屋だけど、不思議と温

かい空気がそこにはある。2人を迎えるのは、沢山の作りかけの時計達。

「可哀想だな、こいつらは……まるで僕らみたいじゃないか」

未完成の時計を見つめる内に、それをどうにも出来ない自分の無力さを覚える少年。胸の内から湧き上がる得体の知れない無念さに嘆息すれば、少女がそれを否定した。

「そう？ そんなことはないわ」

「どうして？」

「だってこの子達笑ってる。それに眠っているだけよ。きっと良い夢を見ているのね」

「そう……なのかな」

「きっとこの子達は自分の父様を信じて愛していたんだわ」

少女が誰かを褒める。それが誰かは解らない。それでもどうしてだろう。少年はその言葉に気恥ずかしい気持ちになった。

「べ、別の場所も見てみよう。何か見つかるかもしれない」

それを誤魔化すように扉をすり抜けると、隣の部屋の床を掃いている1人の老婆。

「……誰か、来た？ 何してるんだあの婆さん」

「部屋の掃除をしているみたいだわ」

「こつちのことは見えてないんだな」

「それはそうだね。私達は違う時間に生きていて死んでいる時計だもの」

「マキナの言うことってよくわからないいろいろ」

「ごめんなさい」

「いや、ちよつと慣れた」

苦笑し合う2人の傍で、老婆は口を尖らせる。

『まったくどうしてどいつもこいつも年寄りを残して逝っちまうんだい。この婆不幸者達が』

その横顔、老婆の目の縁にうつすらと涙が浮かんでいるのに気付いて少年ははつとする。今の言葉がまるで自分に投げかけられたような気がしたのだ。

次の部屋に手がかりを探しに行こうと言う鳩時計に腕を引かれながらも、老婆から視線が離せずにいる少年に、此方が見えていないはずの老婆が小さく呟いた。

『店の残り物をついいつもの癖で余らせちまう。クロシエツト……またあんたがふらつと帰ってくるような気がしてね』

「ば、婆さん……」

大きく目を見開いて涙を流す少年に、鳩時計の少女がその顔を覗き込む。

「どうしたの？」

「そうだ。僕は……いや、俺は……そうだ。俺はそんな名前だった。ここは……ここが、俺の家だ！」

バタバタと家の中を走り回る少年は、間違いないと何度も口にし涙を流し続ける。やがて少年はポケットに手を伸ばして、そこに何もないことを知り……涙の勢いが増していく。

「ごめん……父さんっ、父さん……俺、また奪われた！父さんの……っ時計っ！！」

作業場の扉を潜り……とうとう泣き崩れ落ちた少年の身体を抱き寄せて、少女が静かに頷いてその嗚咽の声を聞く。

「大丈夫。奪われたのなら取り戻せばいいだけ。そうでしょう？」

「俺は悔しいよ。何も言えない。何も伝えられない」

見えるのに見て貰えないこと。聞こえるのに聞かせられないこと。人と時計は違うから、言葉も思いも伝わらない。そもそも自分は止まってしまった時計だ。生きている人間と関わることなんか出来ない。

溜息を漏らして、部屋を出て行く老婆の背中。それに手を伸ばそうとも、その手はすり抜けてしまう。

「俺はいつもあの婆さんの世話になっていたのにさ……一度だつてちゃんと素直にお礼も言えなかったんだ。いつも生意気な口ばかり聞いていてさ……」

俺は大丈夫だとも、今まで楽しかったとも言うことは許されないのだ。それが死んだ人間には。その無念さに打ちのめされる。どうして自分は死んでしまったのか。その理由を思い出させる時間泥棒という言葉。

「俺は馬鹿だ。何であんなことをしてたんだろう。時間泥棒だなんて。そんなことするより婆さんの店でも手伝ってやった方が婆さん嬉しかっただろうにさ」

父親の跡を、その遺志を継ぎたくて。そんな独りよがりの行動じ

や、結局何も救えない。窓の外から聞こえる声は時間泥棒への嘲笑。失われた懸賞金への不満の声。

今日寝坊してしまったのも仕事に遅れたのも、それで給料差し引かれたのも死んでしまった時間泥棒のせい。それでも昨日までの働きに誰も感謝などはない。だって時間泥棒は泥棒つまりは犯罪者。他の手がかりを探そうと、少女に手を引かれて……街の中を歩くほどに、心が打ちのめされていくのを少年は感じていた。

「俺は何で……時間泥棒なんか、やっていたんだろう。自分で分がわからないよ」

唯生きるだけなら他にも方法はあったはず。楽に生きる方法も、賢く生きる方法も。

厳しい世の中で食うにも困る生活で、それでもそんな泥棒家業をどうして始めたのか。その理由を思いだしても、その頃の情熱がどうにもこうにも思い出せない。

結末が解っているから思いだしたから。それがますますわからない。どうしてそんなことを続けられたのか。

「貴方は死んで時計になったんじゃないやなくて、生きながら時計になったのね」

「時計が作れないなら時計になればいい。そう……思ったんだらうな」

自分のことではない誰かのことを語るように、少年は客観的にそう零す。そんな少年の言い方に、少女は小さく首を振る。

「人は人だから人を愛する。時計は時計だから人には愛されない。利用されるだけ」

仕方ないことだと少女は言う。それでもやるせない気持ちはまだ癒えない。

「どうしてだろう。生きていた頃はそれでもいいと思えたんだよ。俺の自己満足で親父の無念も晴らせて、それで人のためにもなるなら……それで罪人にされても構わないって。悪いことをしていないのにそれを罪だという偉い奴らが悪いんだって、胸を張って歌って逃げて……そんな風な生き方に何の疑問も抱かなかった。あの頃はこんな苦しい心を俺は持っていなかったんだ」

俯く少年のその顔を覗き込んで、両手を掴んで振り回す鳩時計の少女。無理矢理力づくで気持ちを振り切らせて、にこりと笑って足早に前へ誘う。

「クロシエツト、街はもういいわ。次の手がかりに行きましょう？行くべき場所は思いだしたのよね？」

「……ああ、そうだな。………あ」

「クロシエツトって言うのよね？やつと貴方を名前で呼べる。こんな風に誰かの名前を呼べるなんて、本当に何年ぶりかしら」

少女が本当に嬉しそうにそう語るものだから、少年も少しだけ心が浮上する。

「マキナ……」

「何？」

「あのさ、……大富豪の家は、反対方向」

「ええ！？そついうの早く言って！！」

「ごめん」

慌てて道を引き返す少女の姿に、少年は小さく吹き出した。

8：姫駒鳥と金貸し女王

太陽の下で歌うなんて初めて。

兄さんはいつもこうして生きていたんだね。

寝坊ばかりしていた私は何も知らなかった。朝の空気がこんなに澄んでいること。朝焼けの美しさ。空を飛ぶ鳥たちを見て感じる物悲しさ。

そのちよつとの寂しさを打ち壊してくれる鐘の音。思いきり鐘を鳴らして、みんなに朝を届けてあげる。

辛い昨日はもうお終い。新しい今日へようこそ。今日も一日頑張つて、生きよう？

人のためにそうやって朝日に祈る。

奪われた時間を取り戻してあげるから、その取り戻した時間を自由に生きて。

それが父さんと兄さんの目指したこと。

大切な人と話をする幸せ。愛する人と過ごす幸せ。空いた時間の中で、そんなささやかな幸せを見つけに行こう。

それは私には手に入らない物だけど、取り戻された時間の中、幸せそうに笑う人達の笑顔が好きなの。

兄さんがやっていたことはやっぱりこんなに素晴らしいこと。

兄さんは、人に時間を届けていたんじゃない。幸せの欠片を届けていたんだわ。

夕暮れの時刻にもう一度時計塔に昇り、鐘を鳴らして今日の仕事はお終い。

一日中街の中を駆け回ることってこんなに疲れるのか。足が筋肉痛。ゆっくり休まないと。だけど遅刻は許されない。朝日より早く私は目覚めなければならぬんだから。

さて、そろそろ家に帰ろうか。兄さんの所に寝泊まりするにも、こっちに持つてきたい荷物がまだまだある。いい加減あの金貸しも私を忘れている頃よ。帰つてもきつと大丈夫。前に夜中に帰つたときだっていなかったし。大丈夫……大丈夫。

*

「あああああああああああああああああああああああ
ああああ嗚呼嗚呼ああああああああああああああああ
あああああああああああああああああつ！！！！何て勿体ない
ことをっ！！！」

「げ、……金貸しレーヌ」

扉を開けて帰宅した、母と暮らしたその家で……少女を出迎えるのは金貸し女王と呼ばれる青年。彼は肩口で切りそろえられ、結えなくなった少女の髪を見、わなわなと両肩を震わせている。

「髪をそんなに短くするなんて正気なのかいソネットっ！せつかくの君の綺麗な髪が……」

そう言いながら、がしつと少女の肩を掴みまじまじと彼女を見つめ……黙り込む青年。それに少女は訝しげに彼を見上げる。

「な、何よ」

「いや、セミロングもこれがなかなか…… 実に良いっ！ その服に着られている勘がまだ拭えないボーイツシユな男装に新たな市場の開拓が巻き起こりそうだよ！！ というわけで私の所で働こう！ 是非是非是非ともそうするべきだよ！」

これはこれで気に入ったらしい金貸しは、少女の手を引き

連れ出そうとするが、少女は扉にしがみつきそれに抵抗。

「男装娼婦なんか私はやらないわよ」

「いや、絶対儲かるって！これは素晴らしいインスピレーションだよソネット！男女構わず顧客に出来る素晴らしい商売になりそうだ！逆もありかもしれないけどね！いや、背徳ほど金になるとはよく言った物だよ、最近ただの娼婦はマンネリ化してきた感があつたからね。きつと大ヒットするに違いない！」

「だからやらないって言ってるでしょ。ていうか何で勝手に私の家に棲み着いてんのよ。貴方青カビか何かの一種？それとも蛆？自然発生する生き物なの？いい加減邪魔だから退いて。ていうか消えて。ていうか何で私の家に常駐してんの？警察のお兄さん呼んでくるわよ」

「あはははは！ソネットは面白いことを言うんだね。君の第一のファンであるこの私が、君の新しい職場を知らないわけがないじゃないか」

「変態！ストーカーっ……！！」

金貸しは、少女が新しい時間泥棒であることを知っている。それを口にし脅しをかけて来たのだ。時間泥棒が警察何か頼れるはずがないだろうと。

「貴方、最低だわ！」

「犯罪者を守ってくれる公的機関なんてあり得ないんだよソネット。つまり君が今の仕事を続けるのなら君は犯罪者だ。故に私の犯罪行為を咎めることも逃れることも出来ないわけだよ」

「……それで？何の用なの？」

「そう邪険にするのはよしてくれ。それでも私は君を心配していたんだよ」

「それは私じゃなくて商品としての私でしょ」

「君がそう思うのなら否定はしないよ。でも今すぐそんなことは止めるんだ。君に何かがあつてからじゃ遅い。いや、君の博愛精神は実にすばらしい物だとは思っけだね。それじゃあ金にもならないし、敵ばかりが増えていく。最後は君も君の兄さんと同じような目に合うのが目に見えている。だからそんなことは止めるんだ。私は君にそれを言いに来たんだよソネット」

「別にそんなこと貴方に心配される筋合いはないわ」

この悪徳高利金貸しが、他人のために言葉を作るはずがない。あつたとしてもそれは詐欺の前触れ。少女は頑なに彼を拒絶する。そんな冷たい態度の少女に金貸しは溜息一つ、肩をすくめる。何て言つたら信じて貰えるんだらうと思ひ悩むような苦悩の色が僅かにそこには滲んでいた。

「……いいかいソネット。君のやっていることは誰の得にもならないことだ。君の兄さんのしたことで、誰が救われた？誰も救われない。そして彼も救われない。そして今君がそんなことをしたら彼は余計に報われないとは思わないのか？」

慎重に言葉を選んでの説得を始めた金貸し。しかし少女は靡かない。

「そんなことより勝手にうちのお茶沸かして優雅に啜るの止めてくれない？」

「あれ、今結構良いこと言ったのに。ああ、これね。安いだけあまり美味しくないね。でも愛らしい君が目の前にいるだけで粗茶も至高の一品に変わるようだよ」

「あ、そう。で？」

「借金の差し押さえで君の家のものは全部私の物になったんだ。君のお母さんの保険金だけじゃ払いきれなくてね」

「数時間オーバーで保険金でも足りないって、貴方のところどころだけあくどい商売してんのよ」

「返済期限は昼だったんだけど、こっちにお金が来たのは夕方だったからねえ。利息だから仕方ないよ」

「ていうか……なんか私の下着とか服がごっそり消えてるんだけど」

「勿論差し押さえたんだよ。気に障ったかい？」

「これで気に障らない人がいたらちよつと驚くわ。それから貴方の家放火して来てもいい？」

「なるほど。それが君の私への燃えたぎる抑えきれない愛情表現というわけだ。うん、そういうことなら仕方ない。家なんか幾らでも建てられるしね。日に一度くらいなら焼いてくれても構わないよ」

「たつた今燃やしたいのが貴方の家から貴方になつたわ」

「可哀想にソネット。私のためにそこまで思い詰めてくれていたなんて」

「ええそうね。貴方のせいで私凄く可哀想だわ」

「それが君望みなら何でも叶えてあげたいけれど、流石にそれは出来ないな。君が更なる罪を犯す前にそれを止めてあげるのが君を愛する私の役割だろう」

「……………は？」

どさくさに紛れて聞こえた言葉に少女は両目を見開いた。その反応に金貸しは少しだけ眼を細める。

「ここ何日か、私はずっと考えていたんだ」

その目は優しげな色を宿していて……今にも泣き出しそうで、そんな目を向けられる理由が分からず少女は動揺してしまう。

「夜にいつもの広場に行っても君はいないし、家にも帰らない。

もしや君が度重なる不幸に屈して身投げでもしてしまったのかと本当に心配していたんだ」

「……………レーヌ」

心配していたという言葉は彼の本心なのかもしれない。少女はそれを僅かに認める。

「今日まで私はずっと考えていた。何故私はこんなに君が気になるのか！君が死んでしまったのではないかと思ったとき、ようやくその理由が分かった！ソネット、私は君を愛しているんだ！！」

突然の告白に、少女は言葉を失ってしまった。それもそのはず。今の今まで憎い男として敵視してきた。そんな相手から想いを告げられることになろうとは。

「解ってしまったえば簡単だった。君に危ないことをさせたくない。君の歌を私だけの物にしてしまいたい。君が他の人間のために歌を歌うのが耐えられない。私のためだけに、私の傍で歌って欲しいんだ、ソネット……………」

少女は熱意の宿ったその言葉に、縫いつけられたように身動きが取れなくなる。まるで標本になって気分だった。金貸しは、そんな動けないの頬を優しく撫で囁いた。

「……………優しい君が時間泥棒を続けたいというのなら、私が君を支援しても良い。私の力があれば、君の活動を犯罪行為から外させることだって出来る。いや、君の代わりに他の人間を時間泥棒として活動させてもいい。その間君は二度寝をしても三度寝をしても良いんだよ。好きなだけゆっくり眠ってくれて良い。昼だろうと夕方だろうと夜中に目覚めようとも私は文句は言わないよ。君が私の

隣で私のために歌ってくれると言うのなら、私は今まで溜めてきた、金だって惜しくはないんだ」

街に真実を取り戻すことを他の人がしてくれる。安全な場所で自由に贅沢に暮らす。ひもじさとか寒さからも解放される。独りぼっちになつてしまつた自分を必要として歌を聞いて喜んでくれる人がいる。それは絵に描いたような幸せだ。差し出された手を握り替えたなら、目も眩むようなハッピーエンドの中を生きたられる。

それでも視線を自分の手へと落とした少女はそこにある時計に気付く。母の形見の指輪時計。

(……………兄さん)

言えなかつたのだ。最後まで。言えなかつた想いがまだこの胸の内にある。

罪なら既に犯しているのだ。彼を好きになつてしまったことが既に大罪。それを逃れて生きること、……………それこそ誰も救わない。

時間泥棒への想いを捨てきれぬまま金貸しの手を取つたなら、それはこれまでもくどいことをしてきた金貸しが……………今誠実な言葉をくれたというのに、それは真摯な返答ではなくなるだろう。

時計を通したのは左手の薬指。もう誰も好きにはならない。時間泥棒として生きていく。そのための覚悟をそこに託したのだ。時間泥棒を止めて、他の生き方を選んだら、きつと後悔するだろう。この心は満たされない。幸せになんてなれないのだ。例えば貧しくとも報われなくとも、想いが届かなくても……………彼が自分を助けてくれたように、同じ道を歩くこと。それが唯一彼と自分を繋ぐものなのだと少女はそう信じている。

「……………レーヌ、私は貴方を誤解していた。それは認めるわ」

少女は向き合う男に小さく頭を下げる。

「貴方はただの金の亡者でも変態でもなく……貴方も唯の人間だったのね」

「ソネット……」

それが了承の言葉と受け取ったらしい金貸しは、穏やかな笑みを浮かべるが……顔を上げた少女の方は酷く曖昧な笑みで応える。

「あのねレーヌ、私は時計じゃないの。人間なの。貴方と同じ唯の人間なの。それが貴方には解る？」

「当然だよ。私は君を道具とも奴隷とも思っていない！君は他の女達とは違うんだ！」

「……だけど貴方はわかってないわ」

金貸しの言葉を哀れむように少女は見る。

「閉じこめられて誰かのためだけに歌うのって、金持ち達の時計みたいだわ。私はそんな生き方は嫌。窒息して心が死んでしまうような生き方は嫌。歌も時計ももっと自由でもっと多くの人のためにあるものなんだと私は思う」

真っ直ぐに見つめ返されながら紡がれた、拒絶の言葉。それにこれまでで一番重いため息を吐いて金貸しは言う。

「………まだ、表には出ていない情報だ。大富豪はクロシエツト君の死亡を知っているから君のことをまだ気に留めていない。君の活動が長く続けば目障りだと思っようになるだろうけどね。だけど富豪より君に関心を持っている奴らがいる。危ないのはそっちの方だ」

時間泥棒を敵視してきたのは時計を奪われた大富豪。時計を取り戻した大富豪は、少女のことを気に留めていない。他の時計で時間泥棒をしても正確な時間を歌うことは出来ない和高をくくっているのだ。

だからしばらくは大富豪は敵ではない。唯街の混乱を愉快げに眺めているだけだと言う。

勿論時間泥棒は死んでいるので、懸賞金も消滅。少女が今まで歌った中で人から追われることは一度もなかった。

「それなら一体誰が……？」

他に時報行動を憎むようなものの心当たりが他にない。少女は首を傾げる。それに金貸しは、教会だよと呟いた。少女が触れたのは、信仰の定義。唯の人間が自分の所有するもののように我が物顔で時を語ることは神に背く行為なのだと教会は考えているのだと言う。

「教会が時間泥棒について調べ始めた。君はクロシエツト君ほど足は速くない。逃げ切れるとは思わない。教会は時間泥棒にお冠さ。死んだはずの人間が甦るなんて、奴らの信じているものを覆すことだからね。それも犯罪者が甦るなんて、絶対に認められないことだろう」

「ソネット。もう一度言う。こんなことは止めるんだ。君が死ぬようなことを君の母さんが、兄さんが望むかい？違うだろう？君には生きて幸せになって欲しいと、そう思うんじゃないか？」

金貸しの与えられる情報は、まだ諦め切れていない。絞り出すような縋り付くようなその言葉。少女の身を案じつつ、未練をそこに匂わせる。

「確かにクロシエツト君はある意味ではこの街の救世主だよ。だけど教会は認めない。彼らは時間について時間は神様って奴の所有物だとお考えだからね。君たちの思想とは真つ向から対立する立場だよ。このまま君が時間泥棒を続けるのなら、君は裁判に掛けられることになる。君の犯した罪は多大だ」

例え何も盗まなくても、君は罪人だよと金貸しは言う。

「まず第一に、君は私の心を盗んだ」

「殴つて良いかしら？」

少女に睨まれ金貸しはこほんと咳払い。ようやく真面目な顔つきに戻る。

「まず第一に、君は時間を盗んだ。そして第二に、死者を騙り性別を偽った。この2つのことから君の歌った時間はまず真実として疑われる。そして第三に……君は動機を尋ねられたときに答えるだろう事。それは奴らが許すはずもない大罪だ」

「君は何もしていないけれど、裁かれる口実を幾らでも持っている。裁判に掛けられれば極刑に処せられることも起こり得る。奴らは少なくともそう攻めてくる。その時君には味方がいない。貧しい君は弁護人を雇う金もないだろう？君に不利なまま裁判は続いていくよ。私は君のような子が魔女だの悪魔だのとあの狂信者共に侮辱されるところ見たくないんだ」

「……………」

金貸しの脅しは命まで及んだ。この誘いを断ることは死へと歩き出すこと。生きたいと思うなら、死にたくないと願うなら、この手を取って共に生きよう。彼はそう言っている。

「ソネット、君は兄さんへの想いを封じて忘れるべきなんだ。それが君にとつての救いだ。私はその手伝いをしよう。ゆっくりいい。少しずつ、そうする努力を続けよう？」

少女は考える。生とは何か。死とは何かを。

これまでそんなに長く生きて来たわけではない。それなのにもうそんなことを考えなければならない時期に差し掛かっている。

死を想像すれば、それはとても恐ろしい。ほんの数日前に、惨い兄の遺体を見たばかり。

時計を握りしめていた手が地面へと落とされて、体中がボロボロ。あちこちに銃弾で貫かれた穴がある。流れ出す血が服を別の色に染めていた。自分もあんな風にされてしまうのだろうか。脅える心が僅かに決意を揺るがせる。

（でも……）

人はいずれ、いつかは死んでしまうもの。何時死ぬか。どう死ぬか。それが大事なことなんだろうか？

（違う。そんなの違う！）

大事なものは、どう死ぬかではなくどう生きるか。どう生きたか。人々は時間泥棒の死に様を嘲笑った。馬鹿だ馬鹿だと大笑いした人間ばかり。

それは彼の過程をこれまでの生き方を全否定すること。そんなのは認められない。認めたくない。

それでも結果で生き方を選んだのなら、自分も兄の過程を否定してしまうことになる。そんなことは嫌だ。

（例え幸せに死ぬことが出来たとしても、その過程の生き方が納得出来ない物ならば、私はどうやって兄さんに顔向けすればいい？どんな顔で兄さんを見ればいいの？）

目も合わせられない。申し訳なくて、情けなくて。

そういうのも嫌なのだ。どう死んだとしても、ちゃんを顔を上げて報告したい。私は頑張ったと言っただ。誰からも認められなくても、そこで彼によく頑張ったねとたった一言褒めて貰えるならば、そんな生き方を貫くことにも耐えられる。私は十分報われる。全ての犠牲を肯定できる。そんな風に生きたなら。

「ねえレーヌ、歌姫がどうして歌を歌うのかわかる？」

すうと息を深く吸って少女は微笑む。金貸しへ。

「歌いたいからよ。そこに歌があるからとかそんな理由じゃないわ。それは歌のせいじゃない。歌う人間のせいなんだわ。だから人の行動って言うのは何だってもっと我が儘で利己的なものなのよ」

それを突き詰めれば、そこには誰かのためとか金のためとかそんなものではなく、ただ歌いたいという欲のために歌うのだ。

「……私は時間泥棒。死ぬまで時間を奪うだけ」

それはそこに時間があるからではなく、そうしたいからそうするのだ。人のための博愛精神であり素晴らしい美徳なのだとこの金貸しは少女を讃えたが、そんなことはない。恋は盲目ということ、そういう風に解釈なされているだけだ。

少女が時間泥棒を始めたのも、続けるのも、結局の所自分のためであって自己満足の塊だ。自分の心を満たすため。そのための行動

が、誰かの役に立つのなら、確かにそれは素晴らしい。だけどそれは決して誰かのために行われていることではない。だからそんな生き方にも不満を感じたりはしない。

時間泥棒を止める気はない。強くそう言い切った少女に金貸しは目眩を抑えるように額に手を当てた。

「君はまだ死を理解していない。だからそんなことが言えるんだ。……それを目の前に突きつけられたなら、君も理解してくれるだろう。……いいかいソネット。金の力は偉大だ。私なら君を教会の檻の中から救い出すことが出来る。君への判決を覆すことも出来る。どうかそれだけ覚えておいてくれ」

「ええ……別に私は貴方を怨まないわ」

金貸しのやりそうなこと。それは少女も理解していた。遅かれ早かれその時が来るのなら、それは早くても仕方ない。

そうすることで少しは彼の大好きな金が彼の所へ行くのなら、それはそれで良いのかもしれない。彼の手を取れなかった事への詫びのような物として受け取って貰っても良い。

「……………ソネット、これは君のためなんだ。許してくれ」

悲しげに目を伏せてそう言い残し、金貸しは立ち去る。それを静かに見送って少女はこれが最後になるかもしれないと、母と過ごしたその部屋で眠りにつくことにした。

9：復讐の齒車と時計達の Ayre

「ピエスドール様、時計の調子は如何ですか？」

「おお、クロノメーカーか。ああ。実に良い。遅れもない！ゼンマイを撒いてすらいないのにこの針は回り続ける！お前は本当に有能だな。お陰で私の権力もより強まった！」

街一番の豪邸で、街と人々を見下ろす男の姿。彼は金時計を愛おしげに見つめている。そこに全てを従える力が宿っているとでも思っているような、そんな目だ。

そこへ現れた男が1人。時計工と呼ばれたからにはギルドの職人なのだろう。大富豪の時計を確かめ、そこに狂いがないことを保証する。

「あの溝鼠、時間泥棒もとうとう仕留めた。もうこれで私の覇道を邪魔する奴も居るまい！はははは！ああ、素晴らしい！これさえあれば私はこの街だけでなくこの国を！やがては世界までもが私の物となる！」

大富豪は至福の表情の中、薄汚い笑みを浮かべる。また妙なことを思いついたのだろう。

「いつそのこと街中の全ての時計を打ち壊してしまおう！そうすれば真実は限りなく私だけの物になる！愚民共は私に頼らなければ生きていくことすらままならんわけだ！」

「そうなりますと、私も失業してしまいますね」

「お前は冗談も達者だなクロノメーカー。もう職人など辞めても何代か食って行けるほどは稼いだだろう？それにお前にはこの時計の点検係を任せているではないか」

「失礼、そうでしたね」

その企みに忍び笑いを漏らす時計工と、大口を開けて笑う大富豪。それを同じ部屋の中で聞いている少年と少女。けれど2人には、2人が見えていない。生きている人間には、他の時間を生きている時計の姿を見ることがなど出来ないのだ。

「……………くそ、よくも父さんの時計を」

「ビエスドル金貨卿？面白い名前のだね」

歯ざしりをする少年の横で鳩時計がくすくす笑う。畏れ多くも大富豪の頭をぺちぺち叩いているが、それに彼が腹を立てることもない。なぜなら触れられてもいないから。

「でもどうするのクロシェット？」

「こいつは許さない。父さんの仇だ。当然、俺はこの男を殺……………あ！」

この男を殺して復讐をしよう。そう言いかけて少年は気がついた。目の前で鳩時計がやっていることがその答え。

「そういうこと。私も貴方も生きても死んでもいない。死んでいるし生きてもいる。つまりこの男を殺すにも順序と手段というものがあるんだわ。普通に首締めようにもすり抜けちゃうし、刺し殺そうにもまず刃物が持てないわ」

生きていない人間が、生きている人間を殺すことの難しさを鳩時計は訴える。簡単に復讐を遂げることはできないと聞かされても、諦めるという選択を少年は選べない。今にもはらわたが煮えくり返りそうなのだ。それくらいこの男が憎くて憎くて堪らない。

「順序か……でも、どうやって？」

「私達は人ではなくて、時計でしょ？」

「ああ、そうだな」

「だから人とは話せなくても時計とだったら話が出る」

「そうなのか？でも俺の家の時計とは全然そんなことはなかったじゃないか」

「彼らは眠っているから仕方ないわ」

「時計って眠るの？」

「あら？時計だって眠るわ。人も獣も森も草木も眠るでしょう？
だったら時計だって眠るわよ」

「そういうものなんだ……」

いまいち腑に落ちないと言った態度の少年に、そういうものよと笑う鳩時計。

「それに今この人達が言っていたでしょう？まもなくこの街中の時計の命が脅かされる。今に悲鳴が聞こえてくるわ。時計達も飛び起きる」

「だけど俺たちにはそれを止める方法がない」

「ええ、みんな殺されてしまうでしょうね」

「……………そんな」

「だけどみんな死にはしないわ。だって生きていないから」

「え…………？」

鳩時計の言葉は酷く抽象的だ。瞳を瞬かせる少年に、鳩時計が笑いかける。

「クロシエット！貴方も時計工になればいいのよ。父さんの跡を継げるわ！」

「いや、でも俺は時計作りの勉強なんかしてこなかったし……そんなの出来ないよ」

「違うわ。それは人間のやる仕事だわ。だけど貴方は時計でしょ？時計が時計を作るのは人間のやり方とは違うわ」

「時計の、やり方？」

「蠟燭が、蠟燭に火を灯すのと同じ方法。貴方は時計だけど心のある時計。生きているっていうのは心があるっていうことなんだわ。だから壊された時計達に貴方は心を与えてあげればいい。そうすれば彼らは完全には死なないわ。また時を紡ぐことが出来るようになる」

鳩時計の語る生と死の概念は、人間だった少年にとって新鮮なものだった。

（心があれば、生きていて……心がなければ、死んでいる。マキナは不思議なことを言うんだな）

それではこの街を暮らす人間達だって、本当に生きているかどうか怪しい物だと少年は吹き出した。

「でも、そうか。それってつまり、俺たちと同じクレプスクラムの街の住人になるって事？」

「ええ！きつと楽しいわ」

寂しげなあの街に沢山の灯りが灯る。時計達で溢れかえるその街は、確かに愉快で楽しい場所になるかもしれない。

「……そうかもね。でもそんなこと、俺に出来るのか？」

「ええ簡単よ。それは語りかけること。ただ言葉だけでは時間が掛かるから、もっと気持ち簡単に伝わる方法を教えてあげる」

鳩時計は少年の両手を取って満面の笑み。

「どうすればいい？」

「歌えばいいの」

「う、歌あ！？」

少女の言葉に少年の声が裏返る。

「歌は嫌い？」

「いや、歌は好きだよ。でも……」

「でも？」

「俺ってあんまり歌上手くないんだ」

溜息の跡、恥ずかしげに目を伏せる少年に鳩時計が苦笑。

「大丈夫。私が歌を教えてあげる。沢山歌えばちゃんと歌えるようになるわ」

「どうだろ。俺そついう才能無いんだ」

「ちゃんと耳を澄ませれば、自然とわかるようになるから大丈夫。聞こえる音と同じ音を紡げばいいの」

それが難しいんだよなとがつくり肩を落とす少年を、鳩時計は必死に励ます。

「それにちゃんと想う気持ちがそこに宿っているなら、きっと彼らには伝わるわ」

「……………そう、なのかな」

「ええ。クロシエツト、歌ってみせて」

「い、今！？ここで！？……………い、嫌だよ。恥ずかしい。絶対音外

す」

「いいからいいから。私だけしか聞いていないんだから恥ずかしいわ。私どんな歌でも笑わないでちゃんと最後まで聞いてあげる」

「マキナ……」

「歌はね、とびきり素敵な魔法。言葉じゃ言えないことを歌は代弁してくれる」

そう言つて鳩時計はすうと息を深く吸い込んだ。歌い出したのは、少年ではなく彼女の方。その歌は自分を助けてくれた少年への感謝と精一杯の好意を伝える歌だった。

聞き惚れてしまうような歌声に、乗せられた言の葉。それは言葉だけで聞かせられたなら、此方が恥ずかしくて顔から火が出てしまふかもしれない。

それでもそこに音色が加わることで、もつと自然にそれを受け止められる。気恥ずかしさは抵抗と拒絶の一種なのだから、それを取り去る歌の力は確かに偉大なものだろう。

「クロシエツト、伝わった？」

「え……あ、ああ、うん。こんな綺麗な歌を歌ってくれてありがとう」

「もう！違う違う！それだけじゃないわ！」

怒つて触れ腐れたような表情の鳩時計。それを見て少年は夕暮れの街で出会ったばかりの少女を思い出す。あの時の少女は本当に人形のようなだった。もつと淡々としていて無表情だった。それが今は笑い、怒り……まるで本物の人間のように振る舞っている。

それはつまり、自分が言葉を交わしたことで、時計だった彼女に心が宿り始めたのだろうか？

(もし、それが本当なら……)

自分には彼女が言うように、時計を動かす事が出来るのかもしれない。

(……………父さん)

大富豪の手の中にある金時計。それも眠っているのだろうか？休まずカチコチ動いているあの時計も。

「クロシエツト……？」

少女を真似て深く息を吸う。そこに想いを乗せるだけ。少女は確かそう言った。

(……………どうしてこんなことになってしまったんだろう)

僕は唯、時計が好きで。時計を作って笑っている父さんが好きだった。時計の刻まれる音が耳に懐かしく心地良い。

母さんの子守歌なんか思い出せない。だから僕にとって子守歌は、秒針の音。思えば何時も僕はその音と一緒に生きていた。

父さんがいなくなつてからも、時計は一緒にいてくれた。その秒針の音の中に、父さんが生きているような気がして。1人ではないんだと自分に必死に言い聞かせていた。寂しくなんかないんだと、いつも嘘を吐いていた。

ああ、だけど今。僕は悲しい。悲しくて泣いてしまいそう。だけど時計になつた僕は涙すら流せない。

あの金時計が今もカチコチと規則正しく時を刻むのに、僕の心臓はもう何も語らない。耳を澄ませてもそこからは何も聞こえない。一緒に生きていたのに、僕だけもう死んでしまった。そう思うとそ

れがとても悲しくて寂しいことで。

目はこんなに熱いの一滴の涙も流せない。そんな身体になってしまったことが悔しくて悔しくて。

僕は何処に行けばもう一度父さんに会えるんだろう。死んでしまったというのに、僕はまだ父さんに会えない。

見知らぬ世界に自分1人置き去りにされたような気分だ。それはとても辛いけれど、マキナが傍にいてくれる。それだけが今の僕にとつての救いなんだ。

そんな想いで歌を歌った。感情のまま歌い狂った。気持ちが落ちて着けば、何をどんな風に歌ったのかよくわからない。

視線を向けた先で金時計は未だ黙したまま。あの時計と手にしていた頃は、もっと気持ちが通じていたような錯覚があった。でもそれは幻想。

「……やっぱり、僕なんかこの程度」

金時計は眠っている。呼び覚ますことなんか出来なかった。それは父に拒絶されたみたいで、また少し悲しい気持ちになる。

鳩時計を振り返り、駄目だったよと告げようとして……そこで少年は信じられないもの目にした。

「マキナ……?」

「ううっ……うっ……」

鳩時計が。鳩時計の少女が泣いている。自分と同じ時計であるのなら、泣けるはずがないその時計が泣いている。自分の代わりに泣いている。ちゃんと伝わったよと、鳩時計が言っている。

悲しいこと。苦しいこと。悔しいこと。寂しいこと。そのシンク口を引き起こすような歌だったと彼女は言う。

「大丈夫だよクロシエツト。私がいるから。私はずっと貴方の傍にいるよ、貴方が悲しいときも、寂しい時も絶対貴方の傍にいる。寂しい思いなんかさせない。泣けないならずっと貴方を笑わせてあげる！」

「マキナ……」

「だから笑って、クロシエツト？私何でもしてあげる。貴方の力になりたいの！」

抱き付いてきた少女の涙で胸に水が落ちる。それは彼女の手とは違う、温かな温もり。

それに少年は理解する。自分は死んでいるけど生きている。ただ彼女は多分そうじゃない。生きているのに死んでいる。だから、泣くことが出来るのだらう。

なんとも歪な自分たち。それでもある意味似たもの同士、それに似合いの関係なのかもしれない。

「……………それじゃあお願い」

「何？」

「もう一回、さっきの歌聞かせてよ。俺、マキナの歌好きだから」

「……………うんっ！」

涙を見た後だと、前より伝わってくる物が多く感じる。この歌にあるものは感謝ではなかったのだとようやく理解する。

少女の歌声は、心を落ち着かせる静かな音色。復讐に駆られて何も考えられなくなる、狭い心に平穏を取り戻させる。

「ありがとう、マキナ」

「ど、どういたしまして」

歌の意味を理解すると、やはり恥ずかしさが込み上げる。本当を理解すると、言葉にされるよりもその三倍くらいは恥ずかしい。

「マキナ、俺の名前長くて面倒だったら……前に君が呼んでくれた駒鳥とかでも別に良いよ」

「……どうして？私クロシエットの名前結構好き」

「いや、うん……わからないならいいや」

鳩と駒鳥の関係を最初に口にしたのは少女の方だったのにと少年は小さく嘆息をした。

「いや、お熱いですねえ」

「だ、誰だ！？」

突然会話に加わってきた第三者の声。その声に少年が辺りを見回しても姿は見えない。

「クロシエット、あれ。あそこ。あの時計工の人の腕にある時計だわ」

「ゼンマイ腕時計か……あれだけの時計を作れる職人なんてそうそういないぞ？……あれ？あれ、何処かで見たことがあるような」

少女が指さしたのは大富豪と談笑を続ける時計工の腕。その手首に巻かれた小さなゼンマイ式の腕時計。

声はそこから聞こえてきているのだと知り、2人は時計工へと近づいた。

「聞き覚えのある名前だと思ったら君は、クロシエット君ですか。いやあ、大きくなりましたね」

クロシエットの歌声で目を覚ましたとその時計は言う。時計の声は丁寧そうな落ち着いた年配らしさを感じさせる女の声だった。

「……あんだ、誰？俺を知っているのか？」

「これは失礼。こうやって話をするのは初めてですね。私は……

……というより君は私のご主人様の方がご存知ではないですか？」

「あんだの……？それってこの時計工………？」

計算高く小物臭い笑みを浮かべたその時計工。見上げてても記憶の中にそれと一致する思い出はない。

「わからないな」

少年の言葉に腕時計は、何分昔のことですからと苦笑声。

「昔は私もよくご主人様と共に、貴方のお父様の所へ遊びに行つたものでしてね。かく言う私のご主人様は貴方のお父様とはギルド時代からの旧友なんですよ」

「ギルドって、時計ギルド……？俺の親父がギルドで働いていたなんて聞いたこともないけど」

「君のお父様は、ご自分の好きな時計を作りたいとギルドを離れご自身の店を構えられたのです。ですが商売が思うように行かずに奥様とは別居することになったという話を私も小耳に挟みました」

淡々と、それでいて何処か嬉々として語る腕時計。それは暇を持て余した嗜好きの年増女のようなだ。

「ご主人様が貴方のお父様を羨ましがっていた理由がわかりました。跡継ぎのご子息にこれだけ慕われているならきっと貴方のお父様も幸せだったでしょうね」

「そんなの……わからないよ」

「いえいえ、わかりますとも！うちにはね、残念ながら娘さんしかいないんですよ。だからご主人様はいつも悔しがってしましてね。時計工を継がせられず、自分の代で終わってしまうのではないかといつも心配してらっしゃるんです。お嬢様は継ぐ気も。かといって可愛い娘を嫁にやれるだけ、才能のある時計工がいらないということもお嘆きで」

「へえ……、この人の家も大変なんだな」

何気なくもたらされた少年の呟きに、腕時計は感嘆の声を上げた。

「ああ、やはりご主人様の目に狂いはなかった。クロシエツト君、貴方はとても優れた才をお持ちだ。きちんとした師の下で学べばお父様を越える時計工になれたことでしょう」

「ごめん。言っている意味がわからない」

「貴方は私たち時計にこうして接してくれる。向き合って、時計に心を預けて接して耳を傾けてくれる。それは優れた時計工の才なのです」

そんなことが時計工の才能なんだろうか？まったくもって理解できない。助力を求めるように少年は少女を振り返る。

「マキナはどう思う？」

「この人の言っていること正しいわ。私もそう思う」

少女はそれを肯定。誇らしげに少年の才を褒めているようだ。

それに少年は変なものだなと苦笑する。自分はこれまで一つの時計も作ったことがないはずなのにと。

「見たところ貴女のご主人様は、心は預けても耳は傾けていない。

技術の方は素晴らしいし真摯な仕事をしているけれど、情熱に欠けている。それじゃあクロシエツト達には勝てないわ」

少年と時計工を比較するように、それじゃあ駄目よと鳩時計。

「ええ。そうですね。だからご主人様は……あんなことをしてしまっただけでしょう」

「あんなことって？」

「ああ、いえいえ、何でもありませんよ。おほほほ。それではそろそろ失礼いたします。ご主人様達のお話が終わったようですから」

タイミング良く時計工が大富豪の部屋から出て行く。それを見送りながらどうしようかと少年が視線を向けた先、鳩時計は時計工の背中をじつと見つめている。その目は怒りと呼んでもいいような色をしていた。

「マキナ？」

「クロシエツト、あいつら怪しい」

「それは俺もそう思うけど、何の証拠もなく人を疑うのは良くないことだ」

「それなら証拠があればいいのね」

「マキナ？」

「クロシエツト、私のゼンマイを巻いて」

「ゼンマイ？何処に？」

「私の頭のこれ」

少女の頭の後ろにリボンのように飾り付けられていたそれは……見れば確かに螺子だ。

「これ、巻けばいいのか」

とりあえず断る理由もないので、少年は言われるがまま少女のゼンマイを巻いた。

「これは……」

するとどうしたことが、周りの景色がグルグル回る。歩き出した時計工が後ろ向きにこちらにやって来る。人がどんどん巻き戻る。目が回って、少年は倒れ込み目を瞑る。頭がぐらぐらする。その痛みが和らいだ頃、少女に名前を呼ばれた。

「……………ここは？」

「クロシエットの願いを叶えてあげたの」

「僕の……………俺の願い？」

「時間を巻き戻したの。勿論私達は時計だから過去に干渉することとは出来ないけれど、情報を知ることが出来る」

どうやってだとか、どうしてそんなことが出来るんだとか、聞きたいことは沢山あった。それでも彼女が胸を張ってそう言うのだから間違いなくここは過去の世界なのだろう。

言われてみれば大富豪の部屋も先程より真新しいし、そこに暮らす男は先程より大分若く見える。

「あの時計は20年物だった。つまり20年前からじっくり見ていけば、全てが解るわクロシエット！それにもう一度貴方を貴方のお父様に会わせてあげられる。時計の作り方もじっくり見られるし、貴方のお母様にだって会えるわ」

「あ……………」

過去とはつまり、そういう場所。二度と会えないと思っていた父親にまた会える。それを知ったら再び目の奥が熱くなる。

胸の中は少女への感謝の念で一杯で、どうしてだとか何故だかなんてもうどうでも良くなった。

「クロシェット、貴方の歌に欠けているモノは思い出なんだわ。だから貴方は貴方と貴方に繋がる人を知ること、もっと貴方の歌を響かせられる。貴方の復讐はそうすることで達することが出来るようになるはずよ」

10：二人の時計工

その青年は苦悩の中にいた。圧倒的な理不尽の前に彼は屈しかけていた。

それは何故か。それは彼が優秀な人間だったから。

普通の人間ならば気付かないだろうことを彼は知ってしまった。程度には彼は有能だった。

そう。彼は気付いてしまった。幾ら今の時代が自分を認めようと、時間はいずれ自分を葬り去ると知ってしまった。

今は誰も認めない。変人扱いされているあの男こそが、時に認められた人間なのだと知ってしまった。

彼は大いに苦しんでいる。他の誰もが理解できない未来への苦悩。他の誰もがそれには気付かない。気付けるまでの才能がないのだ。

その才ある彼ですら、それに気付き認めるまで多くの時を要したのだ。生きている内にそれに気付ける人間が、果たしてこの時代にあると何人いるだろう？

20年前の彼は、そう……それに気付きながら、まだそれを認めるに至らない。それはそんな時代だったのだ。

「トウール、お前の作る時計は本当に素晴らしい！」

「ありがとうございます」

街の中で一番大きな時計ギルド。そこには1人……有能な時計工がいた。

彼はまだ若い男だ。しかしその腕からギルドの中でも高い地位に就いていた。彼の時計はよく売れる。シンプルなものにも洗練された美しさを感じられるその時計は、金を持て余した紳士達によく売れた。中流階級から上流階級まで。彼の時計を所持することが一種のステータスだと言わんばかりの風潮を巻き起こしたその腕は確かな

ものだ。

元々このギルドをここまで押し上げたのは彼の功績によるもの。それまではドングリの背比べのようだったギルドの中から他のギルドが追いつけないほどの差を見せつけたのはこの若い時計工。その傍らで、怒声を浴びせられているもう1人の青年が居た。

「まったく！だというのにクワルツ！！お前は一体何をやっているんだ！？」

「え、ええと」

「今月もお前の営業成績がダントツで最下位！お前達は同期だというのに何故こうも違うのだろうな！トゥールの爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいだ！！」

「す、すみません……」

へらへらと苦笑する落ち溢れ職人に親方は再び唾をまき散らして怒鳴り散らした。

怒鳴られて売り上げが伸びるなら僕も喜んで怒鳴られるんですけどねとその職人が小さく漏らす。それに有能な時計工が小さく吹き出す。正にその通りだと二人で笑う。

落ち溢れのその態度にまたもや当たり散らそうとした親方も、目にかけている有能時計工に落ち溢れの肩をもたれてしまった以上、それ以上は言えなくなった。唯、理解しがたいと肩をすくめて言い放つ。

「全く信じられんな。どうしてお前達のような奴らの馬が合うのか私には全くもって理解しがたい」

付き合う友人は選べよと吐き捨てる親方に、落ち溢れ時計工はまたも苦笑い。

「親方あ、それはあんまりですよ。僕には人権ないんですかね」

一応僕にも心はあつてですねと笑う彼に、親方は……

「人権なんて言葉よく言えた物だな！そんな口を利きたければ月に最低30台は売ってみろ！」

「一日一つですか。あはは。無理ですよー、そんなに早く時計作れませんよ」

へらへらと笑う友人に、有能時計工は吹き出した。彼は礼儀がなわけではないのだ。唯親方に対してこの恐れ知らずというか空気の読めないところが気に入っている。同じ世界を生きているのに、それを感じさせない風変わりというか自分の世界を生きているような所が面白いのだが、周りはどうもそうは思わないようで、二人揃ってある意味変人同士気が合うのだと思われる節もある。

有能時計工は変人と呼ばれることを気に留めていない。それは平凡な他人と区別されることであり、自分というものを認めさせることであると考えたからだ。天才と変人は紙一重とも言われる。そう呼ばれることは自分にとって、褒められているも同然と彼は考える。しかしそんな自分もこの風変わりな友人には敵うまい。変人という一点において、この友人は自分を遙かに凌駕している。

「お前の場合作ってもそもそも売れないだろうしな」

嫌味とも取れる言葉を素直に受け取る友人は、やはりへらへらとした笑みで応える。彼は事実が事実として受け止めてはいるのだ。だからそれを気にすることもない。どんなに罵られても自分らしさを失わない彼の明るさを好んでいるのかもしれない。業績を争う、ライバルばかりの殺伐とした職場に彼が居ると、ふっとこうして吹き出して息抜きが出来るような気がする。この職場において彼は絶

対に敵に成り得ない。そこまでの才がない。だからこそこうして安心して友人をやっていられる。彼もその力量のさを妬んだり僻んだりはしない。そういうところも気に入っている。

「そう！そんなだよなあ！どうしてだろう、今回の良い線行っていると思うんだけどさ」

落ち溢れの友人はへらへらと、これまた風変わりな時計を取り出した。

「……………お前は時計を一体何だと思ってるんだ？」

「そりゃ便利で、素敵で、職人の知識の結晶だよ！」

「まあ、そうだな。それは認める。だがお前のは相変わらず多機能過ぎはしないか？」

シンプルイズベスト。時計は時計であるに限る。それが有能時計工のモットー。時計は純粹に時を刻むことに専念していればいい。尻尾を振る必要も媚びを売る必要もない。時計は娼婦ではない。時計は淑女だ。慎ましかで出しゃばらず物静かで、それでいて清らかな乙女だ。生涯を共にしたいと思えるような理想の女。それが時計だ。

だというのにこの友人の時計。これは何だ？

大きさは鳩時計よりも小さい。それは箱。音が鳴り、絡繰りが周り……………何か小さな劇を見せられているような、そんなものを時計と呼べるのか？肝心の文字盤は何処だ？ああ、これか。しかし肝心の文字がない。これは扉じゃないか。そこから人形が出てきて演奏を始める。時間事に曲が変わる？だからなんだ？意味が分からない。

「お前のはまるでオルゴールじゃないか。いや、いい音だけでも」「ああ、ありがとう！これは俺も気に入ってる曲なんだよ」

「もうお前いつそのことオルゴール職人にでもなつたらどうだ？
こんな小型のオルゴール……向こうのギルドでだって作られていないぞ？」

なんと才能の無駄遣い。

「嫌だよ。俺は時計工なんだから」

けらけらと笑う友人。ぐにやぐにやしている癖に意思だけは硬い。
頑固な所だけは職人氣質と呼べるだろうか？

「しかしこんな時計じゃ持ち運びなんか出来ないだろう？これらの時代に求められるのはやはり利便性。何時でも好きなときにより正確な時間を知ることが最重要課題となるはずだ」

「そうかな。俺はそうは思わないな。確かに正確な時間っていう点では同意するけど」

「何故そう思う？」

「俺は時計の音って好きだけど、そうじゃない人もいるだろう？時計の音に圧迫感を感じるっていう話を聞いてね」

言われてみればそうだ。この時計には針がない。秒針がない。それが表に出ていない。耳を澄ませれば微かにその箱の中から時を打つ脈が聞こえる。その音を押さえるためにわざわざこれを箱で覆った。曲でそれを掻き消した。

「時計って言うのは人を追い詰めるものであってはいけないんだよ。だから時計が人の心を和らげて安らげてくれるものであってほしいと俺は思うんだ」

「だから音楽か？」

「そういこと。音楽は良いよ、うん」

「まったく。今度は誰の入れ知恵だ？」

「街で素敵な歌姫に出会ってね。彼女の歌を聞いてヒントを貰ったんだ」

「歌姫だと？」

友人は女の趣味まで最悪だったのかと、有能時計工は頭を押さえる。

歌姫とは歌を売る女。それは建前だ。花が香りをまき散らすよう、女達が歌を売り捌くのは別のものを売るためだ。歌だけで生活費を賄える歌姫などそうそういない。すぐに別の職の世話になることになる。

「あんな低俗で下劣な女達……いいかお前も時計工なら、少しはプライドを持て！時計工は知能集団の集まりなんだ。いわば知識層！それがあんな娼婦の真似事をしているような下賤と関わり合いになるなんてお前のためにもならん。そんなことばかりしていて変な評判がついて余計時計が売れなくなったらどうするんだ！」

それまで何度酷いことを言ってもへらへらしていた友人が、ここで初めて異論を唱えるように此方を向いた。そんな表情で彼は「ありがとう」と小さく告げる。

「お前が俺の心配をしてくれるのは有り難いよ。何時も本当に」

手の掛かる奴だと目をかけていてくれる。それは本当に感謝してもしきれない。それでも踏み込んではない領域が人にはある。それが今の話題なのだとその目は暗に告げていた。

「人が歌を歌うのは、何もお金のためじゃない。俺が時計を作るのも同じことだよ。彼女は歌が好きだから。俺は時計作りが好きだ

から。好きなことをやって生きている。それがとても幸せなんだ。だから俺はそんな幸せそうに歌う彼女と彼女の歌が好きなんだ」

それは彼女がどんな人間であつても、これまでどんな風に生きてきたかも関係ない話さと彼は言う。

「お前は馬鹿か？どう考えたって女はあれだ。遊び以外は基本的に生娘に限る。何処の馬の骨とも知れない相手に抱かれたような女、娶ろう何て酔狂何処にもいないぞ？時計だつて同じだ。幾ら安くても誰の手垢が付いてるか解らないような中古品、誰が買うものか」

時計と女はステータスだと言つて聞かせるも、友人は納得しない。この友人のことだ。どうせ遊ばれているだけだ。稼ぎが少ないとはいえ、一流ギルドの職人。最低限の給料はある。それを目当てに鴨にされているだけ。

だというのにこの馬鹿はすっかり入れ込んで、もう結婚でもすると言わんばかりの顔つきだ。

「お前だつて普通にしていればそこまで見れない顔じゃないんだ。そこにいい女を侍らせたなら男としての風格も上がるだろう。そうなれば時計作りにも精が出る。きっと今よりもっと良い仕事が出るようになる」

「あ、定時だ。それじゃあお疲れー！」

「こら、人の話は最後まで聞け、だからお前は……」

今まで言い争っていたことも忘れたようにへらへらと友人はギルドを去っていく。

残業も時間外労働もしないからあんな風な仕事しかできないんだ、きつと。そう呆れて息を吐く。

「しかし……」

まじまじとその時計を見る。とても職場だけで仕上げたとは思えない。意外と繊細なその作り。陰では努力をしているのかも知れない。それでも正しい方向へ向かない努力を社会はそうとは認めてくれないのだと、何度言っただけ聞かせてやればあいつは理解するのだろうか？

「何？トゥール、機嫌悪いわよ」

行きつけの酒場に行けば常連の女達が寄ってくる。稼ぎの良いこの時計工、華やかな顔立ちではないが端正ではある。となればそれなりに女も集まる。

「そう言えば最近あんたあのちよとおかしなお友達全然連れて来ないわね」

「あいつも女が出来たとかで俺なんかと飲んでる暇がないんだ」

「あはははは！振られちゃったの？可哀想ー！」

「馬鹿か」

「ごめんごめん。そんな可哀想なトゥールには私が付いてあげるといいー、いいじゃん！いいじゃん！朝までだって余裕で傍にいてあげるからさー」

腕に絡みついてくる女の腕。その言葉に流されるのも悪くはない。遊びは大歓迎。責任なんか俺は取らない。女を泣かせた数と振った数こそ男の甲斐性。

その身体を抱き寄せて適当な場所に移動しようか。そう思い窓の外を見た時だ。

「……あいつ」

窓の外を通り過ぎる二人の男女。一人には見覚えがある。それはあの冴えない友人。

もう一人があいつの言っていた女か。どれどの程度のものか見せて貰うか。そう思い視線を移した先、目に飛び込んできたのは赤。華やかなその色。鮮やかに焼き付くような、瞳を焦がす鮮烈なまでの美しさに息を呑む。脳天から雷でも食らったような衝撃に目を見開いた。

深紅のドレスに、赤い花の髪飾り。その華やかな色は人目を引く。それが何を表す職業の女かを一目で表す色だ。だから自分はその色あまり好きではなかった。常に見下していた。汚らわしいと。そのはずなのに、今はその色から目を離すことも許されない。

「ありや、ソヌリだな」

「ソヌリ？」

近寄ってきた他の馴染み客が彼女の名を口にする。それがあの綺麗な女の名なのかとぼんやり頭の中で繰り返す。

他の酒場の客達も皆窓に釘付けになったように彼女を見ている。中には歓声を上げて騒ぎ出す馬鹿まで居る。女達ははっと我に返ったように、相方の男の腕やら頬を抓り出す。

「振られた男は数知れずっていう高嶺の花さ。この街きつての高級娼婦。会っただけでも馬鹿高い金が要るってのに、そこから幾ら金を積んでも振られる男ばかりっていう話でね。どういう基準で男を選んで居るんだか」

胸を張って誇れるような職ではないのに、凜と佇む様はあまりに美しい。少しも自分に恥じることなく夜の街を歩く彼女はこの夜さえも従えている。

こうして唯で見る事が出来るのはそれだけで凄い幸運なことだと酒場の客達は頷き合った。その僥倖に縋って今日こそはとギャンブルに手を出す輩まで現れた。

「……高嶺の花」

そんな女がどうしてあんな冴えない男と腕を組んで歩いているのか。

急に突然自分がみすばらしくて惨めな気分になる。稼ぎはある。地位も俺の方が上だ。確かにいい女を侍らせればあいつも格が上がるとは言った。それでもその女が幾ら美人だからと言って、唯それだけであいつに何もかも勝っているこの俺が、どうしてここまで惨めな気分を味わわなければならないのか。

そもそもどうしてそんなこの街で一番の最高の女が、あんな男の手を取った？それは何かの間違いだ。あんな男より、余程俺の方が相応しいはずだ。だって、そうだろう？

理不尽という言葉が服を着て歩いている。それを今見せつけられている。有能な男はそんな風にその二人の背中を凝視していた。

*

「あれ……………父さんだ」

随分と若い。自分に何歳か足したような数。それでもその中に亡き父の面影を見た少年は、小さくそう呟いた。

それを聞いた鳩時計は、店の中と外を交互に見やり首を傾げる。

「あの時計工？どっち？」

「冴えない方」
「やっぱり」

答えは分かっていたけど聞いてみたらしい鳩時計。二人は顔を見合わせ笑い合う。

「やっぱり？」
「ちよつとクロシエツトに似てる」
「似てないよ、全然」
「クロシエツト、照れてるんだ？」
「照れてない！」

自分と父が似てないと思っていた少年は、鳩時計にそう言われたことに内心嬉しさを感じたていたが、やはりそれを素直に認められはしなかった。

「あ、あんな甲斐性無しに似てても全然嬉しくないし」
「はいはい」

ぶつぶつとふて腐れたように言葉を紡ぐ少年を、鳩時計はくすくす愛おしげに微笑んだ。

「……でも、嬉しいでしょ」
「……まあね、ありがとう」

話題が変わったことに気付いた少年はそれを認める。

「母さん……あんな顔してたんだな。随分と会ってなかったから忘れてた」

不思議とその姿からは妙な懐かしさと温かみを感じる。それでもわからないことがある。

「なんか考えられないな。あんな人がどうしてあんな男を選んだのか」

あんな美人から自分が生まれたとか、考えられない。信じられない。となるとやっぱり自分はあるの冴えない父親に似ているのか。ああ、それなら似ているのかも知れないと息を吐く。

「いや、でもそうか。それならあの親父に愛想尽かして逃げ出すのもわかるか」

あんな高そうで綺麗なドレス。綺麗な化粧。着飾っていたあの女が少しない稼ぎの男に養えるはずがない。それにそこに子供なんか生まれたら……

「……つて、子供？」

場面は変わっていく。綺麗なドレスを着ていた女は簡素な服へと姿を変えて。冴えない男はギルドではなく小さな工房へと身を置くように。

男の作り出す時計に、女は楽しそうに微笑んで。その完成を二人で本当に嬉しそうに笑い合う。

そんな二人が一番幸せそうに笑っていたのは、子供が生まれたその日のこと。

どんなに腕の良い職人でもこの子を越える宝物を作り出すことは出来ないし、高価すぎて値段を付けることが出来ないと、男が笑う。何もこの子まで時計に例えることはないでしょうと女がそれを窘めながらも微笑んだ。

「クロシエット？」

二人を見つめる少年が言葉を失った。それに気付いた鳩時計。少年はとても悲しげな表情なのに、両目は依然として乾ききっている。死んでいる人間が泣けるはずもない。吐き出すことが出来ない悲しみはやがて咽から漏れる嗚咽に変わる。

「母さんが、親父に俺に……愛想尽かして出て行っただんたとしても、こんな風に……この時だけでもこんな風に喜んでくれたんだな
って思っ
て」

それだけで十分幸せだ。だからこそ、こんなにも辛い。

これは壊れてしまった幸せだ。もう今は何処にもない。それがわかるから、苦しくて堪らない。両目が熱い。燃え上がるような憎しみが胸を焦がす。

父親も自分ももう欠けてしまった。この二人がやり直すことはもう絶対にあり得ない話。赤ん坊を見つめる二人が、自分を……ここに
にいる自分の方を振り向いてくれることはない。絶対に。

「クロシエット……」

「父さんは、何処に行っただのかな……」

父も死んだ。自分も死んだ。それなのに未だ会えない。それは何故？

「天国か、地獄だと思うわ」

先に天国と付け加えたのは鳩時計の優しさだろう。少年は煉獄にいる。そこで出会えないなら父は確かにそのどちらかにいるはず。

それでも答えは分かっている。二人とも。

戻れたかも知れない。この幸せの中に。そのためにあの父親は時計を作った。夢を捨てて、幸せを買い戻す。そのための金時計。

その全てを注いだ時計を奪われ、命も奪われ…… 幸せも帰らない。そんな死を遂げた非業の魂が、怨みの心もなく天に昇ることが叶うだろうか？ 父はきつと憎んだはずだ。罪悪感など消し飛ぶほどの憎しみ。煉獄などに彷徨い込むこともない。深すぎる業。憎しみに囚われて堕ちたはずだ、地獄まで。

それはとても悲しいこと。殺された。被害者だ。それなのにその死の先にさえ幸福はない。救いはない。そんな場所に父が囚われているのだと思うと、余計に憎い。父をそんな不幸のどん底に叩き落とした男が憎い。

「クロシエット…… クロシエットは、どうしたい？」

「マキナ……？」

「あの男を、ピースドールを殺したいのよね？」

「殺す、だって？」

そんなものじゃ足りない。生温い。

「俺は後悔させてやりたい。あいつが今までしてきたこと。自分自身を嫌悪し呪うほどの後悔を」

そのまま自分で苦しんだ挙げ句に首を吊らせてでもやりたい。そうすればあいつも地獄堕ちさ。自殺者は地獄に落ちるって教会は言っている。誰もが一度はそれを耳にしたことがある。だから心の何処かでそれが引っかかっている。だから必ずそうなるだろう。

「あいつも煉獄に堕ちてしまえば良いんだ。永遠に救われることはない。そこで俺が毎日毎日復讐してやるんだ…… そうなれば、ど

んなに気分が良いだろう」

少なくともこの苦しみからは解放されるだろうと少年が哄笑。

「それなら……私は」

鳩時計が少年に向き合った時。彼女は気付く。少年の目が赤い光を宿していること。その目が暗く光り輝いていること。

「クロシエツト……？」

その目の光に目を伏せて……もう一度彼女が目を開けばそこは、また場面が変わる。鳩時計は驚いた。巻き戻したのは時計としての自分の力。少年にそんな力はないはずだ。

視界の中の子供は成長している。巻き戻ったというわけでは無さそう。

唯変わったことはと言えば、声が聞こえる。誰の声？ 全ての声だ。その場にいる人達の声。心の声。それが辺り一面に響いて反響。少年の目がそれを曝き起こすように、暗く暗く人の心を照らしているようだった。

《俺はあいつが許せなかった》

「この声……何処かで」

「……トウルルルビヨン。時計工。若くして時計ギルトの親方まで上り詰めたクロノメーカー。……親父の友人で……親父を売った下衆野郎だ」

多くの声の中でもとりわけ大きく響く声。それに聞き覚えがあると感じた鳩時計に、少年は淡々とした口調で答える。こいつはあの

大富豪に擦り寄っていた時計工だと。

*

俺はあいつが許せなかった。

あの女と出会ってからのあいつは目まぐるしくその才能を開花させた。それに気付いたのは俺だけだった。相も変わらず変な方向を向いているあいつの時計。それでも俺はそれに惹き付けられている自分にいつしか気がついた。

今までこいつは馬鹿だ変人だの見下す心が全くなかったと言えば嘘になる。俺はこいつを見下していた。そうすることで俺が如何に優れた人間かということを知ることが出来た。その物差しとして、俺はこいつを気に入っていたのだと自覚すると共に……俺は知る。物差しはこいつではなく、俺の方だったのだということ。

俺は自身を飾り立てるための時計を作っていたが、こいつは違う。ステータスとしての時計ではなく如何に人を楽しませるか。如何に人の役に立たせるか。何時でもそれを第一に考えていた。

時計は裕福層の必需品。それが今の時代の在り方。

時計は高価。だからこそ時計工を目指す人間が増える。時計も増える。需要に対しやがては供給が上回る。競争が進めば進むほど、その価格は低下する。将来的には時計というものは多くの人々の手に渡るものになる。今それを告げても誰も信じない。

貴族の使い捨て経済。それに組み込ませるのが時計。そう、長持ちする時計はあってはならない。季節の変わり目、あるいは一年。ファッション感覚で様々なデザインを売りつける。そうやって名を挙げる時計工も多い。

だが俺は違う。俺は何時の季節も違和感なく身にまとえるよう、

シンプルを貫いた。その潔さと、耐久性。常に出来る限り以上の力で精巧さを求めた。一度の客は一生の客。修理を請負い、俺の作った時計と共に生涯を送って貰えるように努めてきた。

時計は女だ。時計は嫁だ。時計は妻だ。だからこそ、理想の女を時計に求めた。あんな女はまやかしかだ。派手な時計なんて、ずっと一緒にいられない。どんなに美しい女もどうせ何十年かすればみんな婆だ。どんなに素晴らしい肉体だってその内垂れ下がるだろうよ。その落差に人は幻滅するものだ。それなら適度にいい女と程ほどに良い生涯を共にするのが一番だ。そうだろう？ 第一あんな女、見た目だけだ。見た目の良い女は性格だって歪んでいる。高飛車で出しやばりで。女の癖に男と同等以上の扱いを求める。そんな時計はだれもいらぬ。俺は要らない。そうだ。それでいい。そう思った。

それでも最後にあいつの家を覗いた時に、あいつの傍にいた女は……やはり美しかった。もうドレスなんか着ていない。化粧もそこそこに。それでもあいつの作る時計を夢見るように見つめるその目は、この街のどの女よりも綺麗に透き通っていた。

どうしても納得することが出来なくて、金を積んであの女に会いに行った。そしてどうしてあんな男に振り向いたのかと尋ねたことがある。

いつそ奪い取ってやろうかとも思った。身の程を知れとあの馬鹿男を嗤ってやろうと。それでもあの女は俺の金に見向きもせず、笑って言った。「貴方の時計を見せて下さらない？」と。

比べものにならないだろう。俺は俺の作り出した最高の女を見せてやった。しかしそれをあの女は鼻で笑った。確かにそれは男は喜ぶかも知れないけど、女の私じゃ吐き気がするわと言わんばかりに。そして女が俺に片手を見せる。そこには小さな指輪があつた。今日で仕事を止めるのよと笑って言った。安物の宝石の付いたその指輪。それよりもっと高い指輪をくれてやると言ったが女は見向きも

しない。「これは唯の指輪じゃないの」とくすくす笑いながら俺を馬鹿にした笑み。

耳を澄ませると女は言う。俺は渋々それに従い、それに気付いた。微かに聞こえる秒針の音。それはどこから？女の薬指からだ。

その指輪が時計なのだとようやく気付き、絶句した。その基盤はあまりに小さい。俺の作る腕時計などとは比べものにならない緻密で精巧なその作り。その中にあの男はどれだけの機能を詰め込んでいるというのか？女の指から聞こえるオルゴールの音を聞いた時、俺はあいつの才能を認めざるを得なかった。俺の時計では、あの女にこんな顔をさせることは出来なかった。

そもそも贈る相手のことを考えるという意識が俺にはなかった。女なんて此方の趣味の物を贈って着飾らせるだけのものだろう？高価な物を贈ればそれが趣味でなくとも奴らは着るし身につける。それがステータスという物だ。

そもそもそれが間違っているとあいつは言わんばかりにその時計を俺に突きつける。安っぽい宝石かも知れない。それでもそれはあいつに買える精一杯。そしてあいてを驚かせよう、楽しませようという思いがそこには目一杯に詰められている。その直向きな心にこの女は打ち落とされたのだろう。あの男だけはこの女を真っ直ぐに見つめたのだ。その上で贈るべき物は何かを考えたのだ。

高価な宝石ならいくらでも贈られた。それでもそのどんな宝石よりも価値のある宝物だと女は微笑む。

去り際に見た女は、俺を振った日よりも柔らかく……優しい瞳で笑っていた。それがあまりに美しすぎて、俺はより惨めな気分になった。

俺は負けたのだ。時計工としての才能でも、あの女を巡る戦いからも。

その鬱憤。プライドを傷付けられた怒り。それに俺は支配されるようになる。幸い、あの男の才能にはまだ誰も気付いていない。俺が感じていたのは怒りだけではない。恐怖だ。今ある俺の地位も名

誉も、あの男にいずれ奪われてしまふのではないか。それが怖くて堪らなかった。

それならどうするべきか？今の俺には地位がある。言いがかりを付けてあいつをどうにかすることくらい容易い話。そうだ。ギルドから追い出してしまえ。噂が尾鰭が広まれば、あいつを雇うギルドなんて何処にもなくなる。

あの女共々路頭に迷え。そして苦しい生活をすればいい。それだけが、傷ついた俺の心を癒すこと。

それから数年後、とうとうあの女が家を出て行つたと聞き、俺は大笑い。いい気味だと清々したと心から笑った。

あの馬鹿男はどんな顔で凹んでいるか見てきてやろう。そうして数年ぶりに足を運んだあいつの家には見慣れぬ1人の子供がいた。

親父よりぱつとしないガキだ。いるのかいないのかよくわからない程影が薄い。

茶を運んできたその指はまだ時計作りを知らない綺麗な指だ。俺たちの積もる話に暇そうにしていたので試しにと修理用に持ち運んでいた時計を弄らせてやる。

それに俺はまたしても言葉を失った。

このガキはとんでもない。何の知識もない癖に、時計を動かしかつた。あり得ない。俺だって、この馬鹿男だってそんなことが出来るはずがない。時計って言うのは本当に繊細な生き物だ。知識も経験もない子供がどうこうできるはずがない。そんなことがあるとするなら奇跡か魔法か……こいつをも越える天才が生まれたと言うことか。

「なあ、お前の所も大変だろう？」

俺はそう切り出した。

「俺の所も落ち着いてきたところだとは思ってたんだがうちの娘が遊び相手が欲しいと我が儘を言い出すような年頃で……お前さえ良ければしばらくこの子をうちで預かってもいい。男で一つで子育ては大変だろう。金もかかるし、お前の職が安定するまで俺が面倒見てやっても良いぞ?」

こんな環境じゃろくに時計作りを教えることも出来ないだろうから、代わりに俺が教えてやると囁くが、あの馬鹿は何処までも馬鹿で俺の申し出を拒絶した。

「お前が俺のために言ってくれてるのはありがたいよ」

以前と同じだ。ありがとうと言いつつ俺をきっぱりはね除ける。

「養育費は全部俺が持つてやるって」

「そういう話じゃないんだ」

あいつは弱々しく首を振る。

「俺はそこまで強い人間じゃないから、誰かが居てくれないと困るんだ。あいつも居なくなつて、この子まで居なくなつたら俺は……何のために時計を作ればいいのかを思い出せなくなつてしまいうで」

この子が居るから頑張ろうと思えるんだよとあいつは小さく呟いた。

「本当はこの子もあいつに預けようかと思つたんだ。この年で母親から引き離すのは可哀想だろ?」

「ああ、だから……うちには俺の妻もいるしあいつ意外と面倒

見が……」

「だから母さんの所に行っても良いんだよって言ったんだ。そしてたらうちの子何て言ったと思う？それじゃあ父さんが1人になっちゃうし可哀想って言うって残ってくれたんだよ！もう可愛いだろうちの子！もう本当に俺頑張らないとって思ってた」

工房には沢山の時計が並んでいる。以前より作業のスピードも遙かに上がった。相変わらず丁寧な作りだ。装飾も美しい。だというのに価格が安い。相変わらず儲からない仕事をしている。

以前はわけのわからないものが安くてもそりゃあ売れない。売れなかった。

それでも今度は良い物が安い。そりゃあ売れる。売れるけど、売れない。こいつが作れる数には限りがある。材料費もある。生活費もある。この安さなら商売として成り立っているかも怪しい。頑張っても無駄な頑張りだと何故気付かないのか。

家族と他人。その両方を同時に幸福にすることなど出来ない。仕事と家庭は成り立たない。仕事を選べば家族が離れ、家族を選べば仕事を失う。両立などあり得ない。だというのにこの馬鹿男は。

「いいか。これはお前のためじゃない。お前がそこまで可愛いというこの子のためだ。お前だって解るだろう？お前の傍にいてこの子が幸せになれるとは到底思えない」

「……………そうだね。そうかもしれない」

「なら…………」

なら寄越せ。今すぐ寄越せ。

この恐ろしい才能の子供を手中に収める。幼い内からうちの娘と仲良くさせればその内勝手によるしくなるだろう。そうすればしめたものだ。

俺には跡継ぎの息子が生まれていないが、1人娘がいる。うちの

娘はお世辞抜きで可愛い。冗談抜きで可愛い。妻も俺も顔は悪くないから当然だが。その上性格だって悪くないし気品もある。男だったら誰もが惚れる。間違いないく惚れる。

そうなればこの才能を俺の家が手にすることが出来る。婿養子だつてつまりは俺の子供。俺を継ぐ。俺の名を継ぐ。この天才の師は俺になる。こいつが偉大な時計工になれば俺の名も語り継がれる物となる。

この数年でもほんの少しだが俺の時計の値段が下がってきた。品質は変わらない。むしろ向上している。それなのに、だ。俺は焦りを感じている。俺の時計を時代が不要になる日が、その足音が……次第に大きくなっていくのを感じている。

俺の時計が永遠を刻むことなどあり得ない。そう言われているようにで怖いのだ。この街では有名な俺の名前も、その内誰も知らない物となる。お前なんかちつぽけな人間だ。掃いて捨てるほど代わりはいる。歴史が俺にそう語りかけてくるようだ。

俺は時計を売ること自分で自分を売ってきた人間だ。俺は常に自分のために時計を生み出してきた。それは売名行為であり、俺の自己顕示欲の表れでもある。そうやって培われてきたプライドが、俺の名が埋もれることを許さない。俺の時計が永遠を刻めないのなら、俺の名だけでも語り継がせたい。偉大な男だと永久に崇められ続けたいのだ。

俺は俺とこの馬鹿との勝負はもう負けを認めてやった。だから自分の限界を、この才能に託したいと思つてはいけないのか？

そう。これはチャンスだ。どんな手を使つても俺はこの子供を手に入れなければならない。そう、どんな手段を用いても。だといふのにこの馬鹿男、幾ら言つても折れやしない。

「それでもそれはこの子が決めることなんじゃないか？俺はこの子がそう言うなら止めないし、この子がやりたいことがあるって言うなら無理に時計作りをさせようとも思わない。俺みたいになつて

もこの子が幸せになれるかどうかはわからないしね」

そう言い切った馬鹿男に俺は返す言葉を見失い、二度目の屈辱を味わわれた。

*

「何この男……最低だわ！」

男の独白に、鳩時計は頬を紅潮させて激昂。対する少年は冷たい眼差しで男を見やる。

かつての母のように惨めな男だと、それを鼻で笑うように。そしてこの男はどうしてくれようか。その処遇を考えるよう顎に手を当てた時、またもや辺りの景色が変わる。

それには少年も目を見開いた。見覚えがありすぎるその場所は、今に限りなく近い自身の我が家。場面が現在に近づいてきているのを強く実感する。

「ありがとう……っ！本当にっ」

「いや、安いご用だ。最近は疎遠になっていたがお前と俺は友人だろう？」

「ああ、ありがとう！！何て言ったらいいのかわからないけど本当に感謝してる」

「元々お前を追い出したのは俺みたいなものだしな……ずっと俺はそれに負い目を感じていたんだ」

「そんなことはない。あれは俺が業績を伸ばせなかったのが悪いんだ。お前のせいじゃないよ。それでもいいのか？俺なんかこんな大仕事任せてくれたりなんかして……」

二人の時計工が話をしている。見慣れた父の工房で。

「うちのギルドも名前の上に胡座をかいて精進を怠る輩が増えてきてな、最近じゃろくな職人がいなくなった。それでこの仕事を任せられそうな奴がいなかった。……お前は確かにぶっ飛んでるが、腕は確かだ。俺が今まで認めた職人はお前だけだ」

「トウール？」

「いずれ時代がお前に追いつく。俺はそれを知っていた。だからお前に負けたようで悔しかったんだ」

諦めたような表情で微笑む父の友人。その表情の裏に隠されたのは別の表情。

「それでもお前と競って時計を作った頃が一番楽しかったような気がしてな。若い奴への刺激にもなる。良い機会だ。……この仕事が上手く言ったら、うちのギルドに戻ってきてくれないか？」

表の顔。差し出された手を疑うことなく握り返す父はやはり愚かだ。少年は悲しい気持ちになった。

友人の声は全く違う物だった。それが彼には見えていたから。

男は悪魔の囁きに耳を貸してしまった。それに魂を売り渡したのだ。名声のために友の命さえ売る外道に成り下がった。

「俺のせいで……父さんは」

景色はやがて、父の最期を映し出す。時計を受け取る大富豪。その時計の完成度に感嘆の声を上げた大富豪は、次の瞬間手下達に天才時計工の殺害を命じた。こうなることを理解した上で、父の友人はあの商談を持ちかけに来た。そうすることで身寄りのなくなった少年を、父の友人という面で迎えるために。

幼い自分が間違って完成させてしまった時計。そこから回り始め

た齒車が全ての引き金。父が殺されたのは、この友人の差し金だった。

完全に今に戻ってきた二人の時計。怒りと悲しみに肩を振るわせている少年を後ろから思い切り少女が抱きしめる。彼の怒りを抑え込むためではない。その悲しみを共有しようとするように。

「クロシエツト……違う。時計は、違う」

「……………マキナ」

「時計は人を不幸にするための物じゃない。時計は人を幸せにするために生まれてきた物。だから違う。悪いのは人間よ！」

時計を完成させた貴方は悪くない。悪いのは、それを悪用しようと企んだ人間なのだと鳩時計は泣き叫ぶ。

「私は時計。私は貴方の鳩時計。必ず私は貴方を幸せにしてみせる！だから貴方は何も悪くない！クロシエツト……！ねえ……！そうでしょ！？」

「この男も！あの大富豪も！そうよみんな苦しめてやりましょう！？楽に何てしてあげない！！私達二人で、ずっといたぶって苦しめて何度だって殺してあげましょうよ！」

「でも、生きている人間を殺すのは難しいことなんじゃ……」

「簡単な話だわ！時計にしてみえればいいのよ！貴方は最高の時計工だもの！そうしてしまえば何度だって時計を直せる。動かせる。何回でも飽きるまで壊して、直して、壊してあげるの！飽きたらそのまま忘れて捨て置いてあげればいいわ！思い出したらまた壊していたぶってあげましょう！？ずっと、ずっとそうやって貴方の心が癒えるまで！それを繰り返し返せば良いんだわ！それが貴方の幸せ！貴方が幸せになるための方法なんだわ！！」

11：信仰と傲慢の星の巫女

大きく綺麗な屋敷の中に、綺麗なドレスを身に纏う、愛らしい娘が1人。

娘はとても幸せに何一つ不自由なく暮らしていました。その屋敷は世界中の幸福を集めて閉じこめたような佇まい。

唯一つだけ、似つかわしくないのはその屋敷の窓に映るその風景。屋敷の中が素晴らしければ素晴らしいほど、窓の外に広がる世界は奈落を思わせる。飢餓と貧困、疫病と犯罪。それが我が物で暴れ回る地獄絵図。今日もあちこちから上がる悲鳴。

それを見つめる度に、娘は苦しい思いになるのです。

＊

屋敷から見下ろした街はとても汚らしい。今日も大勢の泣き声が聞こえてくる。

“ 嗚呼、お腹が空いた ”
“ パンを買うお金もない ”
“ 身体が痛い ”
“ 咳が止まらないんだ ”
“ 薬が欲しい ”
“ 嗚呼、でも金がない ”
“ 金があれば家もない ”
“ 家もなければ伴侶もない ”
“ 伴侶がなければ子さえない ”
“ そんな惨めで哀れな私を誰が支えてくれるのか？ ”
“ そんな私を一体誰が救ってくれるというのだろう ”

……街が泣いている。

ねえお父様。どうして街にいる子供達は毎日あんなに泣いているの？どうしてあんなに濁った暗い目をしているの？どうしてあんなに薄汚い格好をしているのかしら？汚れたなら新しい服を買えばよるしいのに。

「奴らには仕事がないんだ。だから服を買うお金がないんだよ」

そう言った父様はとても汚らわしい“物”を見るような目をしていた。街の外観が損なわれているのは彼らの所為だと言わんばかりのその表情。

仕事がない人間は、金のない人間は社会のゴミだと父様のその目が物語る。

いいえ、きつとそんなことはありません。父様にそう無理を言つて外へと連れ出して貰ったけれど、外はますますわけのわからないことばかり。

どうしてあの人達はあんなに荒んだ心をしているの？ちよつと目が合っただけで訳の分からない言葉で私を罵り睨み付けるのよ。

私が彼らに何かをしたわけでもないのに。私が目に映ること自体気に入らないと彼らの目が言っていた。

それは何故？屋敷に帰って私は必死に考えた。嗚呼そうだわ、きつとあの人達はお腹が空いていたんだわ。お腹が空くと誰でもどうしてもカリカリしてしまうものなんだから。お腹いっぱい食べた後なら、きつとあの人達も優しい人。本来の自分を取り戻してくれる。そう思い立ち、素晴らしいことを私は思いつく。そのために夕食に手を付けない私を見た母様は、私にその理由を尋ね、笑顔で私が答えれば、やっぱり父様と同じような瞳で私を見るのです。

「何て勿体ないことを！あんな下賤の口にこの高級素材が入ったら、この肉も何のために殺されたのかわからないでしょう！？このお肉はね、私達上流階級の人間のために生まれて育てられ殺されてこうして食卓に並ぶことが誇りで救いで喜びなのよ？あんな汚らしい人間に呑み込まれてご覧なさい。なんのために死んだのかもわからないじゃない！大体あんなゴミ共に、この一流料理の味が理解できるはずもないわ！」

母様は食卓のために屠られた動物の命よりも、道に転がる彼らの命が軽いと言いたいようでした。

私は母様の言葉がよくわかりません。どんな動物だって怪我をすれば痛いし、殺されたくはないはずだから、誰に食べられたとしても痛いのも悲しいのも変わらないはずです。だからせめてその動物たちのために祈り感謝するのは大切なこと。それが救いに何てならないんだろうけれど、私達は自己満足のためにきつとそうする。でも毎日お腹いっぱい食べられる私が思いたしたようにちよつと感謝するのと、食べることに困っている人達の口に入ってその人達に沢山感謝してもらえると、どちらが良いことなんだろう？それはたぶん決まっているわ。誰にでもわかるはずのこと。

ねえお母様。それなら、それなのにどうしてあの人達にパンを分けてあげてはいけないの？うちには沢山食べ物があるじゃない。キリがないから？何も変わらないから？みんなにそれを配ったら、あの人達のような暮らしを私達がすることになってしまふからなの？それなら私頑張るわ。私も父様みたいな立派な時計職人になるの！そうしたら沢山のお金が入るわ。それで私がパンを買いうわ。それで配ればいいの。それなら何も不自由なことなんて無いはずだわ。ねえお父様。どうして私に時計作りを教えてくれないの？どうしてギルドは私を雇ってくれないの？

「それはお前が女だからだよ」

父様はそう言って残念そうに私を見た。私では父様の跡を継げないのだと父様は言う。

どうしてと問いかけてももう、答えは返ってこなかった。

だから私は勝手にした。勝手に時計を発明した。考えに考えて私は1人で時計を作り上げた。

それを見せたとき、父様は両目を思いきり見開いていた。

この時計は私が作ったの。凄いでしょお父様？

文字盤は二十四時間。月と太陽と12星座を示す重なる文字盤。

太陽の位置、潮の満ち引き、月蝕に日食まで私の時計は指し示す。

システムとデザインに凝れば新たな市場の開拓も可能。客層を増やすことで顧客も増える。父様の時計じゃ女の人の興味は惹けないわ。そんなんじや駄目よ。

胸を張り自慢の時計を見せた私に、父様はこれだから女はと冷やかな視線を送り付けた。父様にそんな目を向けられたのはこれが初めて。

父様はシンプルな時計が好きだったから、私のデザインを受け入れてはくれなかった。それどころか時計に対する冒涇だと口汚い言葉で私を罵った。その言葉に私は思いきり頭を殴られたような衝撃に打たれ、耐えきれずに屋敷を飛び出した。

どうして誰も彼も私の好意を無下にするのかしら。どうして私は泣いているの？

私が願っているのは私の幸せではない。多くの人のことをなんとかしたいと本気で思っているのに、そうすればそうするほど、私は手にしている物を失っていく。私ばかりが不幸になる。その分の幸せが可哀想な誰かに行き届くこともなく、私だけが不幸になる。それはあまりに理不尽ではないかしら？私は何のためにそれを手放した？顔も知らない誰かが笑顔になるならそれはとても素晴らしい。

幸せなこと。だけど何も変わらない。何も代わりはしないのに。

見知らぬ街は異境のよう。屋敷の中から見ると父様に連れられて歩くのともまた違う。実際自分の足で歩いてみると、人々のうめき声が、息づかいがすぐ傍から聞こえて来る。

暗い気持ちと共に傾く太陽。暗くなつて夕暮れ。帰り道も解らない。

夕暮れの物悲しさと寂しさの中、ゴーンと響く鐘の音。それだけが手がかかり。それが何処か何なのかわからない。それでも道なき道を指し示してくれるもののように思えて私は歩いた。鐘の方へと招かれるように……

私が迷い込んだのは、古ぼけた教会。信仰の薄れたその場所は物悲しさを纏つてそこにある。現金な人々。忘れられた神様。可哀想に。埃の積もった偶像。まだ祈りの表情を浮かべている。だけど誰ももうついてきてはくれない。信じてくれない。

人は本当に自分を救ってくれる力がなければ誰も信じない。人は信じることにても打算的で、利害を考える。それは悪魔に魅入られたような、魂だ。そこから人を救うのは信仰だ。この街に必要なのはパンでもお金でもない。誰かを何かを信じる心。それがここには欠けているのだ。

「……教会にお祈りかい？ 若いのに見上げた子だねえ」

現れた老修道女。今この教会にはこの女しかいないらしい。そのしわくちゃの手で鐘を鳴らしていたのか。鐘の所までは何段階段を上るのか。この老体には大変な仕事だろう。辛くはないのだろうか？ そう思った。しかし老婆は外見こそ年老いて醜いが、希望をまだ失っていないような輝かんばかりの瞳をしていた。その目はこの街のどんな人間よりも美しい色をしている。それがどうしてなのか不思議だった。

「貴女は信じてるんですか？……神様って、本当に居るんですか？」

「ああ、私や信じとるよ」

老婆はからからと笑う。

「神様って……どんな方なの？」

「そうだねえ……」

老婆は一度それはとても醜くにつこり微笑んで、私を指さした。

「今の私にとってはお嬢ちゃんと同じ顔をして居るよ」

「私が神様？どういうこと？」

お客様は神様だと父様はよく言っていた。この老婆は寂しさのあまり訪れた私にそのくらい感謝しているとそう言いたいのだろうか？そう思ったけれど老婆はそうではないと首を振る。

「出会う人はみんな神様さ。主はね、恥ずかしがり屋でね、人の目に映りたがらないのさ。だから誰かの中にこっそり隠れておいでになっては私達を試すのさ」

「試されている……？」

「嬉しいことも悲しいことも、みんな主が私達に与えるものなんだよ。好きな人も嫌いな人もみんな主に操られて私達を試しているんだ。だから、私は出会う人全てに主が正しいと思うような受け答えをしなくちゃいけない」

「……それじゃあ貴女は私の神様なんですね」

「お嬢ちゃんがそう思ってくれるならそうなのかもしれないねえ」

「それじゃあお婆さん、私ここに居ても良いですか？」

私の言葉に老婆はおやおやと驚いたような顔になる。それが予想外すぎたのか、口からは他の言葉が見つけれずにそればかりが繰り返されている。

この人が私に現れた試練なら、私はまずこの人を救わなければ話にならない。目先の人を救えずに全てを救えるはずがない。父様と母様を救えなかった私。逃げ出した私に与えられたチャンスで試練。私はここから逃げてはいけないと思った。

この人はとても満ち足りた顔をしているけれど、寂しそうに私には見えたから。

「でもねえ、ここには何も無いよ」

「それでも全てがあります」

私は微笑んだ。

*

教会に拾われた少女。年老いたシスターに代わり教会を切り盛りする才ある少女。少女の素晴らしい才が生み出した唯一無二の時計。父に散々罵倒されたその時計は余所の街の中心に掲げられて街の名物。何処にでも酔狂な人間はいる。そういう馬鹿は金になる。彼女の時計に魅せられた人間達によって、その後ろ盾は次第に強固な物となる。支援者から贈られる金。その金は教会を建て直すには十分だった。彼女が与えるのは衣食住の保証と職。失業と流行病と飢えに苦しむ人間に、教会は確かに救いだった。そんな彼女の慈悲の心に人が集まり、教会にで祈り働く人間も数を増やしていった。

彼女は幸せだった。屋敷で暮らしていた頃よりも、ずっと日々が満ち足りている。ゆつくりと流れる時間。秒針に追われるように急かされることのない日々。

けれど現れた、そんな幸せな日常を壊す存在。時間を盗んだ大泥

棒。こともあろうにそのこそ泥は、時間をどうしたか？何を血迷ったのかそれを人に配り歩くという行為。

それは彼女にとって、それは冒流以外の何物でもなかった。耳障りなその歌は、教会の前をも通り過ぎる。

「悪魔め……主を冒流するなんて！」

急いでそれを捕らえようと外へ飛び出した。けれどもうそこには誰もいない。耳障りなその歌がどんどん遠くなっていく。時間泥棒。彼は言うなればカイロス。現れてから追うでは遅いのだ。

かといって少女も暇ではない。いつ来るかもわからないその悪魔のために割ける時間もそうそうなかった。自給自足の生活とは本当に大変で忙しい。それでもその忙しさにこそ喜びがある。太陽と月が巡る中、祈り働く日々は本当に満ち足りている。そこに正確な時間など必要ない。神とはその曖昧な時の中に息づくものなのだ。だからこそ許せない。こんな風にそれを暴き立てるあの悪魔の子。

このまま放っておくことは出来ない。あんな風に時を語られては困る。

これまで教会の鐘は人の生活の一部として存在していた。信仰の薄れ行く人々も、晩鐘の中に祈り省みる程度の心は持っていた。それをあの時間泥棒……あの子供が正しい時間を暴き立てる。その所為で教会の鐘は意味を無くした。

教会は曖昧な時間の中に鐘を鳴らす。それは今のこの街にとってありがたいものではなくなってしまった。正しくもない、毎日違う時間に鳴らされる鐘。それに人々は惑うのだと言う。街の人々は真実を求める。正しい時間を欲しがった。けれどそれがどんなに罪深いことを彼らは知らない。

(……………恐ろしいことだわ)

この街がこんなにもおかしいことになっているのはそのせいだ。人は数字に囚われている。

人が信仰を無くしてしまったその発端。それは金とそして機械によるものだ。人々は俗物となり自らの罪を忘れ、日々墮落し続ける。教会からは人が減り、祈り働く人間も減っていった。今の人々は何のために働いているのか。それは金のためであり自身のためだ。誰も彼も自分のことばかりで他人を思いやる余裕など無い。

「ああ、主よ。罪深い彼らに代わって悔い改めさせていただきま
す」

女は日に三度鐘を鳴らす。これから祈りが始まる。それを知らせるための鐘。そこに正確な時間はない。なぜなら教会に時計なんてものはないからだ。

時間は神の所有物。それを人間風情が我が物顔で支配したつもりでいるような今日の風潮を、どうしても認められない。人の命は神から貸し与えられた物に過ぎない。それをこの街の人間の内何人が自覚しているだろう？

救われることを前提に。そうでなければ神など信じない。刈り取られることを嘆く。貸し与えられた時間を返されることを怨む。それが最初から自分の物だったのだなどと言う主張をもって。

「主よ、貴方は何をお考えなのですか？あんな悪魔を野放しにして……」

捕まえられないのならそれはきつと神の意志。そう。悪魔の子とはいえ人間だ。その命を刈り取るのは我らが主。主がそれを刈り取らないのなら、そこに意味があるのだろう。私はそこからその真意をくみ取らなければならない。

時間は神の所有物。それをばらまく時間泥棒。あの存在は禁忌に

触れている。それでも神がそれを認めているのは何故か？

「あり得ないわ……そんなこと」

女は首を振る。下らない妄想だとその考えを振り払う振り払う。時間泥棒が人々を救う救い主であるはずがない。この私にも聞こえない神の声を、その意志を体現しているだなんて認めない。

「主よ……貴方は私を試していらっしゃるのですね」

お前にあれを捕らえることが出来るか？その罪を曝いて正しく裁くことが出来るのかと私に問いかけているのだ。私の声が聞こえているか？その意思を正しく酌み取っているのかと……私に試練をお与えになったのだ。

自らを奮い立たせるように女は深く息を吸う。合わせた掌にも力がこもる。早速女は行動に移すべく聖堂を後にし、両手を叩いて修道士達を集めた。

「さあ、お集まりなさい！」

「如何なされましたかアストローベ様？」

「主はお怒りです！主はお嘆きです！主は時間泥棒を許さない。私達の手で捕らえて裁けとのお言葉です！」

基本的に教会は許すためにある。勿論罪を裁くのも仕事ではあるが、それが目的ではない。目的は魂の救済。罪に汚れた魂を悔い改めさせるのがその目的。

だからこうして犯罪者を追うということは珍しい。犯罪の溢れた街だ。それを片っ端から捕まえるとなると無理がある。だからこそ声高らかに教えを説き、自ら懺悔をしに来させ悔い改めさせる。それが最も効率の良いシステム。

それでもここまで街を揺るがす大泥棒。もはや放置しては置けない。時間泥棒は街の権力者達全てを敵に回した存在だった。

これは神が試している。他の権力者に捕まれば時間泥棒は間違いなく殺される。その罪を悔い改めさせる暇もない。それではいけない。神は悪魔に魅入られた大罪人の中にも僅かにいらっしやるのだ。その悪魔を払って人へと戻すのが教会の務め。罪人の魂さえ、救わなければならない。

そんな思いで女司祭は教会の全勢力、そして支援者の力をも用い時間泥棒の捕獲に挑んだ。それでも時間泥棒は捕まらなかった。あれはまるで風の化身。どこにでもいてどこにもいない。ここにいたのにもういない。それはあの悪魔の足が速いから……その一言に集約するにはいささか足りない。あれにはまだ何かある。でなければおかしい。教会の仕事を疎かにしてでもあれを捕らえようと人員を割いた。それなのに何故未だにあれは捕まらないのか。

女司祭が頭を悩ませているそんなある日、聞き慣れた下手くそな歌が教会を通り過ぎない日が出て来た。

呼ばれるがまま足を向けた先での惨状に、彼女は僅かに安堵した。答えはそこにあつたのだ。

それは恐れていた事態のはず。それなのに女司祭は、どこかほっとしている自分に気付く。

そのむごたらしい死に様こそが答え。神への冒瀆。それにやっと天罰が下った。そう思ってしまった。

（やはり主はお怒りだったのだわ）

時間を盗むなんて大罪。やはり許されることではない。この少年は神の所有物へと手を付けたのだから。ギルドの時計工達も最近では売れなくなってきた。時間泥棒の時報を聞けば聞くほど自身の時計の不具合に気付く。日々狂いが生じる時計など誰が大金出して買うだろう？

時間泥棒が死んだとはいえ、その負の側面を知った貴族は時計を買わなくなるだろう。そうなれば時はいずれ神の手の中へと帰る。それが神の望んだシナリオだろう。

しかし、驚くべきことはその翌日に起きた。またあの忌々しい歌が聞こえた来たのだ。それは幻聴だろうか。いや違う。確かに聞こえる。足音も。

女司祭が飛び起きて、窓から外を見下ろせば……小さくなる子供の背中。それは昨日確かに死んでいた少年のそれ。

それを目にしたときの冷や汗、胸騒ぎ。

「あ、悪魔……っ!？」

殺されたのに死んでいない。まだ生きている。走っている。罪を裁かずに悔い改めもせずに殺された魂。それが再び甦った？自分が彼を救うことを放棄したから彼は本当に悪魔として甦ってしまったのだろうか？

それとも……突如頭を掠める本の一節。奇跡の一文。目の前のそれは確かに奇跡。復活を為し得るのは証明。

「違う……」

時を盗んだのではない。あの少年は神から時を託されたのだ。彼は救い主だったのだ。それを人は殺めてしまった。私は彼を見捨ててしまった。その死を喜びさえした。

膨れあがる罪悪感あまりに大きい。それが大きすぎて、女司祭はそれに耐えられない。

「あ、あり得ない。そんなことっ！あるはずないっ！」

彼女は否定する。それを肯定してしまえば自身の過ちを罪を認めることになる。祭り上げられた彼女にもはやそんなことは出来ない。

深い信仰心を持ち、正しくそれを理解し常に正しいと認識している自身を否定されることは自身の世界の崩壊を意味する。それは彼女にとって死よりも辛いことだった。

（曝いてやる……っ！そんなこと、あつて堪るものですか！）

女司祭は再び時間泥棒の搜索に時間と人を割いた。

手に入れた情報は、時間泥棒の足が前より僅かに遅くなったこと。それから歌が妙に上手くなったこと。それでも追いかけてもすぐに見失ってしまうのは相変わらずだ。手下の失態と使えなさに齒ざしりをしていたある日、1人の来客。

現れた金貸しは、1人の子供を連れていた。その子供こそ、探し求めた時間泥棒。

その身柄を引き渡すように頼めば、金貸しはとびきりの嫌味を運ぶ。

「本当は金貨を請求したいところですけどね、教会はそう裕福じゃなさそうですし銀貨三十枚で手を打って差し上げますよ。その程度なら余裕があるでしょうお嬢さん？」

「銀貨、三十枚ですって!？」

その数は聖職者である彼女にとって最大級の侮辱で嫌味。それでもここで断ればこの男は、この少年をここから連れ去る。

「嫌なら別に構いませんよ。若い修道女の何人か譲ってくださいしても。私の紹介する仕事の方が余程金になりますし」

「よくもまあ神の家でそんな汚らわしいことが言えるものですね」

嫌味な男。こんな男の中にも主が僅かには宿り、私を試しているのだろうか？こんな金の亡者、悪魔のような男にさえも。どうすれ

ばこの男を魔から振り払えるのかまるで見えない。救いようがないとさえ思う。

どうして今まで捕まえられなかったのか。それが解った。時間泥棒にはこの金貸しの後ろ盾があつたのだ。何処でどう結びついたのかはわからない。それでも金貸しの元締め協力が在れば匿う場所など幾らでもある。先日死体はおそらくまったく別の人間の物だろう。それをこの金貸しが時間泥棒として偽造しただけに違いはない。なんということだ。

今もこの機会を逃せば、何処か安全な場所に隠されてしまう。チヤンスは今しかない。この二人は今仲違いでもしているのだ。また手を取られる前に引き渡して貰わなければ、もうこんな好機はない。それでも答えはこの金貸しの中にはない。見極めるべきは時間泥棒。見れば見るほど小柄な子供だ。自分よりも年下のようなそんな子供が何故こんな大罪を犯してしまったのか。信じられない。何か事情でもあつたのだろうか？

「……貴方は何故あのようなことをしたのですか？」

相手を実際見てみて子供だと知れると僅かに同条の心が芽生える。手足も細い。可哀想に。きちんと食べているのだろうか？もしこの場できちんと悔い改めて改心するのなら、教会で受け入れてやつても良い。その位には哀れんだ。

「僕は聖職者じゃありません」

少年は目を逸らさずにそう語る。その小さな身体に似合わないあの種の迫力を漂わせていた。それは憐れみなど不要と吐き捨てるような言葉だ。

「ですから頬を打たれたら反対側を差し出すような真似はしませ

ん。奪われたのなら奪い返します。どんなものでも絶対に」

加害者ではない。犯罪者ではない。仮にそうなのだとしてもそれ以前に被害者だ。神も教会もその罪を見過ごした。だからこそ奪い返したのだと彼は言う。

「それは良くない考えです。誰かが我慢しなければ耐えなければならぬのです。貴方がそのようなことを言うのは貴方の心が貧しいからです。何故そんな風に思ってしまったのです？」

「仮に貴女が正義で本当に正しいのなら、何故野放しになっている罪があるのでしょうか？」

「教会にも限界という物があります。皆を皆捕らえて裁くというのは人員不足のため行えないこともそれはあります」

「それなら僕にも限度という物があります。許せることと許せないこと。それはあります」

悠然と構えたその不遜な態度が気に入らない。この子供は全く反省をしていない。恐れも知らない。どこまで神を冒瀆するつもりなのだろう。

「そもそも僕の行為の何がいけないのでしょうか？まずそれが疑問です」

「貴方、それを本気で言っているの？」

「ええ、本気ですよ」

少年は事も無げに薄く笑む。自身の罪を認め無いどころか開き直るそのふてぶてしさ。子供だからと許されることではない。

「僕は唯歌を歌っていただけです。それで走っていただけです。この街には歌うことを咎める法も走ることを禁止する慣習も無いは

ずでしょう？」

「確かにそれはそうですが、貴方の行いは間接的に神を冒瀆する行為なんですよ？そんなことも知らなかったとでも？」

子供の無知、それが大罪を生んだのだとしたら子供とはなんと恐ろしい存在か。何も恐れないから、ここまで傲慢でいられる。何処までも自己中心的。自分が世界の中心、神が何かだとも思っていないのだろう。

だから神になった気分で、人を勝手に哀れみヒーローごっこをしていた。そんなエゴで神に牙を剥いた？

（何てことなの……）

この子供はこれまで相手にしてきた罪人とは格が違う。どんな言葉を告げればこの少年から改心の言葉を引き出せるのかまるで見えない。この金貸しなら言わせるだけならまだ容易。金を積みめば言う。それを言葉として繰り返し返させることで耳から脳へと伝わり次第に本当に改心していくことになるだろう。

けれどこの少年はその1度目の言葉を引き出す糸口さえ見えない。この少年は隙がない。確固とした意思を、どうすれば打ち破ることが出来るのか女司祭が即座に知ることは出来なかった。

「神を信じるのは貴女の自由ですが、信じないのは僕の自由です。それを押しつけるのはどうかと思いますよ？そういう人間が存在すること認めず、貴女はそんな自身の感情論で人を裁くんですか？司法が聞いて呆れます」

「お黙りなさいっ！」

押し黙った途端攻めに転じた少年の言葉。女司祭はそれが敗北なのだと知り、だからこそ生まれる更なる苛立ちに怒鳴り散らし、机

に両手を打ち付ける。書類が吹き飛ぶが気にしない。気にもならない。今は目の前の悪魔の如き少年が唯々気に入らなかった。

すぐさま机の鍵を開け、引き出しから金を取り出す。そしてそれを思いきりぶちまけてやった。

「交渉成立よ金貸しレーヌっ！時間泥棒は私が法廷で裁きます！最後までお前が罪を認めず悔い改めないというのなら……それ相應の罰の覚悟をなさいっ！」

12：鳩と駒鳥

時間泥棒が捕まった。その表現は些かおかしい。

そもそも時間泥棒はもう死んだはず。それが再び時報を告げ出し、そんな彼が捕らえられたという。それならば時間泥棒とは一体何だったのか。

あれは亡霊だと口にしていた人間は捕らえられる者であったことに悔しがったが、まだまだ噂は終わらない。それなら奴は生きていたんだ。いや違う。それは別人だ。いいや死んだのは確かだ。それでも生き返ったんだ。推測、邪推、噂の数々。その騒動で街中が持ちきりになる。

「街がなんだか騒がしいね」

「そうね」

二人の時計は人々のざわめきから少し離れた場所にいた。時計達は復讐のために、大多数の人間なんかに構っている暇はなかった。やるべきことは多く、そして全く別のこと。

それでも少年は後ろ髪を引かれるような心地になっていた。それは時折人々の口から漏らされる、時間泥棒という言葉。それはかつて少年自身を指し示すための言葉であった。

だからついつい振り返ってしまいそうになる。父の死語誰からも名前を呼ばれなくなった少年は、その言葉こそが自身を言い表すものだった。それは時計になった今でも、妙に耳に懐かしく……妙な気持ちになってしまう。

「何かあったのかな。マキナは何か知っている？」

「私も何がなんなのか……」

少年に尋ねられた鳩時計は首を傾げる。

「確かあの人達、時間泥棒が捕まったって言っていたけど……誰かクロシエットの真似事でも始めたのかしら？」

「そうかもしれないな」

少しそのことに少年が興味を示せば、鳩時計はその興味を打ち消すような言葉を口にする。少年の名を、別の人間が騙っていることが不満だと言わんばかりの表情で。

「でもその子、きっと才能ないわよ。だから簡単に捕まったりしてしまうんだわ。それに引き替えクロシエットは凄いわ！時間泥棒としての才能のみならず、時計工としても凄い力を秘めている」

「それはどうだろう？……あれはきっと、まぐれだよ」

鳩時計の少女はどこまでも少年を持ち上げるが、少年には自信というものがない。これから待ち受けている仕事さえ、満足にこなすことが出来るのか。その自信が彼にはない。

「父さんはどうして俺に、時計作りを教えなかったんだらう……？」

父はことあるごとに口では跡を継がせたいようなことを口にしていたが、決して無理強いはしなかった。そうされていたならば、押しに負けていただらうと少年は考える。

「俺に本当に時計作りの才能があつたなら、父さんは絶対にそうさせただらう。つまり俺は、父さんから見れば大した才能なんて持っていないかったんだ」

きつと失望させていたんだ。だからそこまでして跡を継がせようとは考えなかった。

「俺が時計工になっていたとしても、きつと父さんには敵わなかっただろうよ。昔の父さん達を見て、そう思ったんだ。父さんは天才だ。だからそれを傍で見続けた……あの男は狂ったのさ。そして正常な判断が出来なくなった」

「それはそうだけど……」

「だからだよ。それで俺なんかを買い被ってあんなことをした。救いようのない馬鹿だ」

救いようがない。それは少年にとって救えないという意味ではない。それは救わないという意味。過去を知ったところでそれは免罪符にはならない。どんな理由があってもどんな劣等感があっても、人殺しは人殺しだ。例えばそれが間接的なものであっても、それは理由にはならない。だから許さない。

「あいつにも似合いの最期をくれてやる」

「その気持ちがあれば充分よ。それじゃあこの街の時計を直しに行きましょう？ 私たちに使える時間はないけれど、無駄に出来る時間は一つもないわ」

鳩時計に促され、少年は決意も新たに頷き従う。歩き出す方向は人々は逆。人並みを擦り抜ける透明さで二人は雑踏から離れる。その雑踏の一人として二人を振り返ることはない。

二人が向かう先は、時を刻むことを忘れた時計塔。長らく街のシンボルであったそれも、時の流れと共に不要となってしまうた過去の遺物。

どこからも見えるようにと掲げられた大きな文字盤。街を見下ろせるように高く高く天を望む塔。時計の小型化が進み、技術が失わ

れた。今のギルドの人間ではあの時計は直せない。第一部品がない位置から部品を作る気もない。そんなことをするくらいなら、新しい時計を作りたい。誰が作ったかもわからない過去の栄光に縋るより、時計工達は未来を求めた、自分の時計が閃きが、後世に名を残す物であれ。

「こうやって時計になって見てみると、あの頃とは随分と街の景色も違って見える」

時計塔から見下ろした、街はあまりにちっぽけで。こんな小さなものならば……この両手で盗めると思えた。握りつぶせそうだとも彼は思った。

「どう見える？」

「街が、死んでいるよ」

耳を澄ましても、聞こえるのは偽りの鼓動。時計は嘘ばかりを吐いている。でもそれは時計が悪いのではない。人間が悪いのだ。

「時計はそんなために生まれたわけではないのに」

「クロシエツトは時計が何のために生まれたと思うの？」

「それは真実を刻むことで、人を幸せにするためだよ。それが生きている時計の在り方だ」

これから人を不幸にしに行く自分は死んでいる時計。だから間違った在り方をそこに刻みに行く。それは父から教わったこと、それに背くようで辛い。

（それでも僕は……）

もう会えないのだ。父程の人間ならば、人に尽くして生きた人なら。きつと天国にいるだろう。煉獄に堕ちた少年では、謝することも永遠に出来ない。その思いが胸を刺すが、それでも憎しみは消えない。罪を犯した人間が野放しになっている今を、少年はどうしても見過ごせないのだ。

「これが、壊された時計か」

「ええ。長いこと眠らされている時計よ」

少年が時間泥棒だった頃。生きていた頃は何度も鐘を鳴らしにやってくる来ていた時計塔、その内部。そこまで踏み込むのはこれが初めてだった。いつもは階段を上り鐘の所まで行くだけだった。彼は動力室を避けていたのだ。死んだ時計を見るのは辛かったから。

しかしこうして対面する時が来て、殺された時計を目にして、何とも言えぬ哀愁を少年は覚えることになる。

動力源である振り子装置が取り外されているため、時計は動かない。それでもこの時計塔は昔に作られた物。鐘は人力で鳴らす仕組みだ。これを取り外されていたならば、少年が鐘を鳴らすことはなかっただろう。しかし老朽化したこの時計塔は、危険な場所。今更鐘の除去も出来ず、誰もしない。危険なだけ危険で、そんな金にならない仕事のために自分の時間を費やす馬鹿もいなかった。精々そのまま足でも滑らせて、時間泥棒が死ねばいいと思うくらいで。

「悲しいものだよ。時間っていう奴は。仮に永遠を刻む時計を作り出せたとしても、人はそれを捨てて行くんだろう。下らない流行に時代の変化に全てを置き去りにする」

少年は聞く。止められた心臓の音。生きているのに死んでいる時計。この街の至る所から悲しい時計の音がする。

貴族に弄ばれた先、廃れていく時代と流行。まだ使える、まだ働

ける。でも殺される、眠らせられる。捨てられる。死んでいく。時計は哀れな生き物だ。

「でも針が無ければ時計を直す以前の問題だよなあ……」

時計作りなんて記憶にない。幼い頃のまぐれを才能だと褒められたところで少年には時計作りの技術も知識もない。父の傍で見えていただけ。聞かなかった。教えられなかった。だからこの時計や時計の部品を見るのは好きでも、直せたりはしないのだ。そんなことが出来ていたならば、あの家に残された全ての時計をまた動かしてやることが出来たのに。

「あらくロシエツト、それは固定概念だわ。針があるから時計じゃない、時計だから針があるのよ」

「つまり……時計を直せば、以前の姿を取り戻すってこと？」

「そういうこと」

「それなら何にも触れない、俺が新たに針とか部品から作るって作業は要らないんだね」

「そういうこと」

少年の言葉に、鳩時計は頷いた。

「でも……マキナ、それなら俺はどうすればいい？」

「音叉時計って知ってる？」

「音叉時計？聞いたことないけど……？」

「今のこの街は機械時計がメインだもんね。それならそうね、仕方ないか」

鳩時計は小さく笑う。少年が知る由もないが、どんな世界にも人と時計の作る歴史がある。

だから順序というものがある。発明の順序。新たな技術と時計が生まれる順序。それはどの世界でも同じ。その作り手の名前と年に変動はあっても。

自然を用いる日時計、水時計、火時計、砂時計。そこからやがて機械時計。ゼンマイに、振り子に……そして音叉が生まれる。

しかし、この街ではまだそこには至らない。機械時計の世界なのだ。多くの世界を知る鳩時計の少女から見れば、この街は遅れている。少女の言葉が分からない、少年が首を傾げていた。そんな少年に、“少女”は語りかける。

「ねえクロシェット、貴方はどうしてこの街から外に行かなかったの？」

「え……？」

「この街は苦しい。働いてもお腹いっぱいなんか食べられない。雇って貰えない。そして病気になれば治せない。お金がないなら何も出来ない。普通の人間が幸せになんかなれない場所よ。それでも貴方は、どうしてこの街から逃げなかったの？」

「それは……」

普通に考えれば、おかしいはずのこと。それをおかしいと思えないこと。その枠に居る人間は、それに気付けない。組み込まれている歯車が何故自分が回っているのか何て考えることもないように。唯回り続ける。

それでも少女は、この街の人間ではない。第三者だ。だからそれに容易く気付く。

居住選択の自由がこの場所にはないのだ。この街の中にのみ、この街の人間が住まうことが許される。

街単位で都市国家が成立しているこの世界において、その都市一つ一つが世界と言える。

その都市の一つ一つに、権力者が悪が必ず居て人は虐げられてい

る。それは時計がどんなに素晴らしく正確になっても、変わらず今日まで続いている。そんな理不尽な世界。人は皆生まれた場所で、恋をして死んでいく生き物だった。街の外を誰も知らない。この街でも、他の街でも。

小さな街は、それぞれが独立した世界。互いに干渉しない。王は人が生まれたその土地から逃げ出すことを許さない。普通の人間なんか街から一步でも外に出れば、お終い。武力を持ってそれを排除する。意味もなく殺される。そう教え込んだ。理由など無い。理解できない。それでも逃げ出してはならないのだと、人々に教え込んだ。そしてそれが世界の常識となる。

「クロシエツト、貴方は神を信じる？」

「死んだ上に煉獄なんて所に堕ちた以上、居るって言わなきゃならないんだろうけど、認めたくはないな」

「そうね。死後の世界にならそういう概念はあるかもしれない。でもここは人の世だから、そんな者はいないのよ。少なくとも生きている人間の世界には。居るのは一人の人間よ。彼は唯の、王なんだわ」

だから人を苦しめるのも人を救うのも人なのだと、少女は悲しげに笑う。

街から数十キロ離れた場所に聳える高い壁。丸く囲われたこの街は、空から見れば時計のようだ。人はその街の中で、せかせかと生きる機関の部品。王はこの時計塔より高い場所から、彼は地上の時計を見ているのだ。

「王様……？」

「全ての理不尽は彼の時計作りが生み出した。彼は永久機関を作った。ただ都市は、^{とけい}いつか全て時を止めるわ」

少女の突然の言葉に、少年は理解が至らない。言うより見せるが早いと、少女は背中の中、真つ白な翼を広げた。

「クロシエツト、私に掴まって」

少年の返事も待たず、少女は彼を抱えて飛び上がる。遙か上空。見下ろす街は丸く囲まれている。そしてその数十キロ先に……そのまた向こうに東西南北……沢山の円がある。その全てが時計なのだ。と少女は言う。

その都市達の中央に、天に挑むような大きな棟。それが太陽を遮る姿は、大き過ぎる日時計のよう。その影が、長く伸びてここにも時を刻む。小さな世界を生きているパーツは生涯目にすることがない、外の世界に広がる時計。

「クロシエツト、ほら……見える？日時計の向き。あそこが日の出。あそこが日の入り……あそこは真夜中」

真夜中と指さされた、そこには古ぼけた円。瓦礫の山だ。誰も住んでいないだろう。草木が伸びて建物を呑み込んで……。その哀れな街のために、少女は呟いた。例外なく、都市は滅ぶ。内から綻んで。音を無くしてもう何も刻まず、唯そこにあるだけの物となるのだと。

「……あの街は、どうして滅んでしまったんだ？」

「いろいろ理由はあるわ。内部での対立とか、それか外を知りたかったか」

「外に……？」

「ねえ、クロシエツト。貴方だって時計の部品が外にボロボロ転げ落ちてきて、時計が壊れてしまったら嫌でしょう？」

それと同じ事よと、少女は溜息ながら言う。

少女は世界の姿を見せ、真実を教えた上で、再び小さな円の一つの、時計塔へと舞い降りる。

「俺……知らなかったよ。この時計塔は街外れにあるものなんだって思っていたけど」

まるでミニチュアだと少年は思う。時計とは世界の中心に置かれたあの柱型日時計の模造品だ。

都市の拓けている場所と、緑に包まれた大きな森。それはさながら文字盤の昼と夜。

上空から見るまでは、森があんなに広いとは思わなかった。街の人間はあまり森へは近寄らない。森は無名仏の墓地があるため、昼間でも陰気な風が吹く。このご時世だ。墓曝きをする墓荒らしまで出る。そんな場所。薄気味悪い上に危険だから誰も行かない。

今思えば余程隠れ家には、最適な場所のようにさえ少年は思う。何故あんな危ない街の中に何故身を隠したのか謎だ。

（あれ……？そもそもどうして僕は？）

僕は殺された。大富豪に。それは何故か？時間泥棒だったから。だけどそれは何故？僕が捕まったから。どうして僕は捕まった？

そこまで思い、少年は違和感に気がついた。自分の特技を持つてすれば、そんなことはありえないのだ。唯、大富豪の家に忍び込んだ記憶はある。走っていた記憶もある。手には金貨を掴んでいた。でもそもそも何故金貨が欲しかったのか。それがどうしてもわからない。時間泥棒が金貨を求めるなんて、そんなことは絶対あり得ない。時間泥棒は時間を盗むから、そう名乗りそう呼ばれていたのだから。

「……マキナ。俺って……何で死んだんだっけ？」

記憶が曖昧だ。特に、死ぬ直前直後。その間の記憶がすっぱり抜け落ちている。

「クロシエット……？」

「あ、……これから思い出すんだよな。何言ってるんだろっ俺は」
殺す相手、憎む相手を見つけた思いだした。二度と会えないと思った父と母にも一方的には会えた。でもまだ何かが足りないのだ。それがまだ思い出せない。

「この時計を直したら、貴方が殺された場所に行きましょう？……辛いことを思い出させたくないからって、つい後回しにしてしまっていたわ。ごめんなさい」

そう。それが一番大事なこと。復讐のためには動機が要る。怒りのままに、復讐心に支配されていた。だから少年も気付けなかったのだ。復讐に何が一番必要だったのか。

しかし街の外を見て、世界を知って、自分がいかにちっぽけな存在だったのかを知って、自分を見つめる自分の心に気付いたのだ。そうして此方を見ている自分が、もう一つの疑問を告げる。

「そうだ、母さん！！母さんはどうなったんだろう！！？」

父は死んだ。それは確かだ。それでも母はどうなった？それを知らない。家を出て行って、それから母はどうなった？時計を直すなんて、無理だ。それが気になって何も手に付かない。母を恋しがる少年に、少女は哀れみの目を向ける。

「クロシエット、会いに行っても辛いだけよ。彼女は貴方を抱き

締められないし、貴方は彼女をすり抜けるわ。そんな思いをしても悲しいだけよ」

「マキナ……」

「でも私は違う。私は貴方と同じ夕暮れを生きている。だから貴方の手を触れるし、貴方を抱いてあげられる」

少女に、捕まれた腕。抱き締められる互いに冷たい手に。温もりの通わない抱擁。

そのまま口付けられる。それに少年の胸は締め付けられる。鈍い痛みを発する。それは照れや気恥ずかしさを忘れさせるような鋭い痛み。

自分に協力してくれる、彼女のことは決して嫌いではないのに。それでも触れた場所から彼女の悲しみが伝わる。それを癒してやることも出来ずに、悲しみだけが響き合う。

「……………クロシエット。私のゼンマイを、もう一度巻いてくれる？」

冷たい口付けの後、少女は小さく呟いた。それが望みならば、見せようと言っただけ。

少年は頷き螺子を巻く。躊躇う理由はない。少年が言葉に従えば……時計塔の内部は相変わらず古ぼけたまま。巻き戻されたのは先のように遠い時間ではないらしい。しかし辺りは薄暗く、夜になっていた。

「クロシエット、歩きましょう？」

手を引かれ、時計塔を出る。そして家へと戻る。そこには少年自身が届かぬ。

「まだ、俺が生きてる……」

まるで夢でも見ているようだ。唯、沢山の時計に囲まれているのに、その思い詰めたような顔が妙に気がかりだった。やがて家から抜け出した、過去の自分を少女と共に追う。

やって来たのは記憶通り、大富豪の屋敷。その手に掴んだのは……臃気な記憶と同じ、重い金貨の袋。

「きやあつ！」

銃声に、驚いた少女が悲鳴を上げる。咄嗟に抱き寄せて庇ったが狙われたのは自分達ではない。そうだと少年は思い出す。弾丸も、夕暮れの人間には届かない。

「クロシエツト……」

少女は泣いていた。泣けない少年と、泣かない少年の代わりに。

「馬鹿……っ！貴方、馬鹿だわ！！」

どうして生きている内に。思う存分泣かなかったのか。少女にそう責められながら……少年は傷ついた身体を引き摺って赤い道を作る自分を見ている。

彼が打ち抜かれる度、死んだはずの自分が思い出す痛み、いたみ苦痛、いたみ激痛。

切り落とされた掌から、再び奪われていく時計。

（……ああ、そうだ）

俺はこれを見て、これを奪われてその無念で多くを呪ったのだ。

だから何処にも行けずに煉獄に堕ちてしまった。だけどこんな目にあって何故、何も憎まずにいられるだろう？

「……そうだ僕は、母さんのために盗んだんだ」

金さえあれば、助かる。病気が治る。借金も消せる。

それじゃあ、こうして金が届かなかった。それで、彼女はとうな
った？一人息子が死んだのだ。支えてくれる人もいない。病に蝕ま
れ傷ついた女が一人、どうやって生きていくのか。

シンクロする痛みを感じながら、足を引きずって街を駆ける。道
はもう思いだしていた。母の住まう部屋に向かった。

（良かった……母さん）

まだ母は生きている。その姿に安堵すれば日は登り噂が駆け回り、
顔色の悪い母が外へと飛び出して……時間泥棒に出会う。群衆に晒
された亡骸を人垣越しに見る。母は泣いていてくれた。鳩時計と同
じように。

それでも……それでも、彼女は抱き締めてはくれなかった。出来
なかったのだ。そうすれば、どうなるのかを彼女は知っていたから。
それでも心ない噂話、それを聞くに堪えかねて……彼女はその場
を後にする。

「母さん……待つてよ、母さんっ!!」

俺はここにいるんだよ。そう縋っても、この手はすり抜けてしま
う。少年には、フラフラと歩き出す彼女を止める術がない。彼女は
街から外れ……森へと歩き出していく。上空からは見えなかった。
生い茂る森の奥に広がる湖。暫し悲しげなその姿を水面に映すよう、
その畔に佇んで、そして足を進めていく。

「駄目だっ！！母さんっ！！」

引き上げようとしても、彼女の身体は沈んでいく。死んでいる人間はあまりにも無力だった。

やがて水泡のひとつも見えなくなつて、それでもまだ湖から離れられない少年のその背中を鳩時計が冷たい腕で抱き締める。何も言わずに、彼の代わりに泣きながら。彼女の手はとても冷たいけれど、背中に落ちる涙だけは妙に温かいもので。そのせいで湖の冷たさが際立つて、そんな場所に沈んだ彼女はもっと寒いのだろう。そんな思いが溢れ出す。

「マキナ……時計塔に戻るう」

「クロシエツト？そんなすぐじゃなくてもいいよ。私達に時間はないけれど、私達には無限があるんだから」

今日がない人間は失う明日もない。だから落ち着くまではゆっくりしていても良いのだと少女はそう優しく告げるが、少年は弱々しく首を振る。その目は夕焼け色の激情を、復讐を強く希う色。

時計を直せないとか、そんな考えはもう捨てた。時計を直す。そしてやり遂げる。復讐を開始する。

「マキナは音叉時計って言っていたよね。それはどうすれば完成する？」

「あの部屋に機関はあるわ。無いのは動力と、振動を生み出すための音」

「それは何？」

「動力は貴方の心。音は私が歌うわ。それで時計塔は甦る。そうすればこの街の全ての時計が目覚めるわ」

その鍵は、少年の心。その憎しみがどこまでこの時計塔に響くのか。その同調を引き出せば、時計塔は再び時を刻む。

心が足りなければ、時計には響かない。だからこそ落ち着いてから、少女はそう言いかけたが……初めて少年から抱き締められて言葉を失う。

「……どうしてマキナは、俺を助けてくれるんだ？」

「……………それならどうして貴方は、私に何も聞かないの？」

どうしてそこまでしてくれるのかわからないと言う少年に、少女が質問で返す。

「私の力とか、私の身体とか。私の知っていることとか……おかしいと思うでしょ普通は」

風景を巻き戻す不思議な頭の螺子。背中の白い翼。普通の女の子とも人間とも認められないようなその姿。それを訝しむのが当然だと少女は叫ぶ。しかし少年は落ち着いている。

「別に思わない」

「気持ち悪いとか……」

「思わない。マキナはいつも俺を助けてくれているじゃないか」

あの家から彼女を救ったこと。それ以上のことを十分されている。貰いすぎている。自分ばかりが。

「俺なんかの代わりに、泣いてくれてありがとう」

「クロシエット……」

「俺に出来ることがあるなら、マキナに恩返しをさせてくれない

か？」

「……………それって、何でも……………？」

「ああ」

「……………っ、私の……………“私の駒鳥になって”、“私を貴方の鳩に
して”」

どうせもう自分は死んだ人間だ。そんな人間に出来ることがある
ならば、どんなことでもしたいと思った。それで彼女が喜んでくれ
るなら。

「“私を助けて”、“私の傍にいて”……………“私を一人にしないで”
”、“置いて行かないで”」

寂しいのはもう嫌なのと、初めて自分のために泣く鳩時計。

それに少年が頷けば……………、時計塔の鐘が鳴る。手動だったはずの
鐘が、晩鐘を告げた。

12：鳩と駒鳥（後書き）

歌姫の存在だけ思い出せずになんか鳩時計と良い感じになってる時間泥棒。鳩時計は郭公だから、恋愛関係も郭公の雛の如くNTR解釈ぶっ込んだのがいけない。

街の外があんななってたなんて作者も今日知りました。鳩時計の正体を考えていたらなんかああった。彼女は別の街で作られた女の子なのかな。

13：籠の鳥

歌が聞こえる。異国の歌だ。正確に言うなら国という単位は些かおかしい。それでもそれは僕の故郷の歌とは違う歌。同じ言葉を話しているはずなのに、そんな風に感じてしまったのは何故だろう？確かに彼女たちの歌は美しい。でも、唯それだけだ。僕の心には響かない。

それは僕が共感できないからだ。別に彼女たちは歌が好きで歌っているわけではない。歌は手段で道具だ。なんとも近代的な価値観だ。この街もやがては滅びの道を辿っていくのだろう。僕の街と同じように。

「……結局こんなものか、何時の時代も」

言うなれば僕は飽いていた。厭っていた。

それはこの街に来てからも同じだ。最初こそ新鮮だった。まるで別世界。

それでもそこに暮らす者が人間である以上、根本的な物は何一つ変わらない。時間の流れも時代もそこには関係ない。僕はそんな風に変わらない人間をとて気持ちの悪いものだと思う。

僕の願いは星に叶えられ、僕はその輪から抜け出すことが叶ったけれど、それは後々僕を悩ませる問題へと姿を変えた。

人は僕を女王と呼ぶ。何でも強面の金貸し達を束ねる僕が、彼女の中から浮いて見えるからだと言う。それは僕が女のような美貌の持ち主だからとも言いかもしれない。

しかしここで一つ勘違いして貰いたくないのは、別に僕は一度も私が男だとは言っていないということだ。それでも彼らは僕を男と信じて疑わない。それがこの街、この狭すぎる世界、この時間の常識なのだ。

この街にはまず、変装という概念がない。時間を偽る浅知恵を出す者は居ても、姿を偽るといふ発想がない。不況に当てられて、人の価値観に歪みが生じたのは事実。死後の幸福より今の快樂。人はあまりに刹那的な生き物だ。生きるために食うために、人は神を忘れるだろう。とはいえ元々教会の教えが浸透している街だ。まだその発想には至らない。

良く言うならば、この時代の人々は純粹だということなのだろうか？男の服を着ていればそれは男、女の服を着ていればそれは女と信じて疑わない。

どうしようもないことはどうしようもないと考えて、それに抗おうとも思わない。そのどうしようもないことの範囲内で妥協し自分という虚像を作り上げる。そしてそれに満足しているような振りをするのだ。不満は勿論あるだろう。しかし発想がない。だから何処かで妥協するしかない。彼らは諦めを知っている。

しかし、ソネット。あの少女の恐ろしいところは神をも恐れぬ怖いもの無しの発想だ。彼女は正に時間泥棒。彼女が盗んだのは時代だ。彼女は数世紀先を生きている。時間泥棒を次ぐというその発想自体がまずこの時代の街ではあり得ない。だから、この街の誰もが彼女が彼と疑わないだろう。ここには男装の概念すらない。誰も僕の正体に気付かないように。

しかし、彼女はなんと諦めの悪い子だ。

僕は初めのうちは、それが子供ならではの諦めの悪さと我が儘なのだと考えた。その頑固さも、この時代の少女という生き物には珍しい才能だった。

今日も僕は彼女のその才能に呆れつつ、懐かしみ親しみを禁じ得ない。そしてその思いが僕の胸を焦がすのだ。金貨さえ溶かすような、どうでもいいと思わせる、その妙な心が僕に宿る。

というかこの時代に子供という概念はない。子供が子供になったのはもつと街が近代化してからのこと。この時代にとっての子供は働き手。既に社会の一員だ。

そんな中で子供らしさ、その一面を失わない彼女はとても魅力的に思えた。彼女は時に背いている。

そりゃあ街は狭いけどね、世界は広いよ。金を積みめばまた僕は他の街へと流れるだろう。そういう道も選べる。その先にはもつと歌の上手い歌姫、美しい美貌の人、幾らでもいるだろうさ。彼女は愛らしくはあるが、一番ではない。

だけどそんな他の少女に出会ったとしても、僕は今と同じ気持ちにはならないだろうと断言できる。金銭的価値しか彼女たちには見いだせないだろう。

彼女と彼女たちの違いは何か？僕は考える。

そうだな。唯……一つ言うならば、本当に楽しそうに彼女は歌うのだ。歌が道具ではない。

迷いが見える歌声。そんな曇った歌声は、人の耳には届かない。だけど僕には届いた。

歌を金儲けの道具にすることに葛藤を覚える。

資本主義にとけ込めない歪な少女。生きるために金は欲しいが、大好きな歌を金儲けの道具にしたくない。空っぽの籠を見て帰る彼女は少しだけ、悲しそうに……それでも嬉しそうに夜の街を立ち去っていく。

「やあ、お嬢さん。まだまだ浅いこんな夜更けにお帰りかい？夜はまだまだ長いのに」

「何よ？誰よ貴方。所場代でもたかりに来たの？」

「なるほど、君は自分にそこまで自身があるのか」

「う……」

「儲けがあるなら僕も考えるけど、儲けのない子から金を巻き上げる趣味はないよ」

「し、仕方ないでしょ！外で歌うの、初めてだったんだから！」
「そうだね、所々音を外してたし緊張でもしてたのかな。途中で
もごもごしてたし」

「だ、だったら悪い！？」

「でも、可愛い声だったよお嬢さん」

気まぐれで彼女の籠に財布の中身を落としてやる。どうせ金は腐
るほどあるんだ。腐らせておくのも勿体ないかなと思ったから、先
行投資でもしようと思った。この子は磨けば光る。また一つ新しい
金儲けの道具を手に入れるため、その投資。そう思った。でも……

「あ、ありがとう！」

ぱあと明るい笑顔になって笑って去りゆく彼女は、月の下に似合
わない、温かな笑みを持っていた。

こんな夜中に歌うよりも、日の下でもっと大勢の人の前で歌わせ
てやりたい。その方が金になるし、彼女の笑顔も映えるだろう。
その瞬間はそう思ったのだけれど……今となってはどうだろう？
実際彼女は時間泥棒となって太陽の下で歌うようになったけれど、
僕は複雑な気持ち。そこでようやく僕は、僕の本当の気持ちを知っ
た。

僕は彼女が好きだ。死なせたくない。

僕は彼女を愛している。だから誰にもその歌を聞かせたくない。
どうか僕だけのために歌って欲しいと、僕は願ってしまう程に。

＊

「まったく君は強情だね」

金貸しは肩をすくめる。ここまで自分の忠告を聞かない人間が今まで居ただろうか？金貸しは考える。少年もとい、少女は……女司祭に怒りを真正面から買い、牢屋にぶち込まれていた。

「ああ言った以上、あの巫女様は本気で君を殺しに来るよ。彼女は外の主に氣に入られているからね」

「外？」

「あ、氣になったのはそっちなんだ」

逞しい精神力の少女に、金貸しは舌を巻く。

「こうなった以上、この街で君が生きていく事は不可能だ。逃げるか死ぬかしか、君に未来はない。君のお兄さんはいつも逃げた。君も時間泥棒だというのなら、逃げてみたらどうだい？」

「兄さんは逃げてなんかないわ。いつも……戦っていたのよ。そんな解釈しか出来ないなんて、やっぱり私貴方のことは嫌いだわ」

「嫌いねえ。十分に結構さ。それは君が私を好きになる可能性と才能が十二分にあるということだからね」

「意味が分からないわ」

「よく言う話じゃないか。好きの反対は無関心って。無教養の君に教えてあげよう、つまり君は私を嫌う程度には私のことを愛していると言っことなんだ」

「ごめん、ますます意味不明なんだけど」

同じ言語を話していても、伝わらない言葉がある。人の心など得てしてそういうものだ和金貸しは知っていた。しかしそれでも諦められないものがあることも、知っていた。

「ソネット、君は子供だ」

「……どういう意味？」

その言葉に少女を馬鹿にした響きはない。だからこそ、少女も怒り出さずに聞いている。金貸しは少女に告げる。君が見ているのは現ではなく、幻であり夢なのだと告げた。兄の幻影を追い続けているだけの、悲しい時間泥棒に。

「君は別にこの街の人間なんか、どうなっても良いと思っている」
「……………」
「言い返せないだろうソネット？」

そう。少女はどうでもいいのだ。恩人である時間泥棒、それを金に目が眩んで、追い求めた街の人々。兄を見殺しにした人間達なんて、どうでも良い。それどころか憎む気持ちだつて在って然るべき。長らく彼女を見つめた、金貸しは少女の心を見抜いていた。

「君はこの街の人々のためではなく、クロシエツト君のために歌を歌っている」

新しい時間泥棒の歌う歌は過去への慕情。失った過去、取り戻せない時間。それが恋しいと鳴いている。届くはずのない歌を歌うことに意味などない知ってはいても、その無意味を繰り返すことで意味が宿るのだと信じて歌う。それは何よりも無意味だと、金貸しは目を伏せる。

「君はクロシエツト君と同じにはなれない。彼が君のように上手く歌えないように」

あのまま街を走り続けても、いずれ少女はこの牢へと来たはずだ。少女は少年ほど、早くは走れない。だから金貸しは、ここへ連れて

来た。自分が何をしているかを突きつけて、その先の死を垣間見させることで……息急ぐことを思い直させようと金貸しは考えたのだ。

「生きるって言うのは綺麗事じゃない。そう言うことを言っている人間から死んでいくのが世界つてもものだよ」

綺麗事では腹は膨れない。人を騙してでも、陥れてでも、人が生きるには金が必要だ。

「幾ら君が歌が好きでも、君の声が魅力的でもだ。君は多くの人を振り向かせることは出来なかった。それは多くの人が君の歌に共感しないからだよ」

「……共感、しない？」

「目にも見えない、形にも残らない商品に価値を見いだせるのは私のような金と暇を持て余している人間だけだ。君の歌うべき場所は街中でも法廷でもない」

今の時代に、この街で歌は流行らない。その日暮らしもままならぬのに、誰が歌を買うだろう？歌に金を払う価値を感じない。そんな見えない物を買うくらいなら、他の物を買う。それがこの街の多くの人。連中が歌う女に価値を見出しても、歌だけに価値は付かない。歌はあくまで付属品だ。

それでも金貸しは自負している。そのどちらが欠けても自分は彼女を求めはしなかっただろうと。

「ソネット、歌が人に響くか響かないかを分けるのは好意なんだよ。人が歌を愛すれば、人は歌姫までを愛するだろう。逆に人が君を愛すれば、人は君の歌まで愛するだろう。君が彼を思うように」

時間泥棒の歌は決して上手な物とは言えない。それは誰もが認め

ている。はつきりいつてあの少年は音痴だった。それでもこの少女が今も彼を思うのは、二人を結びつけるのが歌だったからだ。時間泥棒が歌わなければ、少女は時間泥棒に何て何の感情も抱かなかったはずだ。そしてこの少女が歌姫として歌わなければ、少年も金貸しも彼女を何とも思わなかった。

歌と歌姫そのどちらに価値があるのかは鶏と卵。ただ一つだけ言えるのは、恋は盲目と言うことだ。金貸しは考える。

顔の見えない相手の歌に人は恋をすることもあれば、顔だけ好きな相手の下手な歌まで愛せるようになることもある。

唯人が愛しているのはそのどちらかであり、両方であることはない。唯、付属品として嫌いではないだけ。だからこそ金貸しは少女の歌に自分が魅せられているのだと考えていた。しかしそれが誤りだと気がついた。そして歌は手段であると思いついた。

「歌って言うのはサインだよ。私はここにいと伝える手段だ。

それに気付かない人も多いだろう。それでも私は君を見つけた。そして私は君と出会った。これはちよつとした奇跡なんだよソネット」

「そんなの偶然よ」

「いいや、偶然という言葉は恋の前では必然に姿を変えるのさ。

私は君の価値を知っている。街の大勢の人間が見過ごしている君の価値を知っている。だからこそ私は嘆かわしい」

金貸しは思う。少女がどうでもいいはずの大勢の人間のために歌っているのを見るのは辛いのだ。もう二度と届かない、例え彼が生きていたとしても叶うはずのない恋の歌。その音を探し続ける、聞いてしまう自分の耳が辛いのだ。

彼女の声が好きだ。彼女が好きだ。それでもその歌の真意を知るからこそ、そんな歌を歌わせたくない。これならまで出会った頃の空っぽの歌の方が余程美しく響いた。彼女の清らかなる無知が愛おしかった。

「それは勿体ないことだよ。価値の解らない相手に商品を垂れ流しにするなんて。君は時間と金銭を損しているんだよソネット」

「レーヌ……」

「それでも私は違う」

最初はその歌に惹かれた。この原石はダイヤに変わる。金儲けのための掘り出し物。そう思っていた。でも本当にそれだけなら、ここまでこの胸を焦がさない。効率の良い金儲けの方法なら、別に彼女でなくても良いのだ。もっと金になりそうな歌姫は居る。何故彼女でなければならぬのか。それを考えた先にあったのは、別の答えだった。

「ソネット。私は君で金儲けをしようとは思わない」

「……え？」

「勿体なくなっただ。他の連中にこんなに素晴らしい君の歌を、聞かせてやることが」

少女の歌に価値を見出したのは。少女に惹かれたのは。自分が先であつたはずだ。

（時間泥棒？笑わせるな。あいつが盗んでいったのは……時間なんて物じゃない。ああ、でも……言うなればやはり時間だ）

少年が盗んだのは過去。少女と金貸しが過ごした時間。語らいを。その全てを彼は盗んだ。彼の死後もその時間は帰っては来ない。少女の心は少年に奪われたままだ。

（死人風情が……）

未来も明日もない人間が。今を生きる彼女を奪おうとしている。彼女まで同じ場所に連れて行くつもりか。そんなことはさせるものかと金貸しの瞳が燃える。

「君を危険に晒したくない。私はずっと君の歌を聞いていたんだ」

「……………レーヌ」

「別に今すぐ頷いてくれとは言わない。明日でも明後日も十年後でも百年後でも構わない。それでも私は君が好きだ。君が頷いてくれるまで、何時までもそれを言い続けるよ」

「それ……………ストーリーカーよ？」

「生憎そんな罪状僕の金の力の前には意味をなさない。つまりは愛の前に全ては平伏すと言うことだね」

「違うと思うわ。大体私なんかの何をそんなに気に入ったのよ？」

呆れたような少女の声。それに金貸しは考える。それは考えた末の結論だった。

「それは勿論……………何でだと思う？」

「わからないから聞いてるんだけど」

下手なことを言うよりも、含みを持たせた方が彼女の興味を惹くことができると考えて。そしてそれは正解だった。この少女は、いや少女という生き物は得てして好奇心の塊である。それを金貸しは知っていた。少年と姿を偽っていても、本質までは変えられない。どうしても良いはずの相手の話を聞きたがる程度に、この歌姫も少女ではあった。

「……………そうだね。それじゃあ、一人の男の話をしようか？」

「はあ……………？」

それが金貸しの話にどう繋がるのかわからない。そう疑問符を浮かべる少女に、考えてご覧よと金貸しは笑ってみせた。

「どうせ夜は長いんだ。君がここから逃げる気がないっていうんなら余計にね。君が彼女の前で歌を歌うというのなら、知っていて損はない話だよ」

「ところでソネット、聞くだけ無駄だと思うけど、君は神を信じるかい？」

「そうね、兄さんと母さんと父さんあたりを生き返らせてくれたら信じてやってもいいわ。あとこの街の不況とか失業と流行病も一晩くらいで解決してくれたら」

「うん、君のそういう世俗的な所も魅力だと思うよ。……まあそう言うと思ったけどね」

少女は救ってくれる相手を神と呼ぶ。救わない者など崇めない。つまり少女の世界には、神など存在しないのだ。そんなわけのわからないものを信じてやる義理はないと言わんばかりの不貞不貞しさは、なるほどあの女司祭の怒りを買っただろう。金貸しは少なくとも今、その発言をあの女が聞いていないことだけを安堵する。

「君のその考え方は、私のそれとよく似ているよ」

「私が貴方に？」

そんなはずがないと驚く少女の言葉に、金貸しは苦笑する。

「まあ、残念ながら私は死んだことがないのでね。常世の国の神の有無なんてものはわからない。だけど現世には、それに似た者がいるのは知っている。……意外って顔だねソネット？」

「そりやあ……まあ。他の誰がそんなことを言い出したって、金貸しレー又だけはそんなこと言わないものだと思っっていたわ」

「まあそうだね。神とは言ってみただけで、そこまで仰々しい者でもないな。精々……王つてところか。だけどソネット、王のように傲慢なこの街の権力者が大富豪止まり。言葉と存在が噛み合っていないとは思わないかい？」

街は国。国は世界。ならば、権力者は王、王が神。そういうズレが生じている。そのズレをただしたのなら、その男は神と呼ばれる存在だ。金貸しがそれを告げれば、少女は言葉遊びだわと溜息を吐く。

「確かにね。言葉遊びと言われてしまえばそれまでさ。だけど、そうも言えない理由が一つある。ソネット、君は人の寿命を知っている？」

「平均寿命は20何年くらいだったかしら？」

「まあ、平均はね。でも出生からしばらくを越えた人々の寿命はもう少し長い。それでも50まで行けば随分長生きだとは思っけど」

「つまり僕が言いたいのはその以上を100も200も300も越えるような者は化け物みたいなものだよねってことだね。畏怖の念を込めて僕は神と呼んであげているわけだよ」

*

昔々あるところに一つの街があった。そんな街の中に一人の男が居た。男は人間だったが、やがて神と呼ばれるものとなる。それは何故か。彼は永遠を手に入れたから。

その永遠の前に、人は何とも儚い物だ。人とか身を隔てるものは時間。彼が神と呼ばれるのは、彼が永遠を生きるからに他ならない。

つまりその世界では永遠さえ手に入れてしまえば幾らでも神という名の生き物は生まれただろう。唯、彼しかその境地に辿り着かなかった。故に神は一人。それだけだ。

短い時間を生きる人間は、時間を貴重な物と考える。しかし彼にとつて時間とは何とも暇なものであり、常に無駄に垂れ流されていくものだつた。

やがて神はその長すぎる時間に嫌気が差した。それはあまりに退屈だつた。永遠という物は一人で過ごすには拷問のような物だつたらしい。だから彼は、考えた。もう一人、神を作ろう。

彼はその長すぎる時間を用いて、沢山の人形を作つた。それでも永遠まで辿り着いた人形は一つもなかった。だから彼は待つことにした。人々がいつか永遠に辿り着くことを、長く気長に。

彼にとつて人間とはとても愚かなものだつた。だがそれ故観察対象としてはこれ以上に楽しい暇つぶし道具もなかったのだ。

「昔々の話だよ……」、金貸しはそう切り出した。それを少女は聞いていた。しかし話が進むにつれて理解は遠離つていくばかり。だから暇つぶし云々のその下りで、とうとう口を挟んだ。

「言っている意味がわからないわ」

それがあの女司祭とどう繋がるのかまったくわからなくもあり、少女は少々気分を害した。理解できない話とは、それだけでつまらない物なのだ。

「つまり彼は永久機関をお望みということだね」

「永久機関？」

「人類の知識と夢の結晶さ。でも彼の望む永久機関は人であり人でない物。機械であり機械でない物。ちぐはぐで矛盾したものだ」

「それって……何なの？なぞなぞ？」

「ああ。つまりは時計だよ」

「どうしてそれが時計なの？人は時計なんかじゃないわ」

「いいや、時計だよ」

「……嘘？」

「私も君も、ここに一つ時計を飼っている」

自分と少女の胸を指さして、金貸しはそう笑った。人も時計なのだ。

「私達は人間だと思っ生きてるね。そうだ私達の身体に埋め込まれた機械なんてありはしない。物質的には人は人だと言えるだろう。だけどねソネット。私達は皆、仕組まれて居るんだよ」

金貸しはそう言った後、柔らかに笑って話題を変えて来た。

「ソネット、君はこの街の外を知っているかい？」

「いいえ、知らないわ。貴方は知ってるの？」

「ああ、勿論。この街でそれを知っているのは精々私とあの巫女、それからあの大富豪くらいなものさ」

少女が首を振れば、当然だと金貸しは頷く。それは街の権力者三人だけが知ることだと言う。

「時にソネット。君は外を知らない。知らないにもかかわらず、外に行きたいとも思わない。それはどうして？」

「だって、外には出るには凄いお金払わないといけないって言うし。それに外は街よりも危ないところだって……」

人は基本的に街の外を知らない。その狭い世界が人生の全て。外を知らずに生きて死ぬ。まるで大昔の農奴と同じ。それがこの世界

の人間という者だった。しかしその絡繰りを知っている金貸しは、その言い伝えが馬鹿馬鹿しいと思うのだ。

「そうか。君はそれを信じたのか。そうだね、それが常識だ。それが仕組まれていると言うことなんだよソネット」

当たり前を疑わない。それこそ人が仕組まれた機械である証なのだ和金貸しは皮肉めいたことを言う。少女は少しだけ自分が馬鹿にされているような気分になった。しかし金貸しの目は、少女を馬鹿にしているような色は見せない。それが不思議だと少女は首を傾げた。

そんな少女の様子を微笑みながら見守る金貸し。そうして金貸しは小さく呟きもたらした。

「私は外を知っている。……私は外の人間だからね」

「ええっ!？」

「前の街で金を集めてね、移住する権利を手に入れたんだ。そしてそれが認められた」

敢えて、誰とは言わない。少女がそれを聞き返す前に金貸しは言葉が続けてしまった。恐らく故意的に。

「私がこの街でここまで力を得たのは、知っているからさ。時の流れ、人が次に行く出来事。私の街ではもう本になるほど昔のことさ」

外から来た金貸しには、この街の人が望む商品が解る。時代と金の動きが解る。今この街が何を必要としているかが解る。だから湯水のように金が手にはいるのだ。

「つまり貴方は未来から来たとしても言いたいのか？」

「まあ、時間旅行のようなものとは思うね。街はそれぞれ全く異なる時代を生活している。この街は大分遅れているよ。作られたのもまだ新しい部類だからかな」

「……なんだかスケールが大きすぎて、にわかには信じられない話ね」

「そうは言うけれどソネット。君は国とか王っていう単語は知っていてもその概念を知らないだろう？」

「そうね。よく物語には出てくるけど」

「おまけこの街、更にはこの国の名前を君は知らない」

「貴方は知っているのか？」

「いいや僕も知らないよ。あの男は特別名前に意味を見出さないお人だからね。長く生きすぎるとどうでもよくなる。実験途中の作品に名前なんて必要ないってことだね」

世の中には意外とどうでもいいことって多いからねと笑う金貸し。少女はその言葉の否定も肯定も出来ずに固まった。

「ああ、でも完成したら名前が付けられるよ。名前は永久機関^{パーペチュアル}。

彼はそう言っていたな。久々の話し相手に彼ははしゃいでいたのか多くを教えてくれたよ。まあ、気まぐれだろうけど」

どうせすぐに死ぬ人間。一人に教えたところで情報は伝わらない。そういう気まぐれ。もし何かの過ちでそれが知られたとしても何ら困らない。暇を持て余した神からすれば、計算外の問題はむしろ大歓迎。即座に迎え撃つ準備を始めるだろう。神なんて名ばかりだ。慈悲なんてあったものじゃない。

「彼女とやり合うつもりなら、彼女と同じ情報を知っておくべきだと思っただよ。それを何処まで理解できるかは、君次第になる

けどね」

「レーヌ……」

「……あの巫女だけどね、彼女は神を信じている。なんせ本人に会ったことがあるんだから当然か」

「神に……会った!?」

「ああ。彼女は元々時計工の家の娘なんだよ」

「そうだったの?それがどうして聖職者なんか……」

「彼女の作った天文時計は、美しいものだったからね。パーツとしてあの人は欲しくなったんだよ。そしてそのパーツが似合いそうな、天文学の発展している街に飾らせたんだ。そこは時計作りを蔑ろにして空ばかりを見上げていたからね。あの人としてはもう少し、そっちの街でも機械技術に目覚めて欲しかったんだろう」

その際に、あの巫女は身分と権威を手に入れ……そして外と世界の在り方を知ったのだ。この街に来る直前、神という男とテイタムを過ごした時に本人がそう言っていたのを金貸しは思い出す。

「まあその功績を認められて、彼女は教会を建て直すための協力者を得た。時代的にもそろそろ改革が必要な時期だったしね。女性権力者の台頭による女性の身分向上っていうイベント発生要因で、そろそろ歴史を一段階レベルアップさせようとしたのかもしれないな」

「……………なんだか、聞いててもよく解らないわ」

「要するに二人の利害が一致したってことなんだろうね」

文字通り神の加護を得ているあの巫女に、真正面からぶつかったところで少女に勝ち目はない。金貸しの言葉に、少女もしばし言葉を無くす。そんな彼女に追い打ちを掛けるよう、金貸しはそつと語り出す。

「だけど私が読んだ本の中に、時間泥棒という人間は存在しない。君たちは歴史のイレギュラーなんだ」

「………どうということ？」

「他人のために時間を盗もうなんて人間、私の知る歴史の上には登場しなかったんだ。だけど違う名称なら、違う行動なら、似たような人間も居たよ」

「それがどうかしたの？」

「そういう者は大抵良くない終わり方をする。出る杭は打たれるって言うだろ？そういうことだよ。君がどんなに正しくても、優しく素敵な女の子でも、歴史は君を排除する。君の兄さんがあんな終わり方をしたように」

「………」

「仕組まれているというのはそういうことだよ」

「……………そう、かしら？」

「ああ、断言できる。君が正しくても、君は裁判に敗れるだろう。見せしめに殺されるだろう。今の時代はそういうものだ」

金貸しが強く言い切れば、少女が初めてその顔に陰を落とす。諦めの悪い少女はこの土壇場でも自分があの女司祭を負かす未来を信じていたのか。確率はどんなに低くても0ではないと思っていたのか。やはり彼女は子供だな、金貸しはそう思った。

確かに神はいる。しかし神は救わない。それがこの世界の理だ。救う手立ては他のもの。

「でも、それは今の時代。この街での話」

金貸しは薄く笑う。その笑みに少女が顔を上げる。この男は何を言い出したのだろう？そんな疑問を浮かべ。

「あの街ではどうしようもなかったこと。それを新しい街は叶え

てくれた」

新しい部品、新しい機械。新しい街。神だって何かを始めるには、金が必要だ。だから金を積みめば神は願いを叶えてくれる。神は永遠の命を持つてはいるけれど、元は人間。万能などではないのだ。唯無限の時間を持つているだけの人間。効率化を図るためには、優秀な人間を街から吸い上げ、傍に置くこともある。唯、すぐに死んでしまうから面倒だとは言っていた。

神の家は機械だらけだ。何でもかんでも機械が行う。必要なのはその機械の修理をする人間。機械の修理をする機械を作ってもその機械を修理する機械を作らなければならずそれが壊れたらエンドレス。つまり神がどれだけ人の短命を嘆いても、ある程度の人間は必要なのだ。その人を雇うためには、その者にも褒美を与えなければならぬ。部品を買うためにもやっぱり金は必要だ。

好きな街への居住権と、外を自由に歩く権利。神はそれ売り、資金調達をしている。

そんな嫌な意味で現実的な話をされた少女は、神という概念自体が変な方向へ行ってしまったように思っているようで、怪訝そうな顔になる。そんな彼女に金貸しは苦笑。

「ソネット。私の金を持つてすれば、今一度……君と僕は逃げられる。他の街へと逃げられる。過去に行っても良い。未来でも良い。ことと似たような街でも良い」

もうこの街に幸せがないのなら、どこか遠くへ行こう。その誘いは確かに甘美なものだ。

もう家族は誰もいない。そして外という未知の世界。好奇心がないわけではない。

まだ知らない歌。知らない楽器。知らない景色から浮かぶ言葉。聞こえるメロディー。

そこに広がるものを見てみたいと思わないわけではないのだ、少女も。だけど未練が後ろ髪を引く。

「君の身に降りかかっているどうしようもないこと。そこから君は逃げ出せる。余所の街に行けば、君は何の罪人ではない。幾らでも好きな歌を歌って良い。本当は嫌だけど、君がそうしたいというのなら、オペラホールでもなんでも貸し切って君の歌声を大勢の人間に聞かせてあげよう」

そして金貸しの最大の譲歩。そこで少女は常々からの疑問が再び頭を過ぎる。確かにこの男に告白はされたが、自分にそこまでの何かがあるとは思えないのだ。

単に幼い歌姫が物珍しかった、だから売り飛ばせば金になる。そんな理由でまとりつかれていたのだと思っていた。それなのに金儲けの道具にしたいのでもないと言われたら、その根底が覆る。

「どうして貴方はそこまで、私に言ってくれるの？」

「君は覚えていないかもしれないけれど、私は君の最初のファンでスポンサーだからね。君を金儲けの道具にするのは諦めたけど、せめて原価回収分は君に生きて貰わないと」

「……………そういえば、そうだったわね」

なんだか懐かしいわと少女が笑う。くすくすと。

それは一瞬提案を受け入れてくれた、そう思わせるには足る笑顔。それでも金貸しはすぐに気がついた。

少女の笑みは、懐かしい……………つまりはこの狭い街の中、それでも随分遠くに來たのだと過去を懐かしむ笑み。別離故の、微笑みだ。

もはや何を言っても届かない。金貸しは確信する。少女は答えを決めていた。それでも言わずにはいられない。問答無用で諦められるほど、金貸しも大人にはなりきれていないのだ。

「ソネット！君は馬鹿だよ、そんな自ら死に行くようなことを……！」

「兄さんは、いつも走っていた。それは逃げているように見えたくも知れない」

引き留める金貸しの言葉に、少女は自らの兄を語り始める。

「だけどそれは兄さんなりの戦いだっただのよ。私は兄さん程上手には走れないなら……私は他の戦い方を選ばなければならないんだと思う」

「……ソネット」

「貴方は兄さんが逃げたって言ったわ。そうよね、確かに他の人からすればそう見えるのかも知れない。だけど私がここで逃げたら、時間泥棒は本当に逃げたことになってしまう」

俯いて、再び顔を上げたとき少女は……その目から一切の迷いが消えていた。ここにいるのは時間泥棒。歌姫でも少女でもない。

その目が語る、犯行予告。裁判の日、この街から時間を盗んでやるうという大きな野望。少女はまだ、諦めていないのだ。本当に死んでしまうまで、愚かな少女は諦めを覚えない。或いは死した先でも。

「私は兄さんが逃げなかったと思っている。だから……私は、僕はここから逃げられない。逃げちゃ、いけないんだ」

14：永久機関の恋心

人は愚か。人は愚か。人は愚か。

例え永遠に辿り着いたところでそれは変わらない。人という者の本質がそれである以上、時の長さという概念は関係ない。

その男は永遠を手に入れた称号に、自らを神とし人も彼を神と呼んだが、あくまで彼が人であることを私は知っている。死なないから、永遠を生きるから神なのではない。

奴は愚かだ。故に奴は人間だ。神などであるはずがない。

その証拠にだ。その男は思い通りの女一人作り上げることが出来ないのだ。

積み上げられたがらくた。壊されたオートマトンの女達。彼女たちは皆一様に男を嘲笑っていた。……そう、死して尚。この男の愚かさを知るといふ、その点で……この生きてはいない女達の方がこの男より余程賢い生き物だ。それなら神と崇められる男の本質を笑うこの女こそが神か？いいや、あくまで彼女は人形だ。

さて、時間泥棒と歌姫の話に戻る前にもう一つ無駄話は如何？

神と人の違いは何か？簡単に言くとそれは殺人という概念。

人は人殺しを嫌う。私達悪魔が人を殺すことを何とも思わないように、人は獣を鳥を虫を魚を簡単に屠る。それは何故か？彼らが我々ではないから。つまり人が禁じるのは境界の内側での殺し。これは同属殺し、所謂共食いということだ忌み嫌われている。罪を或いは罰を恐れ、法という概念に縛られているだけの者もあるだろうか。

……ちよつと口調が固くなり過ぎたわね。話の主人公が少年だから、観察する私の言葉からも女らしさが抜けて来たのかしら。まあ、堅苦しい文章はこの程度にしておきましようか？せっかくの脱線だつて言うのに、そんな気分になれなくなつたら嫌なもの。

要するに私が言いたいのは、この本の中。この時間泥棒の少年が暮らす世界には、神と呼ばれる人間がいるのよ。実際我々悪魔が存在するんだから神の否定は私もしない。だけどその世界にはいないと断言してあげる。

だって私はそういう機械仕掛けの神の物語に興味がないの！そういう世界を見つけても余程のことがない限り観察しないし執筆したりなんかしないわ。

かみさまーができてーはいめでたしめでたし？クソファック！やってられない。悪魔はそういうの嫌いな。お解り？私はあくまで人間の世界で人間が足掻いたり苦しんだり狂ったり大暴れしたりする姿にぞくぞくするの。だから一つの本の中で契約するのは基本的に一人と決めている。パワースプレって面白くないし。私は人間の願いを叶えてあげる優しい神様じゃない。私は悪魔だから、私の目的のために力を貸すだけ。だから契約してすぐ願いを叶えたりしない。私が与えるのは願いを叶えるための手段。そこから彼や彼女がどう動くのかを私は観察したいわけなのだから。

だからね、デウス・エクス・マキナなんてもつてのほかよ。クソ食らえってわけ。

だから私はその男が永遠の時間を持っていても神なんて呼ばない。彼は何でも思い通りに出来る訳じゃないんだもの。唯時間があるっただけ。それが神の証明にはならない。結局は唯の人間。そいつは唯の人間。吐き気がするくらいエゴ丸出しの醜い人間。

私も悪魔だし両面性は持ち合わせているし？男心も女心も多少なりとは理解できるけど、気持ち悪いと思うことはあるわね。

特に女女女、女の尻ばっか追いかけてる男はろくなのいないわ。特に酷いのが現実では追いかけないで頭の中だけでそういうことをする奴。その歪んだ情熱が生み出す物の醜悪さと言ったら、私はパス。そういうのが好きな同僚もいるけど私はパス。実際貴方もそういう男にねちねちと千年万年単位で付きまとわれてみなさいよ。私

の気持ちが解るでしょうよ。

女のことばっか考えてるからそうなるんなら、たまには男の尻でも追いかけて精神衛生守ったらいんじゃないの？ あら？ 人間の世界じゃそういう錯誤がまだあるのね。 本当人間つくでたらない。 どうしてそんなに小さな事に拘るのかしら。 普通だと思ってることが私達悪魔から見えれば本当におかしなことなのに。 え？ 脱線が酷いですって？ あらもうこんな時間。 それじゃあ気を取り直して、ごほん。 そろそろ話を戻しましょうか？

そう……だからその男！ 最高の女を作り上げようとしているそいつ！ そいつははつきり言つて変態よ！

自分に従順で？ 可愛くて？ 綺麗で？ だけど自分のお願いは何でも素直聞いて？ 自分だけを心の底から永遠に愛してくれる？ そんな女が欲しいですって？

その同意した奴、気持ち悪い。 あんた気持ち悪い。 一回くらい女になってみなさいよ。 やつてらんないから。 私は悪魔。 悪魔はその辺さばばと行くわよ。 基本悪魔なんて連中ビッチは褒め言葉とかそういう世界なわけよ。 だからそういう変態一途はこっちの世界じゃモテないわよ。

私もねー、いつそ常時男悪魔になって女の子侍らせてる方が楽しいかもしれないと思つた時期もあるけど、私そこまで生身の相手に興味ないんだわ。 だからこうして遠い世界を観察してる方が余程有意義で楽しいってわけ。

だからはつきり言うけど、私のある同僚は私達の世界じゃかなり変わり者。 私はああいう男嫌いだわ。 だからその男に似た系統のその神という男も私は大嫌い！

なのにどうしてそんな嫌いな男の話をここで取り上げるんですって？ それには浅いわけがあるのよ。

私はそいつが嫌い。 だからそいつに苦しめられた彼女にちよっと同情している。 べ、別に同病相憐れむつて奴じゃないわよ！ 私は普

通の愛の恋には興味が無いの！だからあの子とその子の行き先暗そうな愛にぞくぞくしてるだけよ！

だって、鳩時計っていうあの子……普通の人間じゃないわよ。っていうか人間でもないわよ。

そう、だから気になったの。だから彼女についてちょっと遡って色々見て来たの。彼女自身覚えていないことだから、それを彼女の視点で持ってくるのって難しそうだったから。

歌姫の裁判長引きそうだし？時間泥棒の子達の話はちょっと、今回は止めて……鳩時計が作られる工程でも見てみるのはどうかしら？あれで時計工だなんて言うんだからお笑いだわ！

＊

どくん、どくん。刻んでいる。刻まれている。少女は思う。

その音はまるで時計のようだ。ああ、そうか私は時計なのか。そう思うと悲しくて、頬が涙を伝う。しかし彼女はそれが雨の所為なのかそうではないのかよくわからない。

男だ。男が笑っている。血だまりに横たわる私の胸から何かを探るようがさごと……そして音が遠くなる。私の時計が奪われたのだ。

男の手の中に私の時計がある。それを掲げて男は愛おしそうに私の時計を見て笑う。抜け殻の私になんか何の興味もないように。

＊

「ウエスperl。君の名前はウエルperlマキナ。機械仕掛けの夕暮れ。それが君の名前だよ」

目を開けた鳩時計に向かって、その男はそう言った。鳩時計はその意味が分からなかったので首を傾げた。

それに対し男は、自分を何と呼べいいのか解らなかつたと思つたのだろ。 「私のことはお父様で構わない」……男は笑つてそう言つたけれど唯何となく、それがとても気持ちの悪いことだと鳩時計は思つた。

彼はとても優しく笑っているのに、その笑顔に何故か嫌悪感を感じている。

どくんどくと、冷たい身体の中で時計の音がする。

男に連れられ鳩時計は鏡を見せられる。そこにいたのは真つ白な髪と翼を持つ美しい少女。その顔に見覚えはなかつたが、夕焼けのように鮮やかな赤い瞳……それが何処かで見たことがあるような気がして、頭が痛んだ。不思議なこともあるものだ。鳩時計はそう思う。

鳩時計は理解している。自分が機械であることを。だから頭痛など感じるはずがないのだと言うことも。それでも何故か頭が痛い。そんな此方の様子を気付きもせずに、後ろから鏡を覗き込む男は薄ら笑い。顔はそこまで悪くないが、何処か陰気な優男。何か内に強大な物……コンプレックスを抱えていそうな男だと鳩時計は思つた。

「目は青い方が良いと思つたんだが、意外と赤も悪くなかつたな」

鳩時計に誰かの面影を見るように、男はそんなことを言つていた。

「それで、お父様は何のために私を作られたんですか？」

気持ち悪いと思ひながらも鳩時計は言葉を紡いだ。その声に男は満足げに頷いて、また妙なことを言い出した。

「さあ我が娘！笑つておくれ！」

「嫌です」

鳩時計は満面の笑みでそれを丁重に断った。答えは簡単。気持ち悪かったから。

「素晴らしいっ!!」

何故かそれに男は喜んだ。確かに鳩時計の笑顔は愛らしい物ではあったが、それでここまで男が喜ぶ物か？

「君には……お前には感情がある！これまでの屑共とは違う！あつ！遂に完成したのだ！私の最高傑作！自動人形！最上の美しさと永遠の命っ！我が伴侶に相応しいっ……世界最高の女が誕生した！」

「何の話ですか？」

「お父様はもうお終いだ。今度からは語尾にハートマークを付けて新妻のようにあ・な・たと呼んでくれ！」

「嫌です、気持ち悪い」

鳩時計の言葉に男は絶句。まさか拒絶されるとは思わなかったのだろう。愚かなことにこの男は自分を中心に世界が回っているとも思っていたのか。

「良いですかお父様。私は今生まれたばかりです。赤子も同然です。そんな私にそんな事を語る貴方はおかしいです」

出産後すぐ妻の傍で父親が我が子を口説き始めてあまつさえ襲おうとでもしてみなさい。何時の時代でもそんなことはじめたら嫁に半殺しにされるに決まっています。とは鳩時計の言葉。

つまり貴方は今半殺しにされてもおかしくないことをしようとしたのだと反論する娘に、父であるその時計工はやれやれと肩をすくめた。

「一から口説き落とせと？それでは生身の女と変わらないじゃないか」

面倒臭いと言わんばかりの男の態度に、鳩時計は苛立った。その当然最初から自分がこの男に惚れていなければならないという理不尽な設定に腹を立てたのだ。

身体は機械かもしれない。けどそんな理由で私は愛する人も自由に使わせては貰えないのか。感情なんて無意味な物何故この男は作りたがった？私が苦痛なだけではないか。

そう思うと鳩時計は無性に腹立たしくなる。

機械は人ではない。だから人権がない。当然のように。当たり前なことが当たり前ではない。だから従順にこんな気に入らない男の永遠の慰み者になれと？嗚呼、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いっつっ！

「仮に私に感情があるのだとしても、それが貴方を愛する理由にはなりません。第一私には貴方が何なのかさえ知りません。そんな相手をいきなり愛せるほど私は不良品ではありません」

「それなら話が早い。ついておいで。私の偉大さを知ればお前もすぐに私の虜になるだろう」

歩き出した男に続き、機械だらけの部屋を出て、長い回廊を抜けた先……そこはあまりにも高い場所だった。

「ここは……？」

そこは天空に聳え立つ塔の上。遙か下方にはぐると円に囲まれた無数の町がある。その円はまるで時計の文字盤。町は時計。ぐるぐると回って回って……寂れて壊れて死んでいく。

「お前はこの世を統べる男の伴侶になれるんだ。光栄に思うと良い」

「何なんですか、貴方は」

「昔はしがない時計工。時計を作り続けた甲斐あってか、今は神と呼ばれる職に就いている。どうだい？惚れ直しただろう？」

「いいえ、全然。全く興味が持てません」

女心の解らない神はそれから幾日も幾日も機械人形を口説く。けれど彼女は頷かない。その内痺れを切らして来た男。

「ええい！何がそんなに気に入らないと言うんだ！」

「私は基本的に年上より年下の男の子の方が好きです。自分より一回りも二回りも年上を恋愛対象になんておぞましくて出来ません」

「この分からず屋がつ！もうお前など知らん！」

「きやあつ！お父様！？」

「お前は今日から真正正銘、鳩時計にしてくれるっ！」

少女の白い足首に無骨な足枷、鎖。それを部屋へと繋ぎ、その部屋を一軒家へと男は変えてしまった。男はその家を時の狭間へと放り投げ、また長い永い時を機械乙女作りに費やすのだった。

一方捨てられた鳩時計とは言えば、夕暮れの街に迷い込み、囚われの身。鎖は機械仕掛けで長くなったり短くなったり。彼女が外に出られるのは一時間に一度、日に二十四回。助けを求めて外に出るも、人々に彼女は見えない。違う時を生きているのだ。

朝から夕方、夕方から夜……グルグルと回る円盤のような世界。回っているのが自分なのか世界の方なのかも解らなくなる。どうせ何も変わらない。それが解っていながら日に二十四度、助けを求めてしまうのは……あくまで父に抗うためだ。

いつか助けてくれる誰かを諦めるなら、あの男に縋る他に無くな

る。おぞましさと嫌悪感しか感じない相手の愛を受け入れるしかなくなる。そんなのは嫌だと鳩時計は何度も何度も扉の外へと助けを求める。それでも同じ台詞は飽きるもので、次第に鳩時計は歌うようになる。歌は時間を忘れさせてくれる。悲しい永久機関は、自ら死ぬことも出来ない。それが出来ないように作られている。だから死という発想がない。退屈な永遠を唯ひたすらに、いつか出会うであろう誰かを待ち続ける。

そうして、遂にその日が来た。相手が如何に平凡な少年であつても惹かれずにはいられないほど永い時を彼女は待っていた。だからこそ、彼女は彼にどうしてと問われても困るのだ。

鳩時計が時間泥棒に協力するのは至極当然の流れだ。彼女にとって待ち望んだ人。その人の願いは何でも叶えてあげたい。それが自分の幸せから、遠離らない限りには。

「大好きよ、クロシエット……」

鳴り響く晩鐘は、教会の鐘。まるで祝福の響きのようだと言った鳩時計は笑う。永遠の愛を誓わせて、愛しい人に口付ける。

「貴方となら生きられる。私は永遠を」

「ま、マキナっ」

「何？照れてる？クロシエットったら可愛い！」

「そ、……そうじゃなくて」

「そうじゃなくて、何？」

彼が答えられないのをいいことに、鳩時計はまた少年に口付ける。鳩時計は知っていて話していないことがある。それはあの歌姫のことだ。あの歌姫と時間泥棒の結びつきはあまりに深い。彼が彼女を思い出すようなことがあつてはならないと、鳩時計は直感していた。ようやく待ち望んだ人。それを奪われては敵わない。

（人間なんかに、生きている人間なんかに、クロシエツトは渡さない）

彼は死んでいる。私と同じ、生きてはいない。だから解り合える、通じ合える、何もかも。今の内に、何も思い出せないくらい、私を好きになって貰う。思い出したとしても私を選んでくれるくらいに私を好きになって貰う。じゃないと嫌。じゃなきゃ嫌。

あの子は生きてる。まだ誰とでも出会える。だけど私にはこの人しかない！この人でなければ嫌！

鳩時計は強く強く、そう思う。この激しさ、この身勝手さ。それが心のある機械の証。完全なる不完全。定められた人ではない、人を強く求める心。それが自分に語りかけてくるようだ。

お前はちゃんと生きている。確かにいるんだよ、と。

14：永久機関の恋心（後書き）

人間の心臓を時計に組み込む時計神。ろくでもねー男です。生身の女は自分を裏切る。だから機械の女を作ろう。

しかし機械的な女には滾らない。限りなく人間のような機械が欲しい。

それが完成したと思ったら、それは身体は機械っただけで反応は生身の女と同じ冷たい態度。そんな踏んだり蹴ったり。

鳩時計側からすれば覚えてないとはいえ、自分殺されて時計にされたんだから愛せるわけがないだろうって話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1568o/>

時間泥棒

2011年11月23日14時48分発行